

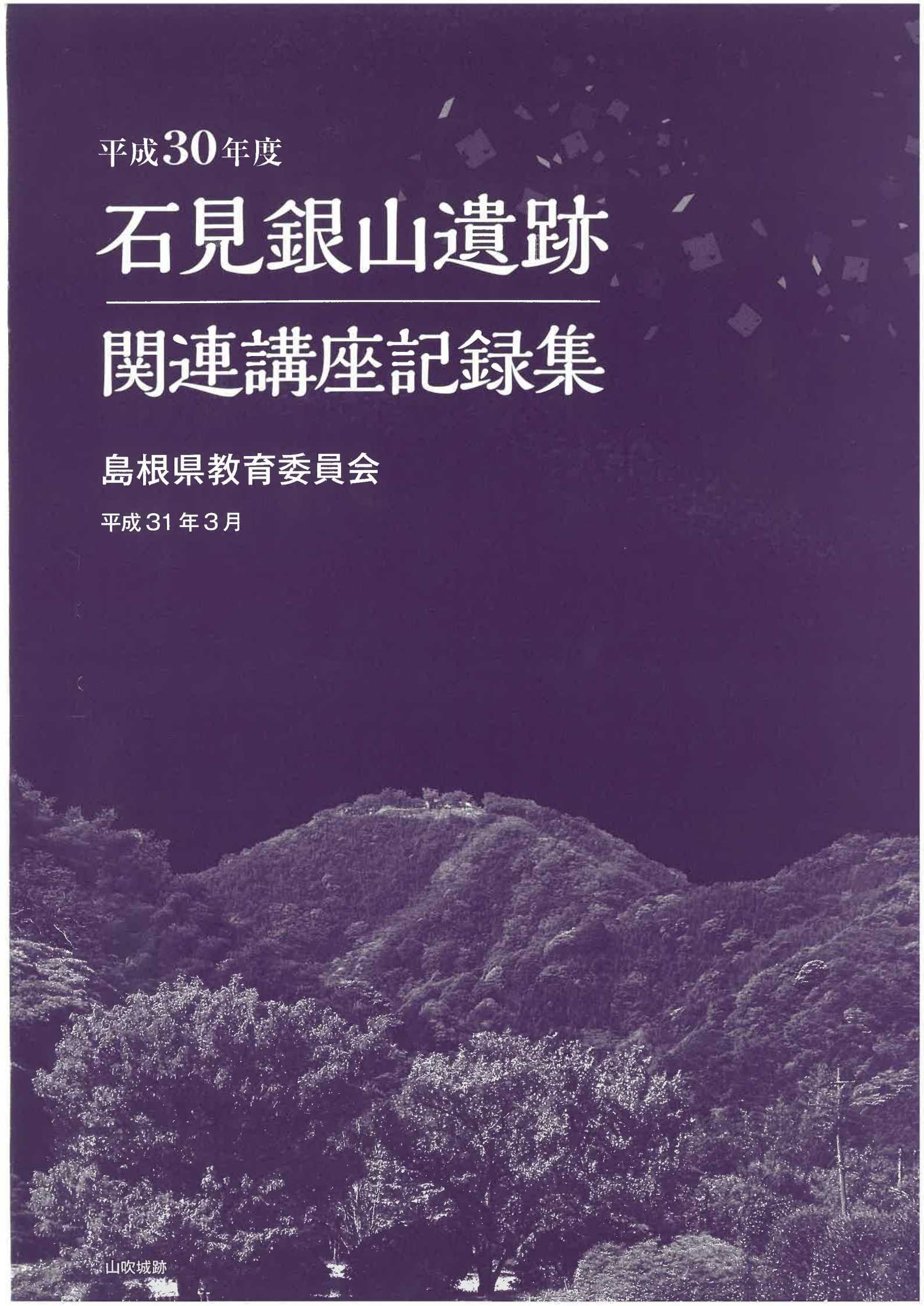
平成30年度

石見銀山遺跡

関連講座記録集

島根県教育委員会

平成31年3月



山吹城跡

開催概要

島根県教育委員会では、世界遺産「石見銀山遺跡とその文化的景観」の価値に対する理解を深めていただくこと、最新の調査研究成果を広く情報発信することを目的に、「石見銀山遺跡関連講座」等を開催している。本事業の概要は以下のとおりである。

平成30年度 石見銀山遺跡関連講座

[益田会場]

「中世石見国の繁栄～東アジアと日本海を舞台とする交易に迫る～」

- 1) 日 時 平成30年10月28日（日）13：30～16：00
- 2) 場 所 島根県芸術文化センターグラントワ（島根県益田市有明町5-15）
- 3) 内 容 講座 「石見銀山の開発と中世西日本海地域の交易」
講師：目次謙一氏（島根県古代文化センター専門研究員）
報告 「港湾遺跡から見た日本海交易～15・16世紀を中心に～」
講師：佐伯昌俊氏（益田市教育委員会文化財課主任主事）
- 4) 主 催 島根県教育委員会
- 5) 共 催 益田市教育委員会

[安来会場]

「奪い合う銀山！石見銀山をめぐる争奪戦の歴史」

- 1) 日 時 平成31年2月9日（土）13：30～16：00
- 2) 場 所 和鋼博物館（島根県安来市安来町1058）
- 3) 内 容 講座①「石見銀山争奪戦」と戦国大名
講師：伊藤大貴（島根県文化財課世界遺産室研究員）
講座②「石見銀山を取りまく山城－築城と改修の痕跡をさぐる－」
講師：山根正明氏（元松江市教育委員会史料編纂室専門官）
- 4) 主 催 島根県教育委員会
- 5) 共 催 安来市教育委員会

[広島会場]

「奪い合う石見銀山」

- 1) 日 時 平成30年8月25日（土）13：30～15：15
- 2) 場 所 中国新聞ホール（広島県広島市中区土橋町7-1）
- 3) 内 容 講座①：「石見銀山の開発とその時代」
講師：仲野義文氏（石見銀山資料館館長）
平成30年9月9日（日）13：30～15：15
講座②：「毛利氏と石見銀山」
講師：長谷川博史氏（島根大学教育学部教授）
- 4) 主 催 島根県教育委員会
- 5) 共 催 中国新聞社

目次

平成30年度 石見銀山遺跡関連講座

益田会場

「中世石見国の繁栄～東アジアと日本海を舞台とする交易に迫る～」

「石見銀山の開発と中世西日本海地域の交易」

島根県古代文化センター専門研究員 目次 謙一氏……………02

「港湾遺跡から見た日本海交易～15・16世紀を中心に～」

益田市教育委員会文化財課主任主事 佐伯 昌俊氏……………14

安来会場

「奪い合う銀山！石見銀山をめぐる争奪戦の歴史」

「石見銀山争奪戦」と戦国大名

島根県文化財課世界遺産室研究員 伊藤 大貴氏……………30

「石見銀山を取りまく山城－築城と改修の痕跡をさぐる－」

元松江市教育委員会史料編纂室専門官 山根 正明氏……………42

広島会場

「奪い合う石見銀山」

「石見銀山の開発とその時代」

石見銀山資料館館長 仲野 義文氏……………58

「毛利氏と石見銀山」

島根大学教育学部教授 長谷川 博史氏……………80

平成30年度 石見銀山遺跡

関連講座 1

中世石見国の繁栄

～東アジアと日本海を舞台とする交易に迫る～

日 時 平成30年10月28日（日）

13：30～16：00

場 所 島根県芸術文化センター グラントワ（島根県益田市有明町）

石見銀山の開発と中世西日本海地域の交易

島根県古代文化センター 専門研究員 目次 謙一 氏

私の話のタイトルは「石見銀山の開発と中世西日本海地域の交易」でして、たいへん幅の広いものです。

そこで、全体の構成を4つに分けまして、「石見地域と大陸との交流」、2番目を「石見銀山開発の背景」、3番目を「銀の流通と大航海時代」、そして最後、4番目を「西日本海地域の交易の変容」としています。

石見銀山でたくさん銀がとれた、戦国時代から江戸時代はじめにかけての時期を中心として、石見国が面する日本海での交易をとりあげてお話します。その前段の、銀産出以前の石見地域の交易の状況から入っていききたいと思います。

石見地域では、古くから九州北部を通じて大陸と交流をしていました。例えば、この益田市内にもそのことを物語る資料がありますので、はじめにご紹介します。

続いて、石見銀山の開発へ向けて時代が動いていく中で、大きくかわってくると思われるのが、現在の山口県域を中心に西日本でも有数の実力を誇っていた大名、大内氏です。一方、アジア全体へ視野を広げると、16世紀にかけての中国大陸では銀が大量に必要とされる状況になっていました。中国大陸の銀需要が、交易を通じて石見銀山開発の背景に考えられるということを見ていきます。

3番目、「銀の流通と大航海時代」は、石見銀山遺跡の世界遺産としての価値の一つを扱います。西欧文明と東アジアの文明との出会いを媒介する銀を、石見銀山をさきがけとする日本の鉱山が送り出したことなどにふれます。いわゆる大航海時代に、ヨーロッパ勢力が東アジアまでやってきた、そのきっかけになったのが日本の銀であるということです。銀の対外交易を通じて西洋文明が日本列島に伝わったということもお話しします。

そして、銀産出と流通による社会、経済の大

きな変化を受け、西日本海地域、石見を含む山陰地域の様子がどういうふうに変わっていったかを、石見銀山の様子を中心にして、遠隔地との交流、流通をたどってみます。

まとめとして、石見銀山の開発が持つ意義と、この石見地域がもともと日本海交易を通じて広く開かれていた地域だったこともふりかえっていただければと思っています。

さて、それでは本題に入っていきます。「石見地域と大陸との交流」として、当地益田市内にごぞいます豊田神社さんご所有の焼き物（スライド1）をご覧ください。これは中国大陸でつくられた焼き物で、名称を陶製経筒五口として鳥根県の指定文化財になっています。12世紀につくられたものです。時代が下り、江戸時代の宝永3年（1706）、石塔鬼王帝釈天王国社経塚（益田市横田町）で掘り出されたものです。調べていくと、福岡県にあった古代の役所、大宰府とかかわりが深いものということが明らかにされてきました。大宰府の官人たちが中国大陸に注文してつくらせたもので、それらが益田の地で仏教教典の埋納に用いられたということです。経塚とって、お経を容器に詰めて、例えば山の頂上に埋めたものです。その容器に中国大陸で焼かれた陶器を持ちこんでいることから、大宰府の官人や、海を渡って日本にやってくる中国人商人たちと益田地域、石見地域の人たちとは密接にかかわっているのではないかということが指摘されています。平安時代から石見地域では、九州北部を通じた大陸との交流があったことを雄弁に物語っているのがこの焼き物たちであると思います。

さて、中世西日本海地域としてここでは、日本海に面した港がある若狭国小浜（福井県）から山陰地域を主に経て、九州の博多（福岡県）、それから壱岐、対馬（ともに長崎県）あたりまでを含む広い範囲を考えておきます。

平安時代の事例に続き、鎌倉時代の事例で

す。鎌倉時代の文永8年（1271）、ちょうど元寇のころ、京都近郊にある高神社の造営をするときに各地から材木が調達されたことを書き上げた史料があります。その中に石見産の樽（くれ）として、石見の産物である材木が載っていました。

また、肥前国櫛田神社（佐賀県）では、鎌倉時代の正和3年（1314）に、社殿造営に際して須川の材木を求めています。須川は、津和野町日原のうち益田市匹見町に近いあたり、そこから材木をとってこようということが、櫛田神社にかかる古い記録に残されています。注目すべきは、この櫛田神社が、中国大陸と往来する日宋貿易の拠点の一つであった肥前国神埼荘内にある神社だということです。同社が日宋貿易にかかわっていた可能性も考えられています。

また、当時の中国大陸の宋王朝では、経済が発展して森林伐採も進んだといえます。つまり、各地の大規模建物の建設などによって材木が不足しているような状況で、日本からの輸出品としては材木が結構な位置を占めていたのではないかと、ということも近年明らかにされています。この石見産の材木も、櫛田神社を通じて、ひょっとしたら中国大陸へ輸出されていたのかもしれないという可能性が浮かんでくるのではないのでしょうか。

時代はさかのぼりますけれども、正治2年（1200）、鎌倉幕府ができて間もないころに、京都の貴族九条兼実の日記「玉葉」に「石見唐船」、「石見国に唐船があらわれた」という記述が見られます。唐というのは大陸からやってきた、あるいは大陸のものという意味ですから、わずか4文字の記述ですが、中国大陸からの船の到来があったのかもしれない。そしてまた、材木が日宋貿易を通じて中国大陸へ運ばれていったのかもしれないということが、私ども古代文化センターが昨年度末に刊行しました研究論集の中で触れられています。東京大学史料編纂所に島根県ご出身の西田友広さんという方がいらっしゃって、石見地域の研究を進められる

中で、材木のことを指摘されています。石見地域と大陸との交流が、平安、鎌倉時代と見えてきています。続いて、室町時代のお話をしたいと思います。

室町時代の応永32年（1425）に朝鮮王朝の船が難破をして、石見国長浜（浜田市長浜町）に漂着しました。長浜地域一帯の領主周布氏が一行を保護して、対馬の早田左衛門太郎という人物のもとへ送り届けています。その早田氏へ周布氏は、朝鮮王朝へ漂着した人々を帰してやってほしいということをお願いしました。早田氏は書契という文書と朝鮮王朝への進上品を用意したうえで一行を送り届けたということが、朝鮮王朝側の公的な記録「朝鮮王朝実録」に残されています。

このことを契機として、周布氏は、朝鮮王朝から直接の行き来を認められるという特別待遇を受けます。具体的には、貿易のために必要な図書という銅製の印鑑を与えられました。また、年間に船1そうまでという、進上品を持っていくときの決まりなども正式に認められました。朝鮮王朝の記録では、その後約80年近くの間、49回周布氏の船が来ているとあります。山陰地域の中ではこの周布氏だけが図書を持ち、正式の通交をしていたことが記録でわかるわけです。ちなみに、周布氏の居城は現在も残っていて、鳶巣城跡（スライド2）という城跡が浜田市周布町の国道9号線の南側、周布川沿いにあります。周布川の河口付近に長浜の港があったでしょうから、付近一帯を中心にして、朝鮮王朝との交易が行われるような環境があったということだと思います。

このお話のポイントが、周布氏からいったん、対馬の早田氏に漂着した人々が引き渡されている点です。対馬の早田氏は文書や朝鮮王朝への進上品などの準備をしていますから、朝鮮王朝との通交の実務も担ったのではないかと推測されています。

進上品の中には、アジアの南方で入手できる、赤色染料の原料やコショウがあります。い

ずれも日本列島では得られませんので、やはり南海との交易の中で手に入れたのでしょう。それから日本刀、環刀二柄。盤二十。盤というのは大ぶりの陶磁器だと思います。大陸産の陶磁器であれば、やはり交易で手に入ったということですね。

こうしたものを準備したのが対馬の早田氏であることから考えてみると、朝鮮通交が活発に行われた15世紀の室町時代から16世紀の戦国時代にかけては、早田氏ら対馬の人々、加えて国際貿易都市であった博多の商人たち、文書をつくるのに優れていた禅宗寺院のお坊さんたち、対馬の島主宗氏。そういった人たちが朝鮮王朝との通交で主要な役割を担ったとされています。これらの人々とつながりがあったのが、石見長浜の領主周布氏であったと考えられるわけです。

近年の研究によると、博多の商人や禅僧、対馬の宗氏などが他人の名義を使って、自分たちで勝手に朝鮮王朝へ使いを送ることをかなり頻繁にやっていたのではないかと指摘されています。偽使、偽りの使いと言われ、相当数存在したと考えられています。

日本国内が政治的に混乱した応仁の乱のころ、応仁元年（1467）、朝鮮王朝へ石見国各地から一度にたくさんの使者が派遣されています。これらも偽使ではないかと言われていますが、中には「益田守藤原朝臣久直」という、益田氏と思わせたいのかなという人物も朝鮮王朝の記録には出てきます。こういった実在が疑わしい人たちをどう考えるか。偽使があらわれる背景には、実際に通交、交易に携わった博多の商人や禅僧、対馬の人たちが、交流を介して石見地域の状況に通じていたことがあるのですね。つまり、お互いに行き来をする中で相手をよく知っていたので、彼らは石見地域の人々の名義を使うことができたのだろうと推測するわけです。これは石見地域の人たちからしてみれば、預かり知らぬところで名前を勝手に使われたということではなくって、むしろ、自分たち

の名義を対馬や博多の人たちが使ってもいいよ、と了解していた可能性があるのかもしれませんが。要するに、お互いの交流が背景に存在したから、偽使も出現したのではないかと考えられているわけです。

石見地域と対馬の人々の交流・交易を示す史料を掲げたいと思います。宗貞国という対馬島主が、島内にいた商人、塩都留主殿助に与えた権利の証明書です（スライド3）。文明6年（1474）ですから、先ほどの石見国に偽使たちが現れてから後の史料です。塩都留氏に対して、九州、それから石見や若狭、朝鮮王朝という広大な海域での往来や交易を含む諸権利を認めるということと、商売をしたときの、例えば10分の1の税負担を免除することが書かれています。これを見ると、対馬の商人が石見地域にやってきていることがわかりますし、別の史料からは、逆に石見地域の人が対馬へ出かけて行って、さらに朝鮮王朝の国内へ向かっていることも明らかになっています。室町時代には、石見地域と博多、対馬、そして朝鮮王朝の間で広く交流・交易が行われていたわけです。

続きまして、「石見銀山開発の背景」です。山口市にあります瑠璃光寺（スライド4）の五重の塔です。大内文化の粹を集めた建造物として有名です。ここではゆかりの大内氏に焦点を当ててお話ししたいと思います。

大内氏は室町幕府の有力守護大名です。現在の山口県にあたる周防、長門や、福岡県から大分県にかけての筑前や豊前といった玄界灘に面する地域を中心に、西日本有数の勢力を築いていました。大内氏は一時期石見国守護を務めた南北朝時代から石見地域とのかかわりを持ち、大名山名氏一族が継続して守護となる応永6年（1399）の応永の乱以降も、長く石見国内に政治的影響を及ぼしていたと考えられています。大内氏は、石見地域の領主、益田氏を初め、先ほどの周布氏や三隅氏、福屋氏などと、軍事動員や所領等権益の保証などを通じて関係を深めていったことが明らかにされています。石見国

の領主たちは、大内氏と関係を取り結ぶ一方で、領主同士で軍事、政治的な相互協力の取り決めに広げることで、石見地域の秩序を維持していました。石見銀山の開発が始まるとされる年の10年前、永正14年（1517）に、大内義興という当時の当主が石見国守護となり、名実ともに石見国全体を支配していきます。

大内氏は対外交易に熱心で、朝鮮王朝への通交は、応永2年（1395）からその滅亡に近い弘治3年（1557）、16世紀の半ばまで行われました。その志向や実力に加えて、長期にわたって通交したことや地理的な近さもあるのでしょうか。朝鮮王朝側では、大内氏は室町幕府の将軍に次ぐランクに位置づけられるなど、優遇される形になっています。交易の利益から税徴収が行われた赤間関（山口県下関市）や当時の国際貿易港博多、通交や対外交易時の重要な場所を大内氏は領国内で押さえていて、遣明船の交易や朝鮮王朝との通交にそれらの拠点を活かしてかかわっていました。南海産の産物や日本国内の日本刀、銅、硫黄などを、遣明船貿易では明朝へ持ち込んでいて、かわりに中国国内で製造された銅銭や絹織物、絹等を持ち帰っていました。

遣明船貿易については、室町幕府の将軍が権利を占有していましたが、実質的にはその権利を大名や貴族、有力寺社等へ分け与えることによって将軍への求心力を高めつつ、その権利を獲得した諸勢力が実利を得ていくという仕組みに変わっていきます。この仕組みに、室町時代の宝徳度（1453年）遣明船から大内氏も参加していきます。途中、ライバルの室町幕府管領細川氏と争うこともあって、約40年中断しますが、大内氏が押し立てた将軍が京都に返り咲いた永正8年（1511）以降、遣明船貿易にも復活します。細川氏と使節同士が明朝の現地と争った、大永3年（1523）の寧波の乱を経て、天文年間、1530年代から40年代にかけては、大内氏が独占的に遣明船を2回派遣しています。これには、博多の交易に達者なお坊さんたち、

そのネットワークを押さえていたことが大きいと考えられています。そのネットワークの一つに幻住派という禅宗内の一派があり、同派のネットワークは対馬にも伸びていて、朝鮮王朝との通交でも力を発揮したと考えられています。

さて、大内氏と貿易ということでは、御当地益田にかかわりの深い人物がいます。雪舟です。応仁元年（1467）の遣明船で中国大陸へ渡って、日本へ帰ってきてからすぐれた絵画作品をたくさん描いています。その一つが、文明11年（1479）の賛を持ち、益田氏当主の晩年を描いた肖像画の傑作、益田兼堯像です（スライド5）。毎年春と秋に益田市立雪舟の郷記念館で公開されています。益田氏が雪舟を益田へ招いて肖像を描いてもらった背景として、益田氏が中国で絵画を学んだ雪舟の実力を評価していた、つまり、文化への理解も持ち合わせていたからだと思います。

遣明船貿易や朝鮮通交に話を戻します。16世紀はじめ、1510年に三浦の乱が朝鮮王朝で起こります。このとき、朝鮮国内に定住して交易に携わっていた日本人たちが騒動を起こしたため、国外へ追放されます。あわせて、3つあった交易港も1つだけに制限されてしまいますので、交易に対する影響は大きいものでありました。また、中国大陸のほうでは、先ほどふれた1523年の寧波の乱によって、遣明船貿易がいったん途絶えてしまいます。いずれも日本側としては困ることなので、大内氏は遣明船貿易の復活をめざしていきます。中国側でも、実際に商売に携わっていた沿岸部の商人たちの間で、密貿易をやっているという動きが広がっていきます。

このころの中国明王朝の状況を見ると、明朝が北方の異民族、騎馬民族と軍事的に対立している中で、その軍事費が相当な額になり次第に銀を充てるようになっていました。銀で徴収する税制への改革や、国内経済規模の拡大が進むにつれて、明朝の国内では莫大な銀需要が生じ

ていったのです。

この状況は、隣国の朝鮮王朝でも十分承知をしていました。朝鮮王朝は明朝へ献上品を送る関係にありましたから、明朝の需要に応じて銀の貢納額がふえていくのは困るという恐れがあったようです。時代は下りますが、16世紀半ばには、銀の貢納をやめてしまおうという動きも朝鮮王朝の中でありました。ただ、銀と交換に届けられる明朝の品々に対する欲求は大きかったものですから、朝鮮王朝内でも銀需要は相応に存在したと考えられています。したがって、16世紀の前半、石見銀山が開発されるまでは、明と朝鮮の両王朝で銀の流通量増加が求められている、そういう状況があったわけです。そこをふまえて、次の「銀の流通と大航海時代」に移ります。

「オルテリウス作韃靼図」(スライド6)は1570年、ヨーロッパ製の地図で、韃靼として北東アジア地域を広く描き、その右側の海中に日本列島を描きこんでいます。当時のヨーロッパには日本の形が十分に伝わっていませんでした。ご覧のとおり日本列島は不十分な形になっていますけれども、日本海側には銀鉱山の記述があります。銀の産出と日本が結びつけられてヨーロッパに知られているということがうかがえます。この銀鉱山こそ石見銀山で、ヨーロッパの人々が日本をより詳しく知るきっかけになったのが、石見銀山であったと言えるでしょう。

江戸時代の「銀山旧記」という書物では、大内義興が治める石見国で大永6年(1526)、博多の商人神屋寿禎が出雲国鷲銅山へ銅を買い付けに行く途中、日本海の船上から南の山に光を見て銀山を発見したということが書かれています。清水寺(大田市大森町)に残る江戸時代初めの寛永2年(1625)の棟札にも、同様に銀山発見のことが大永7年(1527)の出来事として記されており、それに基づいて大永7年を石見銀山の発見年とする説が唱えられています。

また、同じ「銀山旧記」によると、天文2年

(1533)、神屋寿禎が博多から技術者を招き、銀鉱石に鉛を加えてから銀だけを取り出す、灰吹法という技術を導入して、石見銀山現地で銀をつくり出せるようになったことも書いてあります。

これらの記録が伝えるところは、石見銀山の発展を後世に振り返る中でまとめられたものだと考えます。記録のいう石見銀山発見や灰吹法より若干年代は下りますけれども、現地の遺跡や同時代史料にも石見銀山の開発が確かめられます。

遺跡は簡単にご紹介します。画像(スライド7)は石見銀山中心部の仙ノ山を上空から見たところ。山の頂上に近い標高500メートル以上の一帯にまで鉱山町が広がっていたことが、発掘調査で明らかにされました。町の痕跡は16世紀末まで確認されていますが、さらに古い時期のものがより深いところに残っていると推測されています。銀を扱う工房の跡で灰吹法に用いられた鉄鍋が見つかったことは、たいへん貴重な発見でした。

石見銀山の発見からしばらく後の対外交易関連史料として、「朝鮮王朝実録」をみてみます。灰吹法が伝わったとされる1533年から10年もたない1539年に、朝鮮王朝では、銀精錬の技術を倭人(日本)に教えた罪で地方の役人が処罰されるという事件が起こっています。また、朝鮮王朝から明朝へ行く使者が、倭銀、日本の銀を大量に持っていくのは問題だと指摘されていて、銀が日本から朝鮮王朝へどんどん流れ込んでいくことがうかがえるわけです。

1542年には、約3万トンという膨大な量の銀を対馬の僧安心が朝鮮王朝へ持ち込み、綿布などの下賜を望んだという事件も起こります。この僧は日本国王の使いと偽っています。別の史料に基づく研究から、僧安心は幻住派に属して博多聖福寺と関わりがあったことが明らかにされています。したがって、この事件の背景として、博多の諸勢力や大名大内氏、さらには大内氏の領国であった石見銀山のある石見国とのか

かわりが連想されるでしょう。また、聖福寺には神屋寿禎の子供が僧として籍を置いていたもので、二重の意味で、石見銀山と朝鮮王朝へ持ち込まれた3万トンの銀は関連があったのではないかと指摘されています。朝鮮王朝内へ石見銀山のものを含む日本の銀がどんどん流れ込んでいくような状況にあったというところですが、1540年代以降は、大陸の銀需要に直接応えていくかのように、中国大陸と日本列島の間に銀を介した交易が盛んになっていきます。

これを行ったのが、大陸沿岸部にいた中国人の密貿易商人たちを中心に、ヨーロッパからやってきたポルトガル人、日本人も加わった、いろんな人たちの集団でした。いわゆる後期倭寇と呼ばれている人たちです。その集団のトップの一人だった王直という人物は、もともと華南地方の出身でしたけれども、長崎県の五島列島に本拠を置いて交易に携わって数多くの配下を抱え、大きな勢力を誇っていました。銀を扱う交易の利益とその魅力がきわめて大きかったのだと思います。

今、後期倭寇の中にはポルトガル人も入っていたと言いましたけれども、鉄砲やキリスト教がこのころ日本へ伝えられています。

1543年の鉄砲伝来、1549年には、フランシスコ・ザビエルが来日してキリスト教を伝えました。いわゆる大航海時代における西洋と東洋の文明の交流が本格的に始まっていくということで、その意義も大きいと思います。もう一つ、キリスト教の伝播とともにヨーロッパ勢力が交易も始めていくことが注目されます。中国船やポルトガル船は、中国や東南アジアの産物を日本へもたらし、それらと交換した日本銀を使って交易を推し進めていきました。

さて、対外勢力による交易が次第に盛んになっていく一方で、日本では大内氏が、天文8年(1539)、同16年(1547)の2度にわたり遣明船貿易を行っています。けれども、天文20年(1551)に当主大内義隆は家臣の下克上によって亡くなります。後継者として大友氏から迎え

られて擁立された大内義長も、その6年後に毛利元就に滅ぼされてしまうため、長らく交易を行ってきた大内氏がなくなってしまいます。大内氏滅亡の直前、弘治3年(1557)には、九州北部にあってヨーロッパ勢力とのかかわりが深いことで知られる大友氏が、大内氏と共同で遣明船貿易を試みましたが、明朝への入貢は果たせませんでした。

このころ、毛利元就に同調して大内氏領国の長門国へ攻め込んでいた津和野の吉見氏は、大内氏の館があった山口へいち早く入った時に、大内氏が所持していた遣明船貿易に用いられる日本国王之印や、朝鮮王朝への通交時に必要な通信符という印鑑などを入手したと考えられています。これらはその後、吉見氏から毛利氏に献上されました。それらのリストは現在、毛利家の古文書の中に含まれ、現品も一括で残っています。遣明船貿易の際に用いられる日本国王之印を納めていたのは、鮮やかな朱塗りの中国製の箱で、立派なものです。後に毛利氏は、対馬の宗氏と書状や贈り物のやりとりをしています。朝鮮通交の再開を視野に入れていたのかもしれない。

しかし、大内氏滅亡と前後するころには、これらを必要とする公貿易でなくても、さきほどの後期倭寇の人たち、中国船やヨーロッパ勢力によって、海外の産物が日本へもたらされる状況となっていた。そうなりますと、日本国内で銀の需要が増し、その国内流通が次第に盛んになっていった。そういう流れを考えてもいいのではないかと考えています。

さて、「西日本海地域の交易の変容」についてです。(スライド8)は、毛利氏が正親町天皇の即位にあわせて献納したとされる、御取納丁銀です。石見銀山産の銀で制作されたことが確かな、現存1枚限りの貴重なものです。右側の画像が、石見銀山遺跡の鉾山町跡から見つかった、江戸時代はじめに年代が下りますけれども、貴重な灰吹銀です。

古くから、石見地域は日本海を通じた交易で

他地域とかかわってきました。今回は平安時代以降における、北部九州、対馬などとの深いかかわりを見てきました。これが、石見銀山の開発と銀の流通増加によって、大きく変わってきます。具体的には、鉱山に向けて大量の物資と数多くの人々が遠くから集まってくるということです。鉱山一帯が大消費地になったことで、日本海での交易もスケール感が増した印象があります。

例えば天正3年(1575)、薩摩国の武将、島津家久という、大名の弟にあたる人が伊勢神宮へお参りをした帰りに、日本海側を東から西へ船も使って移動していきます。家久は石見銀山に宿泊した2日後には温泉津に泊まり、その翌々日に浜田に着いてからしばらくの間、2週間風待ちをしています。石見銀山を訪れてから浜田滞在中の日々で、薩摩・大隅という、島津氏領国の武士や船を持っている人たち、商人たちと連日出会って、「スス」と呼ばれているお酒を一緒に酌み交わして親睦を深めています。家久が石見国内へやってきたときに、たまたま地元薩摩・大隅の人たちと数回出会ったという頻度ではありません。石見地域から遠く離れたところの人々に頻繁に出会うということは、その人々が商売など目的を持って石見銀山一帯へ足しげく訪れていたからではないかと考えられます。家久が訪れた温泉津は現在、港町かつ温泉のある町、世界遺産として、古い家並みや町の区画を江戸時代から受け継いで残しています。

この時期には、石見地域よりみて西の九州からだけでなく、東から石見・出雲地域へ訪れる人々もいました。永禄6年(1563)には、現在の出雲市大社町にあります宇龍浦を、北陸地方より遠くの北国船ですとか、因幡や但馬の船、それから唐船が訪れています。出雲地域の大名尼子氏は、入港する船にかかるが税を、宇龍浦を領有していた日御崎神社に取り分として与えています。中でも唐船には「唐物役」という高級な輸入品への税ではないかというものもあり

ます。各地の船がもたらすいろいろな種類の交易品が、出雲大社門前町として栄えていた杵築のすぐ近くの宇龍でうかがえると思います。

同じころ、杵築の商人坪内氏は、米・鉄・絹布などを陸路石見地域へと運んでいました。おそらく石見銀山での取り引きも行われた可能性があるでしょう。石見銀山とその隣近所だけではなく、周辺地域でも交易に伴う遠隔地からの人やモノの行き来が見られることは、たいへん注目されることだと考えられます。

その大きな交易の流れの中心部にあたる石見銀山で暮らしていたのは、実際に鉱石を掘り出す人たちだけではなく、生活や流通、宗教、政治にかかわる人たち、商売や輸送を手掛ける人々、神主さんやお坊さん、一帯を治める毛利氏の家臣たち、さまざまな人たちが居住していました。中には瀬戸内、関西地方から来た人たちもいました。例えば、池坊という生け花の流派がありますけれども、その先生・師匠にあたる人も確認されています。

石見銀山の現地支配を担った生田就光という武士は、自身にゆかりがある賀茂神社(邑智郡邑南町)に対して、同社でお持ちの重要文化財の絵馬の制作を京都狩野派の絵師に依頼しています。その数カ月前には、石見銀山の鉱山町にある長楽寺の厨子を同じ狩野秀頼が手がけています。したがって、この絵師が鉱山町にしばらく滞在していた可能性を、島根大学の長谷川博史先生が指摘されています。

さまざまな人々の経済活動を支えた石見銀山の銀は、毛利氏によって、元亀2年(1571)の厳島神社遷宮の経費にあてられ、大量に投入されていきます。また、石見銀山現地の住民も厳島神社への信仰を深め、多くの人々が奉納をしています。廻廊の造営にかかるその記録によれば、石見国は安芸国について多く30件近くもあり、その大半が石見銀山の住人とみられ、初めてとれた銀を奉納した例も確かめられます。銀が石見銀山現地だけで使われるのではなく、次第に遠隔地へ流通していくことも明らかにされ

てきています。

この時代、御当地益田の領主益田氏の動向について、簡単にみていきますと、大内氏が滅んだ前後に益田氏はいち早く長門国の日本海側、特に益田地域に続くあたり、現在の萩市や阿武郡へ進出していきます。その中には、古くから海上交通の要衝だった、萩市沖合の見島も含まれていました。

同じころ、弘治元年（1555）、益田氏は東隣の領主三隅氏領へ攻め込んで、現在の浜田市三隅町方面にも進出しています。このときに、三隅川河口の湊にいた大賀氏という、商人と武士と両方の性格を持つ領主を支配下に入れました。後に益田氏が九州北部の領主松浦氏と互いに交流を深めるときに、大賀氏を現地への使者として派遣しています。毛利氏が対馬島主の宗氏を介して朝鮮王朝との交流の展開を探っていたときに、益田氏も同じく宗氏と手紙のやりとりをするなど、視線を遠く西へ向けて活動していました。こうした益田氏の九州北部地域との関わりの中で注目されているのは、福岡県にあります、世界遺産に登録された宗像大社とかかわりを深めていた点です。特に同社の天正6年（1578）の遷宮のときには、益田氏がおそらく石見産の大量の材木を寄進しています。九州北部の諸勢力と益田氏との関係に関連づけて、益田氏の交易への志向性がうかがえるかと思えます。

さかのぼって永正15年（1518）、益田氏若狭小浜へ船を派遣し、遠隔地との交易を行い得る能力を備えていたと考えられます。先ほどお話した、北国船や唐船が来ていた宇龍浦のすぐ近くの都市杵築に、益田氏は「倉本」という自身とかかわりが深い商人を置いていました。この「倉本」とは、ふだんは資産運用をしつつ、困ったときにはお金を用意してくれるような、いろいろ融通をきかせてくれる商人といえます。益田氏が、そういう特権商人を交易拠点の杵築に持っていたことは、交易との関わりを考えるうえで興味深く、評価される点だと思いま

す。

よく知られているように、永禄11年（1568）、益田藤兼、元祥親子が大毛利氏を服属のために訪ねて行って、儀式で料理を振る舞っています。このときの料理に、北海産の昆布やかずのことという、交易を通じて得たものを用いたり、朝鮮半島産と考えられる虎の皮を献上しています。益田氏も、石見銀山の開発に伴う西日本海地域の活発化する交易に乗じて、いろんな産物を入手して、自身の地位や財政に活かしていたのでしょう。益田氏の優れた才覚がうかがえる点だと思えます。

益田氏のお話をさせていただきましたけれども、近年の研究では、遠隔地との交易を担っていた領主が山陰地域のあちこちにいたことが明らかになってきています。彼らは拠点とする港から船で出向いて交易を行いつつ、時には軍事力を活かして合戦で活躍したりしていました。また、九州北部の松浦氏のもとへ出かけていった三隅湊の大賀氏のように、地域を治める大名や領主のもとで外交の使者も務めています。これらの領主は、少なくとも室町時代以来、交易に幅広くかかわっていく中で、軍事・外交面の実力も備えていったのではないかと思われま

す。三隅湊の大賀氏も、室町時代の永享4年（1432）に自分が所有する船に対して、大内氏領国内の自由通行権を認められています。大内氏は、赤間関（山口県下関市）など領国内の要所に、行き交う船から税を取るための関を設けていました。大賀氏に与えられたのは、あなたの船は通行料なしで通っていいですよという特権です。大賀氏が早く室町時代から船で行き来をしていたことが明らかです。

次に、石見銀山近くの温泉津のあたりでは、石田氏がいました。る研究によると、同氏が拠点とした湊は温泉津だったことが明らかになっています。石田氏は、石見銀山を支配するべく動いている毛利氏にいち早く味方して、合戦に参加しています。出雲国内の戦いにも出かけて

いったことも明らかになっています。そういう中で、元亀四年（1573）石田氏は毛利氏から、年間船2艘の税を免除されて、毛利氏領内をほぼ自由に通行できる権利を得ています。先ほどの大内氏から三隅湊の大賀氏に与えられた権利と同様のものですね。

最後に、最近の調査研究でわかってきた領主に、石田氏と同じく温泉津近辺にいた松浦氏という、船を持ち、商人的性格をあわせ持つ領主がいます。石田氏の史料よりは若干古いころ、石見銀山を大名尼子氏が押さえていたときの史料を中心として残っています。それらを見ていくと、松浦氏は、尼子氏方に属していた国人領主温泉氏、「ゆのし」と読むと思っただけですが、この温泉氏に従って各地で軍事行動をしています。たとえば、毛利氏方であった那賀郡の国人領主福屋氏と戦っています。後に松浦氏は、尼子氏から合戦での功績を賞されて、出雲国の宍道湖南岸にある、来待というところに直接所領を与えられています。尼子氏は、松浦氏に対して、やはり税免除の特権を与えて優遇しています。このことは、自らの陣営の軍事力として松浦氏を確保しておきたいという、尼子氏の意図もあったと思いますが、松浦氏にもその期待に応えるだけの活躍ができる実力があつた。そういう存在と考えるといいように思います。

今の松浦氏が尼子氏から税の免除を得ていることがわかるのが、次の史料（スライド9）です。記載されている年号、弘治3年（1557）の前年に、尼子氏は毛利氏との激しい戦いに勝利して石見銀山を確保しました。史料前半に、松浦氏が「当春已来毛利・福屋当城合戦」の際に、尼子氏方として功績を挙げたことが尼子氏から褒められています。この功績への褒賞として、本文4行目から5行目にかけて、「当津海陸諸役」の恒久的な免税が記されていて、その獲得が確かめられます。

別の弘治3年（1557）の史料で、温泉氏が「此表敵出張」に対して起こった戦いでの松浦

氏の働きを賞しています。この戦いを先の「当春已来毛利・福屋当城合戦」と同じものと仮定できるなら、「此表」と「当城」はさほど離れていないか、同じ所を指しているように思われます。つまり、「当城」は温泉氏勢力圏の近隣の城と考えられます。松浦氏が「海陸諸役」を免除された「当津」についても、「当城」と同様に温泉氏勢力圏に近い湊を指すとすれば、温泉津を示している可能性が高いのではないのでしょうか。

以上の通り、石見銀山周辺の松浦氏、石田氏、それから三隅湊の大賀氏についてお話してきました。ふだんは日本海を船で往き来して商売をしているけれども、大名や国人領主とも関わりを持って、時には軍事的な活動もする。広島大学の本多博之先生は、こういった領主を海洋領主と呼ばれています。こうした人たちが東は若狭国小浜から西は九州北部の肥前国松浦地方までの広い海域を往き来していく中で、人やモノ、そして銀も動いていったのではないかと、想像が広がります。海洋領主との関わりを何とか深めていくことで自分たちの勢力の維持や拡大を目指していたのが、益田氏や温泉氏など石見地域の領主や、大名の大内氏、尼子氏であったと考えています。両者のいわばギブ・アンド・テークの関係を通じて、交易とはまた異なるかたちでありながら、同様にさまざまなものがこの西日本海地域を運ばれていったらうと思います。その影響が西日本海地域のさらに周囲へと広がり、先ほどの島津家久のふるさと九州南部や関西地方の人々などが石見地域を訪れ交流することや、遠隔地交易の活発化がもたらされた。そうした大きな動きを実現し推し進めていったのは、やはり交易を媒介する銀をたくさん産出した石見銀山、その開発の進展が大きかったのではないかと考えられています。このことを、近年の研究では明らかにしながら進んできたところです。

石見銀山に関連する分野の研究は、2007年の世界遺産登録の10年、20年前から着実に進めら

れてきました。国内での交流、交易に関する分野ももちろんですが、朝鮮王朝や明王朝に対する対外交渉や、銀も含めた貨幣流通などの分野も飛躍的に進み、文字通り数多くの研究成果を見ることができます。今回の私の報告でも、資料の参考文献に掲げさせていただきました。様々な方々の積み重ねられた研究成果に基づいてお話をさせていただいたつもりです。

ただ、いろいろ調べてわかったからこれで終わり、ということではありません。ここ益田市では、市民の皆さんや教育委員会の方々などによる遺跡、あるいは文献等の調査研究とその成果が保存・活用の方策へ結実し、それらが現在も積極的に推し進められています。このように、調査研究でわかったことは、新発見といえるでしょうか、新たな気づきと行動を私たちにもたらす力があると思います。ですから、中世益田・石見国・石見銀山の研究も、今後広い視野で進められていくことと思いますし、そのように期待しています。

雑駁なお話になって恐縮です。御清聴くださりありがとうございました。(拍手)

【参考文献】 刊行順

- 長節子「第二部第一章老岐牧山源正と松浦党塩津留氏の朝鮮通交権」『中世日朝関係と対馬』一九八七年
- 毛利元就展企画委員会・NHK『「毛利元就展」－その時代と至宝－』一九九七年
- 桃木至朗編『海域アジア史研究入門』二〇〇八年
- 須田牧子「一章大内氏の対朝関係の変遷」「二章日朝国家間外交における大内氏の地位」『中世日朝関係と大内氏』二〇一一年
- 益田市・益田市教育委員会『記録集シンポジウム「中世山陰の流通と国際関係を考える」－2013年度東京大学一般共同研究「文献・考古両分野による中世後期西日本海地域における流通経済の解明」成果報告会－』二〇一五年
- 本多博之『天下統一とシルバーラッシュ 銀と戦国の流通革命』二〇一五年
- 編集代表村井章介『日明関係史入門 アジアの中の遣明船』二〇一五年
- 長谷川博史「15・16世紀山陰地域の政治と流通」『貿易陶磁研究』三六、二〇一六年
- 関周一「東アジア海域交流のなかの中世山陰」『貿易陶磁研究』三六、二〇一六年
- 益田市教育委員会編『中世益田ものがたり』二〇一七年
- 島根県立石見美術館『企画展石見の戦国武将－戦乱と交易の中世－』二〇一七年
- 仲野義文「第一章」～「第四章」『石見銀山学ことはじめⅠ 始』二〇一八年
- 島根県古代文化センター『島根県古代文化センター研究論集第18集 石見の中世領主の盛衰と東アジア海域世界』二〇一八年
- 拙稿「島根県立古代出雲歴史博物館所蔵「松浦家文書」中世史料の翻刻と紹介」『島根史学会会報』五六、二〇一八年

スライド1

1.石見地域と大陸との交流



● 陶製経筒五口 (県指定／豊田神社所有)、12世紀。

スライド4


2.石見銀山開発の背景



● 瑠璃光寺五重塔(国宝／山口市)、嘉吉2年(1442)建立。

スライド2

1.石見地域と大陸との交流



● 周布氏の居城とされる鷹巣城跡(浜田市周布町)。そばを流れる周布川の河口付近に、長浜(同市長浜町)の港がある。

スライド5

2.石見銀山開発の背景



● 雪舟筆益田兼堯像(重要文化財、益田市立雪舟の郷記念館所蔵)。文明11年(1479)益田兼堯は雪舟を益田へ招いた。

スライド3

1.石見地域と大陸との交流

宗貞国書下写
吹拳一通、陸地・石見若狹・高麗への大
小船の公事、おふせんならびに志保判、
船の売口買口、人の売口買口の事、扶持
申所之状如件、
文明六 八月九日 貞国 御判
塩津留主殿助殿
『宗家御判物写』貞享四年書上、
佐賀村塩津留家所持分

*「陸地」とは九州のことをさす。

スライド6

3.銀の流通と大航海時代



● オルテリウス作韃靼(だつたん)図(島根県立古代出雲歴史博物館所蔵)、1570年。日本列島に銀鉱山が記される。

スライド7

3. 銀の流通と大航海時代



- 上空から見た石見銀山遺跡の中心部、仙ノ山(標高537m)の頂上付近(大田市)。数多く残る平坦地は釜山町の跡。

スライド8

4. 西日本海地域の交易の変容



- 左: 御取納丁銀(鳥根県立古代出雲歴史博物館所蔵)
- 右: 石見銀山遺跡出土の灰吹銀(大田市教育委員会所蔵)

スライド9

4. 西日本海地域の交易の変容

尼子晴久袖判(尼子氏奉行入連 豊春書写)

御袖判

近年及度々軍功有之処、別而当番已来毛利福屋当城合戦之節、無比類高名、其上地下人と馳走仕、旁以散思、満悦候、随而当津海陸諸役水被成、御免除之候矣、向後弥志勤可被相励候、為後世被成袖御判候、依而執達如件、

弘治三

河副美作守

九月廿八日

久盛

立原備前守

幸陸

牛尾遠江守

幸清

松浦源左衛門殿

古代出雲歴史博物館所蔵 松浦家文書

御袖判

近年及度々軍功有之処、別而当番已来毛利福屋当城合戦之節、無比類高名、其上地下人と馳走仕、旁以散思、満悦候、随而当津海陸諸役水被成、御免除之候矣、向後弥志勤可被相励候、為後世被成袖御判候、依而執達如件、

弘治三

河副美作守

九月廿八日

久盛

立原備前守

幸陸

牛尾遠江守

幸清

松浦源左衛門殿

古代出雲歴史博物館所蔵 松浦家文書

港湾遺跡から見た日本海交易～15・16世紀を中心に～

益田市教育委員会文化財課 主任主事 佐伯 昌俊 氏

目次氏からは、主に文献を中心に解説がありましたが、私のほうからは日本海を舞台にした交流・交易、その中でこの益田という地がどのような位置づけだったのかについてお話ししたいと思います。そして、益田に残っている中世の遺跡の発掘調査から、目次氏が話されたことを裏づけるような出土品も出ておりますので、ご紹介したいと思っております。

文献からは益田氏の海洋領主的性格が古くから指摘をされてきております。具体的に有名なのは、益田藤兼、元祥親子が吉田郡山の毛利氏のところを訪ねた際に多数品々でおもてなしをしたということです。その中には、朝鮮半島産と思われる虎の皮とか、蝦夷地（北海道）産と思われる昆布や数の子を使用した料理を振る舞っていることがわかります。それ以外にも、益田氏が若狭、現在の福井県のあたりにまで船を派遣していたということ。そして、16世紀の後半になりますが、対馬の宗氏とか、平戸の松浦氏との関係を深めるといったようなことが、古文書からうかがえる交流ということになります。

文献以外にも、益田地域、そして益田氏が日本海を通じてさまざまな交易を行っていたことを物語るものとして、現在は残ってはいないんですが、益田家に伝わる宝物が数多くあります。その中でも、一つご紹介したいものとして、「真壺」と呼ばれる壺を所持していたことが伝わっております。この「真壺」は、皆さん御存じの千利休が希代のもの（大変すばらしいものという意味）だと評したと言われております。この話の真偽は別としても、当時お茶の世界で大変貴重であり、価値づけをされた、いわゆる「名物」を益田氏が所持していたことが言えるかと思えます。

この「真壺」とは何なのか、実物が残っていませんので、はっきりとしたことはわかりませんが、当時、お茶の世界では「ルソン壺」と呼

ばれる茶壺が重宝されておりました。ルソン壺といっても、フィリピンのルソン島で作られた壺ではなく、中国南部で生産された、褐色の釉薬がかけられた壺のことを指します。現地では、そこらじゅうにごろごろしているような壺のようではございますけれども、それが日本に運ばれてくると、千利休などにより価値づけされ数百、数万倍の価値で取引をされる壺になったと考えられています。

そしてもう一つ、「真壺」ではないですが、益田市内にも、日本海交易によってもたらされたであろう壺を見ることが可能です。萬福寺に所蔵されている華南三彩壺と呼ばれるものがあり、本堂の裏にある展示室に、展示されています。華南三彩壺という名前で、華南（中国の南部）、福建省もしくは広東省あたりで焼かれた壺であったと考えられます。そして、「三彩」とあるように三色の色、緑色・黄色・赤色が使われている壺になります。この壺を、何に使ったかということ、これも恐らく葉茶壺、お茶に使う茶葉をこの中に入れて保管していただろうと考えられています。なぜ、ここで取り上げたかといいますと、どこでも出土する代物ではありません。このような壺は、完形品では、全国的にも類例は少なく、実際発掘調査からこういった壺の破片が出土しているところは、長崎や大阪の堺環濠都市遺跡、そして京都など一部の限られた地域です。こういった当時でも入手が難しかったであろう珍しいものが益田の地に運び込まれていたことは、益田氏による活発な経済活動、ひいては日本海を舞台にした交易の結節点の一つがこの益田であった証ではないかと思えます。

今回、私に与えられた役割は、土の中から掘り出されたものや伝世品の存在を基礎資料として、文献から知ることができる益田氏による日本海を通じた交易が、どのように裏づけられるのか、そして、発掘調査から明らかになった中

世における益田川・高津川河口域に営まれた集落の様子を皆さんにお示しをすることです。そうした中から、先ほど目次氏からお話があった、近年の文献調査から明らかになってきた内容をもう少しイメージをしていただきやすくなるのではないかと思います。

これまでご紹介してきた産物がどのようにこの益田に運び込まれたのかについてアプローチしていきたいと思います。第1図をご覧ください。益田市内の益田、美都、匹見地区に黒い線で、高津川、そして匹見川といった河川を図示しています。これまで益田、美都、匹見地域では、中世の館跡、河川を利用した物流にかかわったであろう集落跡の調査がされています。それらの遺跡の名前を番号とともにまとめています。黒い点が落ちているところが遺跡が存在する場所です。各遺跡から発掘によって出土している貿易陶磁器（中国から輸入されて現地まで運ばれた焼き物）の破片を一片ずつカウントし数値化していくことによって、その他の地域との比較が可能となります。これらの点が河川沿いにまとまっているのを見ていただけたと思います。益田川・高津川の河口域、後でお話をします中須西原・東原遺跡など舟着場の機能を備えた集落でおろされた貿易陶磁器などは、当然、今の益田市内だけではなく、美都・匹見地域にも運ばれていくわけです。それらは陸路も使い、一方では、河川を使って運ばれたことを想像をしていただけたと思います。

こういった分布のあり方を参考にして、どれだけの量の商品が益田の湊におろされ、それらがどのように上流域、今でいう美都、匹見地域へ運ばれていったのか。そうした状況を港がある河口域と山間部で比較することによって、山間部と河口域の間でどれだけのモノが動いていたのか、そういったことが明らかにできるわけです。

先ほどの第1図に表示してある各遺跡から出土した貿易陶磁器を表にしたものが表1になります。表1には、青磁、白磁、青白磁と書かれ

ており、中国で焼かれた後に日本海を経て運ばれた高級なお茶碗です。それらのほかに、朝鮮半島で焼かれたものもこの表の中に加えております。この中の数字は、それらの破片がどれだけ出土したのか数値化したものです。ただ、一概に発掘調査といいましても、遺跡の範囲すべてを調査できるわけではありません。さまざまな要因によって、広大な遺跡のごく一部を発掘をしている可能性もありますので、この破片数が現状で多い少ないことをもって、この遺跡が重要な拠点となる遺跡だったかどうかというのを判断するのは難しいと思っております。それらを客観的に比較するためには、これら遺跡の発掘面積を基準に比較していきます。発掘調査した面積から出土した破片数を1平米当たり換算し直すことによって、どれだけの量がそこに運び込まれていたのかということが客観的に比較ができるようになってくる表になります。

表1の一番右の列には、1平米当たりの破片数、1メートルの四角い床を設定し、その枠の中から何片の陶磁器の破片が出てくるのかというのを数値化したものです。0.25や0.10、0.06といったような数字が並んでいます。山間部の遺跡を発掘しても、1平米当たり1片も出土しないといった様子だということがおわかりになるかと思えます。

一方で、日本海側、河口域の中須東原・西原遺跡でも同じような表をつくっています。表1によると、1平米当たり1.04点という数字が出ております。中須西原・東原遺跡では、1平米を発掘すると少なくとも破片が1点は出土する確率です。今、1平米当たり1点あるかないかといった話をしています。皆さんイメージがつきづらいかと思いますが、基本的に、遺跡を発掘して1平米当たり1点が出土するというのは珍しく、他の遺跡と比較しても高い比率ではないかと思えます。遺跡の面積が広大になればなるほど、出土する破片の確率が高いか低いかによって、その遺跡にどれだけの量の貿易陶磁器が運ばれてきていたのかを客観的な数字からイ

メージすることができるのではないかと思います。

これまでは、益田にどれだけの貿易陶磁器が運び込まれていたのか数字でお示しをしました。次に、益田に運び込まれた焼物がどこで生産されたものなのかについて、発掘調査によって出土した製品から紐解いていきたいと思えます。

第2図に日本地図を載せています。この中に、四角と黒丸で幾つかの地名を表示しています。日本国内の生産地から運び込まれているものもあれば、朝鮮半島から運び込まれているもの、そして中国から運び込まれているもの、一番遠いところでは東南アジアでつくられたものが益田に運び込まれているということがわかります。しかし、生産地、例えば東南アジアのベトナムやタイから直接益田に運ばれてきたというわけではなく、益田に来るまでには、博多や対馬を介して、運び込まれる形が実態ではないかなと考えています。

こちらの写真は、中須西原・東原遺跡から出土した焼き物です。中国で生産された青磁というものですが、青磁といいながら、水色や黄緑色のものなど様々な色があります。要は、色の違いによって質のいいもの悪いものと判断されます。次は朝鮮半島で生産された焼物です。少し時代が古い13世紀ぐらいのものだと考えられています。朝鮮半島に高麗という国が存在した時代につくられた青磁です。このような形のを梅瓶（めいびん）と言います。実際に出土したのは全体の中では一部分の破片だけですが、本来、壺の形状をしており一番上の部分が立ち上がっている形をしていたであろうと思われる。

続いて、日本国内に視点を変えてみたいと思えます。皆さん、御飯を食べられるときに使われるお茶碗のことを瀬戸物と言われるかと思えます。現在の愛知県あたりで生産をされた瀬戸焼のことです。お皿やお茶を建てる際に使用する天目碗、こういったものが瀬戸から運び込ま

れています。日本で古くから有名な焼き物といえば、瀬戸のほかにもう一つあり、現在の岡山県備前市で焼かれた備前焼が中須の湊から多く出土しています。

これまでは主に焼物の生産地のお話をしてきましたが、そのほかにも交易によって益田に運び込まれたものとして石があります。益田市内には、益田藤兼のお墓と言いつたえられているものや、中須の福王寺には島根県の指定文化財になっている十三重層塔と呼ばれる、かなり巨大かつ立派な石造物が数多く残っています。これらは、日本各地から運ばれてきた石材が使われています。資料に書いているものは、花崗岩（かこうがん）製の石造物です。皆さんの家のお墓などには、花崗岩もしくは御影石といった呼び名で使われているかもしれません。御影石といえば兵庫県にある六甲山の御影石が有名ですが、益田に運び込まれている花崗岩は、六甲山で産出される御影石もあれば、そうではない、例えば山口県の日本海側の長門市周辺でとれる御影石が使用されているのではないかと考えられています。いずれにしろ、少なくとも益田ではとれない石を使って石造物をつくっているということは、これらの石材も焼物と一緒に益田に運ばれてきているということになります。

御影石のほかに、日引石、そして福光石というものもあります。日引石は若狭から運び込まれているものですし、福光石というのは石見銀山に近い、温泉津町周辺でとれる石材です。現在も福光という地名がありますけれども、そこで産出される石が益田に運び込まれている。福光石を使用した石造物は石見銀山でかなり多く確認されているものです。石見銀山で数多く確認されているものと同質・同形の墓石や供養塔がこの益田でも確認されることは、これらが船で運び込まれたのか陸で運び込まれたのか断言はできませんが、少なくとも益田と石見銀山周辺を結ぶ行き来があったということ物語る一つの証拠としてご紹介しておきたいと思いま

す。

これまで、益田地域の山間部へ河口域の湊から焼物がどのように運ばれているのか、そして、湊には様々な種類、生産地のものがいくら運び込まれていたのかをご紹介してきました。そのことを踏まえて、湊の機能を備えた集落である中須西原・東原遺跡の実像に迫っていきたいと思います。

一概に湊といっても、何をもって湊と定義するのかということが重要になってきます。資料には、礫敷き遺構と表現していますが、舟が着く場所（舟着き場）、もしくは荷物を運んでく舟が一定期間係留されるような空間になります。もちろん湊ですので、今の港湾機能に置き換えてイメージすると、運び込まれた荷物を一時的に保管しておく倉庫、貯蔵庫などが必要になります。現代の港湾の風景を思い起こしてもらおうと大きな船で運び込まれるときは鉄製の四角いコンテナにいろんなものが詰められて港でおろされます。中世においても、例えば、海外からは香辛料や硝石、そして薬の類い、そういった粉状のもの、もしくは液体状のものを運び込むときには、それらを入れておく容器（コンテナ）が必要になります。この容器（コンテナ）がどれだけ遺跡から出土するのか、そういったことを総合的に判断していく必要があると思います。

正面の画面には、中須西原遺跡の平面図を映しています。調査区全体をメッシュ状に切り、1つのメッシュの中から何点、例えば中国の青磁が出土したのかを表しています。こちらは朝鮮半島の焼物が1つのメッシュの中でどれだけ出土したのかを、破片数によって色の濃さを変えて表示しています。中須西原遺跡では、舟着き場というのは、第3図の一番下の部分。この部分に石が敷き詰められており、舟が着いたであろうと想像されています。第3図を詳細に観察すると、中国陶磁の場合は、舟が着く場所のすぐ近くに色の濃さが特徴的な二つのまとまりがあります。朝鮮陶磁の場合、第3図にこちら

とこちらにまとまりがあります。この中須西原遺跡というのは、縦横碁盤目状に道が通っており、イメージとしては都市的な、町的な景観を呈していたであろうと言われております。第3図には2カ所、四角いものが描いてあります。何かというと、周りから一段掘りくぼめられており、かつ、四隅には柱を建てたと考えられる穴があいています。こういった遺構は半地下式の倉庫であろうと考えられており、運び込まれたものを一時的に保管しておくような倉庫がこの中須西原遺跡には整備をされておりました。

中須西原遺跡と同様に中須東原遺跡についても発掘調査をした全体にメッシュを組み、どれだけの数の破片が出土したかを色の濃淡で示したものです。第4図の下には、陶磁器の種別が書いてあり、12世紀の中ごろから後半に中須東原遺跡が成立したことがわかります。このころにはまだ舟着き場、敷き遺構は整備をされていなかったと想定されます。実際に色のまとまりは、舟着き場のあたりと、こちらのほうにまとまりがあります。このエリアが現在のどこのあたりかということ、福王寺があるあたりです。福王寺の門前に当初は中須西原・東原遺跡の始まりがあったと想像されます。

15世紀の末から16世紀の前半になると、遺物が出土する中心が福王寺の前から、舟着き場の礫敷きのあたりに色の濃い部分が移動しているのがわかります。遺跡が発展をしていくにつれて、舟着き場が整備され、舟が着く一番近くのあたりには中須西原遺跡と同じように、保管しておくような倉庫などが整備されておりました。陶磁器が出土する頻度を表す色の強弱の違いから、遺跡がどのように展開していったのかわかってきています。

中須西原遺跡を発掘しますと、焼物のほかに荷札が出てきます。運び込まれた荷物にくくりつけられている注文票のようなもので、送り主が書いてあります。当時は、木の板に書いてくくりつけているわけです。札の上には切り込みを入れており、ひもで結びつけておりました。現

地に荷物が到着すると、札の下を切り離して捨てられたと考えられます。次にご紹介したいのがこの石です。先ほども日本から朝鮮半島や中国大陸への輸出品に刀剣があると話がありました。その刀や包丁などを研いで刃物にする際には砥石が必要になります。こちらから荒砥、中砥、仕上げ砥の3種類があります。最初に目の粗いもので研ぎ、次に中砥、最後は一番目が細かい砥石で仕上げます。こういった砥石が数多く出ていることから、中須の湊は、物が運び込まれるだけでなく、金属加工を行う工房も存在していたことが判明しています。

発掘調査では、地面が黒く、そして一部が赤く変色をしている跡が多数確認されています。地面だけを見るとよくわかりませんが、イラストのようにふいごの羽口と呼ばれる管から風を送り、鉄を熱する、そういったことが考えられます。湊には舟がやってくるわけですが、その舟が傷んでしまったり、故障してしまうことも想像されます。先ほど金属加工と言いましたが、刃物の製品をつくるだけではなく、それ以外にも、舟を修理するドックのような機能もあったのではないかと考えられています。釘の可能性のある製品も多く見つかっており、舟を修理するような釘を中須の湊でつくっていたことが推測されます。

日本海をやってくる外洋船は中型もしくは大型の船ですので、それらの船は、河口を入って着岸しようとする、水深が浅いので座礁してしまいます。中型、大型の船というのは沖合のほうで停泊し、そこから小さい川舟に荷物を移しかえて、湊に荷物を荷揚げする、「はしけ」と呼ばれる方式で中須湊に物資が運び込まれていたと考えられます。川に面した川湊と言いますが、そういった様相だったろうと思われます。中須湊には、冒頭言いましたように、中国や朝鮮半島、そしてタイ、ベトナムなど東南アジアでつくられた焼物が出土しています。ここで強調しておきたいのは、そういったものがどれだけ出土するのが重要で、中須湊からは、

1平米当たり少なくとも1点の破片が出る確率です。それを全体で考えてみると、日本海側の同じような川湊の遺跡と比較すると、その出土量は突出しています。一方で、益田の湊にこれだけ多くの量が入っていることから、それらが美都、匹見地域に運ばれたと考えられるかもしれませんが。冒頭申し上げたように、美都、匹見地域の遺跡を発掘してみると、湊で出土しているほどの量が山間部に運び込まれているとは言いがたい状況です。では、湊でこれだけ多くの破片が出土しているにも関わらず、美都、匹見地域に運ばれていないものはどこへ行ったんだということになります。それらを解明していくためには、もう少し広い視点で日本海側の遺跡を比較していくということが必要になってきます。対馬、壱岐や北部九州、そういった遺跡で中国陶磁、朝鮮陶磁、そしてタイ、ベトナムの焼物が数多く出ています。そういったところと比較をしていくことが必要になってきます。

目次氏のお話の中でもありました、石見銀山が開発される少し前、そして開発された後に、日本海を通じて密接な関係にあった朝鮮半島との交易の様子が、中須湊から発掘された出土品からアプローチを試みています。そのことについてもう少し掘り下げてお話してみたいと思います。

資料、サブタイトルに朝鮮半島の陶磁器が物語る日本海交流と書いています。15世紀以降、文献からは山陰地域と朝鮮半島との交流が数多く確認されるようになります。現在の益田の海岸行くと、ハンゲルの文字が書かれたゴミがかなり漂着しています。昔も、ゴミが漂着していたでしょうし、船も人間も海流によって海岸に漂着していたと考えられます。こうした漂着民を周布氏が朝鮮に送還したことを契機として始まった交流は、公式の記録では49回確認されます。重要なポイントは、直接朝鮮に送還するのではなく、一旦対馬を経由して送還することです。ここがプロセスとしては重要だったと思われる。対馬を経由するという事は、朝鮮関

係の情報や通交を確保するためには対馬の有力者の協力が必要であったということがわかります。

一方で、こういった公式の交流、交易のほかに、私的な、もしくは権力に縛られない民間レベルでの交流というのも活発に行われていたという事実は、先ほど目次氏のお話にあったところです。朝鮮の記録を見ましても、対馬だとか石見出身の人間によって私的な交流が行われていた記録がありますし、逆に朝鮮側はそういった行為を問題視していた実態もあったことがわかっています。

実際に、益田の湊から何が出土しているかといいますと、朝鮮半島で焼かれた焼物が数多く掘り出されています。中国で生産された青磁に比べると、きれいとは言いがたい印象のものです。あまり高級感を感じない焼物ですが、こういったものが多量に出土しています。重要なのはこれらがどこの港から運び出されたのかということです。日本と朝鮮半島の窓口は、公式には齋浦、富山浦（今の釜山）、そして塩浦という朝鮮半島でも南側に集中したこの3カ所に窓口が限られていました。

注目をしたいのは、この三浦の中でも一番規模の大きかった齋浦と呼ばれる港です。先ほどお見せした焼物は、齋浦の港のすぐ近くで生産されていた、熊川（こもがい）と呼ばれる窯の製品であることが近年の調査でわかってきています。先ほど益田で出土している朝鮮半島の焼物がすごく多いと言いました。それを客観的に示したものが表2です。山口県、福井県、新潟県、青森県といった日本海側の主な同時代の遺跡から出土した朝鮮半島の焼物の破片数をカウントしたものです。こちら調査面積で割り戻し、1平米当たりの破片数を表示しています。0.00何点という形でかなり細かい数字になっていますが、つまり1点も出土していません。中須東原・西原遺跡から出土している平米当たりの朝鮮陶磁は0.11点です。1点は出土していませんが、そのほかの日本海側の主要な遺跡と

比べますと、その数がほかの地域と比べても高いということがおわかりいただけます。

第6図は、朝鮮の焼物に限定して、古い時代順に表示し、どの時代が一番量が多いのか棒グラフにしたものです。古い時代はあまり量がありませんが、1460年から1550年（この年代というのは、あくまでの現段階での韓国の年代観）の時期に出土量が突出し、逆に、1550年から16世紀の後半にかけては激減をするようなグラフになっています。この1460年から1550年に何が起こったかという、石見銀山の開発が始まった時期になります。特に1550年代頃は、石見の銀が大量に朝鮮半島もしくは中国大陸に運び込まれていた時期と符合します。朝鮮半島で生産された焼物がこの時期に一気に益田で突出をする現象は、そういった銀の動きと関係があったのではないかと考えています。

島根県内における朝鮮陶磁の出土状況を表したのが第7図です。小さい器のマークが1点、少し大き目の器が100点ということになります。益田の湊の数を見ていただくと、ほかの地域に比べるまでもなく、益田地域から朝鮮半島産の焼物が多量に出土していることがおわかりいただけると思います。多量に出土している一方で、ある特定の器種に限られていることがわかります。先ほどお見せしたグラフの中でも、一番多いのは灰青釉陶器という種類のもので、これが先ほど言いました三浦の中でも一番大きい港町である齋浦の近くで焼かれていた、熊川と呼ばれる窯で生産された焼物です。この写真は、韓国の熊川窯の跡から、実際に発掘をされて出土した焼物です。中須東原・西原遺跡から出土した熊川であろうと考えられている焼物と比較してみたいと思います。2つ並べていますが、全く同じものであることがおわかりになると思います。韓国の発掘品には、表面に刷毛で白土を塗っている焼物がありますが、実際に中須からも同様の焼物が出土しています。次に、少しネズミ色をしたお皿の内側に、重ね焼きをする際に製品同士の融着を防ぐための目跡（め

あと)と呼ばれる小さな団子状の粘土の塊が
いっぱいについている製品があります。これもまた、
同じものが益田で数多く出土しています。

ただ、先ほど言いましたように、見た目的に
高級品かと言われれば、そういったものではない。
これが高級であれば、益田氏のお城である
七尾城や居館跡である三宅御土居から出土して
いるはずですが、七尾城や三宅御土居を
発掘してもこういったものは多くは出土して
いません。有力者が求めるようなものではなく、
逆に雑器のような、要は日常生活で使うような
性格の器ではなかったかということが言えるわ
けです。

これらのほかにも朝鮮で焼かれた瓶もしくは
壺のようなものが数多く出土しています。お酒
などの液体が入っていたと思います。漆に液体
のものや粉状のものを運び込むときには、日本
海の荒波を越えてくることになりまますので底が
平らな、何らかの容器に入れて運び込む必要が
あります。益田の漆からそういった瓶類が数多
く出土するという事は、交易品が益田に運び
込まれた後に、中身のものは別の容器に移しか
えられ、その容器(コンテナ)は不要になり廃
棄されたと考えられます。

朝鮮半島で焼かれた焼物は、その焼物自体が
商品として持ち込まれたというよりは、交易の
結果、益田で廃棄された副産物であろうと考え
られます。実際の交易品というのは、毛皮や教
典、木綿などが朝鮮半島から日本に運び込ま
れていましたが、そういったものは全く痕跡が
残りません。しかし、薬や香辛料、硝石などは
容器に入れられて運び込まれており、移しか
えられた後に廃棄された焼物は活発な交易活
動を物語る物証といえます。逆に益田から輸
出された商品としては、例えば木材や鉱物資
源があります。益田地域で考えると匹見では
材木がとれ、美都には都茂鉱山という鉱山
があります。

続いて石見銀山が活況を呈する時期の益
田の様子についてお話したいと思います。三
浦の乱というのが1510年に勃発をいたし
ます。三

浦の乱は、齊浦、釜山浦、塩浦、この3つの
港に住んでいた倭人(不法に現地に滞在する
日本人)と対馬の宗氏が引き起こしたと考え
られていますが、それをきっかけとして、3
つの港が一時閉鎖されます。その後、港は復
活をしますが、以前に比べて人の出入りな
どの規制が強化されることとなります。結
果として、富山浦(今の釜山)1つに限定
されるという形で通交が復活しました。ち
ょうど三浦の乱が、中須東原・西原遺跡
から出土する朝鮮陶磁のピーク時の境目
あたりに来るのではないかと思われま
す。三浦の乱が起こるまでは、朝鮮半島
産の焼物が数多く入ってくることはお話
した通りですが、三浦の乱が起こり齊浦
の港が閉鎖されて富山浦に限定をされる
ことによって、朝鮮陶磁に関しては、出
土量が激減する現象が起こっています。
朝鮮半島産の焼物については減少する
わけですが、だからといって、益田の中
須漆で取り扱われる焼物の量が減って
いるかという、そうではありません。

第8図は、中須東原・西原遺跡から出土
した貿易陶磁器全体の出土量を古い時期
から新しい時代まで棒グラフで示したも
のものです。この棒グラフの年代の物差
しについては、時期的な問題も一部あり
ますが、全体的にはこれが大きく狂うこ
とはないと思います。ちょうど朝鮮陶磁
器がピークを迎える時期は、このグラフ
でいうと、一番伸びるこの時期に該当し
ます。確かに朝鮮陶磁器も多いですし、
その他の中国陶磁器もこの時期には一番
数が多く、ピークを迎えています。一方
で、その次の時代になると、朝鮮陶磁
は激減するわけですが、中国陶磁器全
体で見ると、総量的にはさほど激減を
していない様子ではありません。朝鮮
陶磁器は減少するけれども、中国陶磁
器については減少しつつも、ある程度
の出土量を維持しています。こうした
現象を考えると、朝鮮陶磁器について
は、益田に運び込まれる交易のルート
が何らか理由で変更になったのではない
かと考えられます。

一方で、石見銀山の港がある温泉津や、尼子氏の拠点であった月山富田城がある富田河床遺跡（現在の安来市）では、この時期に特徴的な朝鮮陶磁器が出土しています。数はそれほど多くはないですが、出土量が激減する益田よりは多く出土をしています。これらの朝鮮陶磁器は、先ほど紹介した熊川と呼ばれる日常使いするような食器ではなく、茶の湯で使う茶器として使われるような価値づけされた御茶碗であったことが想定されます。この時代には、侘び茶の人气が高まり、朝鮮陶磁器の中には、井戸茶碗と呼ばれる有名な器が珍重されるようになります。益田の湊に運び込まれていた朝鮮陶磁器は、あくまで商品を運ぶ際の入れ物や日常生活で使う食器であった焼物だったわけですが、いつの間にか、お茶の世界で茶器としての価値を認められるように変化をしていきます。温泉津などからは、お茶道具と考えられる朝鮮陶磁器がある程度出土しますが、同時期の益田の湊からは、そういったお茶道具と考えられるような朝鮮の焼物というのは一つも出土していません。中国陶磁器はもちろん入ってきていますが、益田にはお茶道具関係の朝鮮陶磁器はほとんど入ってこなくなる現象が起きます。このように、16世紀の前半ごろを境として、益田地域への朝鮮陶磁器の流通経路や量は、それ以前と比べてかなり大きな変化を遂げたであろうことが言えると思います。

一方で、中国陶磁器に関してはある程度の量を保っています。この背景に何があるのか考えてみますと、先ほど目次氏からお話のあった文献から知れる16世紀代の益田氏の活発な海洋領主的な性格というところに関係してきます。益田氏は、今でいう北部九州や福岡の北の地域に所領をもっており、また萩の沖合にある見島、そういったところを領有しています。益田氏は、16世紀の前半頃に齋浦をはじめとする韓国の港の閉鎖によって交易や物流に大きな変化があったことを察知し、交易ルートの見直し、例えば交易、流通にかかわる新たな勢力との結び

つきを強めていくという選択をしたのではないかと考えられます。対馬の宗氏や平戸の松浦氏との関係を深めることなども、16世紀の後半において日本海交通の要衝を押さえる政治的な動きとして文献から確認されることです。こうした益田氏の政治的な動きと、今日ご紹介した遺物から指摘される朝鮮陶磁器の急激な減少、しかしその一方で中国陶磁器はある程度の量を確保しているということから考えますと、益田氏が日本海を通じた交易の変化に敏感に反応し、新たな流通経路の開拓を行った現れではないかと考えられます。

益田では幸運なことに中世遺跡の発掘調査が数多く実施されています。河口域の湊と考えられる遺跡の調査も行われておりますし、一方で、古くから美都、匹見地域では中世の館跡などの調査が行われてきました。そうした益田地域全体で中世に関する基礎資料の蓄積が図られてきたからこそ、中世の流通のあり方、遺物の様子が総合的に比較できる珍しい地域といえます。しかし、山陰地域や日本海側における益田の地域的な価値づけをしっかりとしていくためには、ほかの地域との比較というのが欠かせない課題です。近年では石見銀山、温泉津等において発掘調査が行われ、徐々にではありますが、益田と比較ができるような調査が行われています。今後は、鳥根県内でいいますと例えば温泉津や対馬の遺跡との比較検討をさらに深化させていかなければならないと感じています。そういったことを重ねていくことによって、中須東原・西原遺跡が果たしたであろう湊としての機能も、もう少しわかってくるような気もしています。

私からは、発掘調査から得られた成果と目次氏からお話のあった文献の調査成果を皆さんにイメージできるような情報提供という形で報告をさせていただきました。以上で終わらせていただきます。ありがとうございました。（拍手）

「港湾遺跡から見た日本海交易～15・16世紀を中心に～」

益田市教育委員会文化財課

佐伯昌俊

はじめに

- ・ 益田氏の海洋領主的性格
 - 1568（永禄11）年 益田藤兼・元祥親子が毛利氏を訪ねる
 - 朝鮮半島の虎皮、蝦夷地（北海道）産と思われる昆布や数の子を使用した料理を振る舞う
 - 1518（永正15）年ころ 益田氏の舟が若狭（福井県）に着岸
 - 16世紀後半に、対馬の宗氏、平戸の松浦氏との関係を深める
 - ・ 益田家に伝わる宝物
 - 「真壺」（ルソン壺か・中国南部で生産された壺）、千利休が「希代の物」と評したとされる
 - ・ 萬福寺所蔵の華南三彩壺（葉茶壺）
 - 16世紀末～17世紀前半にかけて中国南部の福建・広東省周辺で作られた壺
 - 同類の華南三彩壺は長崎、堺環濠都市、京都などで出土している
- ⇒以上のような産物がどのように益田にもたらされたのか

1. アプローチの方法

- ・ 発掘調査により各遺跡から出土した貿易陶磁器を数値化（第1図）
 - 他地域と比較することで益田地域の特徴を顕在化
- ・ 河口域の港湾遺跡と中・上流域の城館跡との出土比率を比較（表1）
 - 需要と供給の在り方（モノの動き）、物資集積地としての機能の把握
 - 中須東原・西原遺跡の1㎡あたりの出土点数 1.04点/㎡
- ・ 陶磁器の生産地から見た国内外との交流（第2図）
 - 備前（岡山県）、瀬戸（愛知県）、珠洲（石川県）、中国、朝鮮、タイ、ベトナム
- ・ 石造物からみた交流
 - 市内に所在する石造物（石材）の多様性（花崗岩・日引石・福光石など）

2. 港湾集落としての中須東原・西原遺跡

- ・ 物流の拠点となる港湾遺跡の定義
 - 礫敷遺構（舟着場）、舟溜まり、貯蔵庫（倉庫）、コンテナ（容器）など
- ・ 中須東原・西原遺跡の港湾機能（第3・4図）
 - 水深は浅く大型船は着岸不可、沖合に停泊し舢舨（小舟）で荷揚げ、川湊としての性格
- ・ 益田地域のみならず西日本海域の物資・流通を担う港湾都市として発展
 - 中国陶磁器、朝鮮陶磁器、ベトナム・タイなどの東南アジア陶磁器の存在
 - 益田地域のみで消費するには有り余量の中国陶磁器、㎡あたりの出土数
 - 東南アジア陶磁器は対馬・壱岐、北部九州などで類例が出土（14世紀後半～15世紀前半）

3. 朝鮮陶磁器が物語る日本海交流

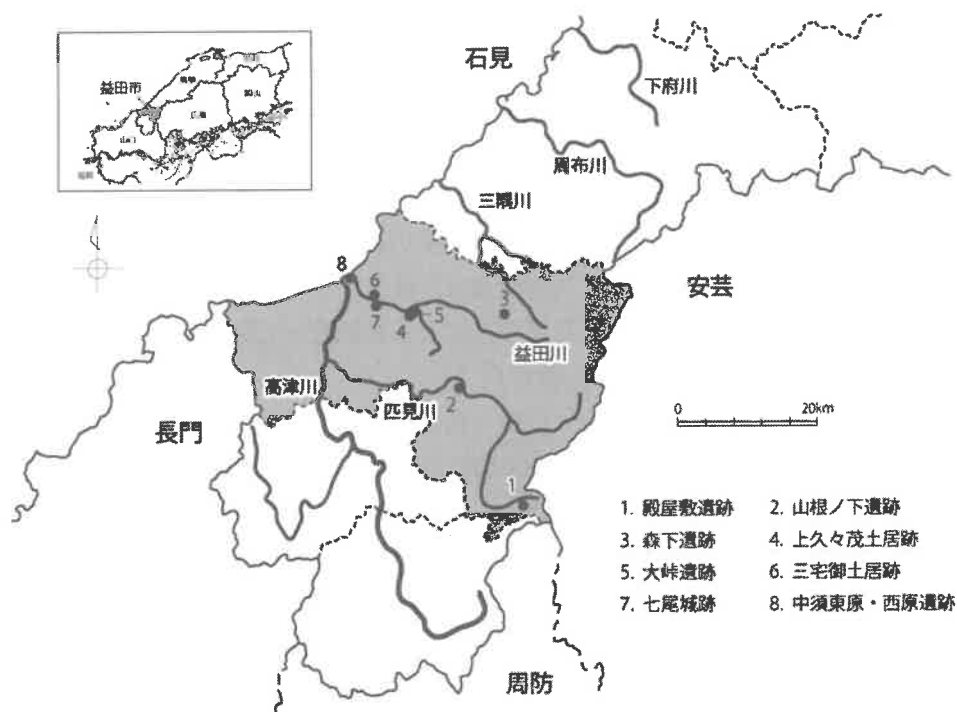
- ・15世紀以降、文献から確認される山陰地域と朝鮮の交流
 - 国人領主周布氏による朝鮮との交易（公式な交易）
 - 漂着民の送還を契機として1447（文安4）年から1502（文亀2）年まで49回の交易の記録
 - 送還により朝鮮側との通交権（交易権）を確保しようとする狙いがあった
 - 対馬を経由して送還、朝鮮関係の情報や通交を確保するためには対馬の有力者の協力が必要
 - 朝鮮と石見を行き来する対馬・石見国の人による日常的な交易や掠奪（海賊）行為（『成宗実録』巻132・134）1481（文明13）年
 - 公式な交易だけにとどまらず、権力に縛られない民間レベルでの交流も活発に行われた
- ・三浦（釜山浦、薺浦、塩浦）と中須東原・西原遺跡を結ぶ朝鮮陶磁器（第5～7図・表2）
 - 島根県内、あるいは日本海側の遺跡において他を圧倒する朝鮮陶磁器の出土割合
 - 朝鮮陶磁器の主体は三浦最大の港町であった薺浦に近い慶尚南道熊川窯で生産された小皿
 - 大半が雑器であり、その他に液体を保管する瓶が多く出土
 - 朝鮮陶磁器は交易品というよりも副産物としての性格が強い
 - 朝鮮～益田もしくは朝鮮～対馬～益田という流通経路が想定できる

4. 三浦の乱と石見銀山の開発

- ・三浦の乱（1510年）を契機として甲辰蛇梁の倭変後の丁未約条により薺浦の港は閉鎖（1547年）
 - 朝鮮側との交渉の港（窓口）は富山浦（釜山浦）に限られる
 - 中須東原・西原遺跡の朝鮮陶磁器も16世紀後半にかけて遺物量が激減
 - 薺浦閉鎖による物流の変化が原因か
- ・温泉津（大田市）や富田河床遺跡（安来市）では茶の湯に関連した朝鮮陶磁器が出土
 - 茶碗としての需要の高まりを背景に、茶会や宴の器として朝鮮陶磁器が用いられる
 - 侘茶の隆興に伴い、従来の「内容物の容器」から「茶道具」としての価値を見出される
 - 同時期の益田では茶の湯に関連した朝鮮陶磁器の出土は確認されていない
 - 16世紀前半を境として益田地域への朝鮮陶磁器の流通経路や量が変化したと思われる
- ・朝鮮陶磁器が激減する一方、中国陶磁器の量はほぼ横ばいで推移（第8図）
 - 益田氏による新たな交易ルートの開拓
 - 1570（永禄13）年 筑前国原郷・筵田両郷を所領とする 長門国見島も領有
 - 日本海交通の要所を押さえる
 - 対馬の宗氏、平戸の松浦氏との関係を深めるなど、文献から知れる16世紀後半における政治的な動きと密接な関係

5. おわりに

- ・今後、温泉津など県内の中世港湾遺跡の調査・研究に期待
- ・比較研究が進むことにより石見での益田地域の位置付けが明確となり、中須東原・西原遺跡の実像に迫ることができる



第1図 遺跡位置図

- 1. 殿屋敷遺跡
- 2. 山根ノ下遺跡
- 3. 森下遺跡
- 4. 上久々茂土居跡
- 5. 大峠遺跡
- 6. 三宅御土居跡
- 7. 七尾城跡
- 8. 中須東原・西原遺跡

表1 主な城館遺跡出土貿易陶磁器の割合

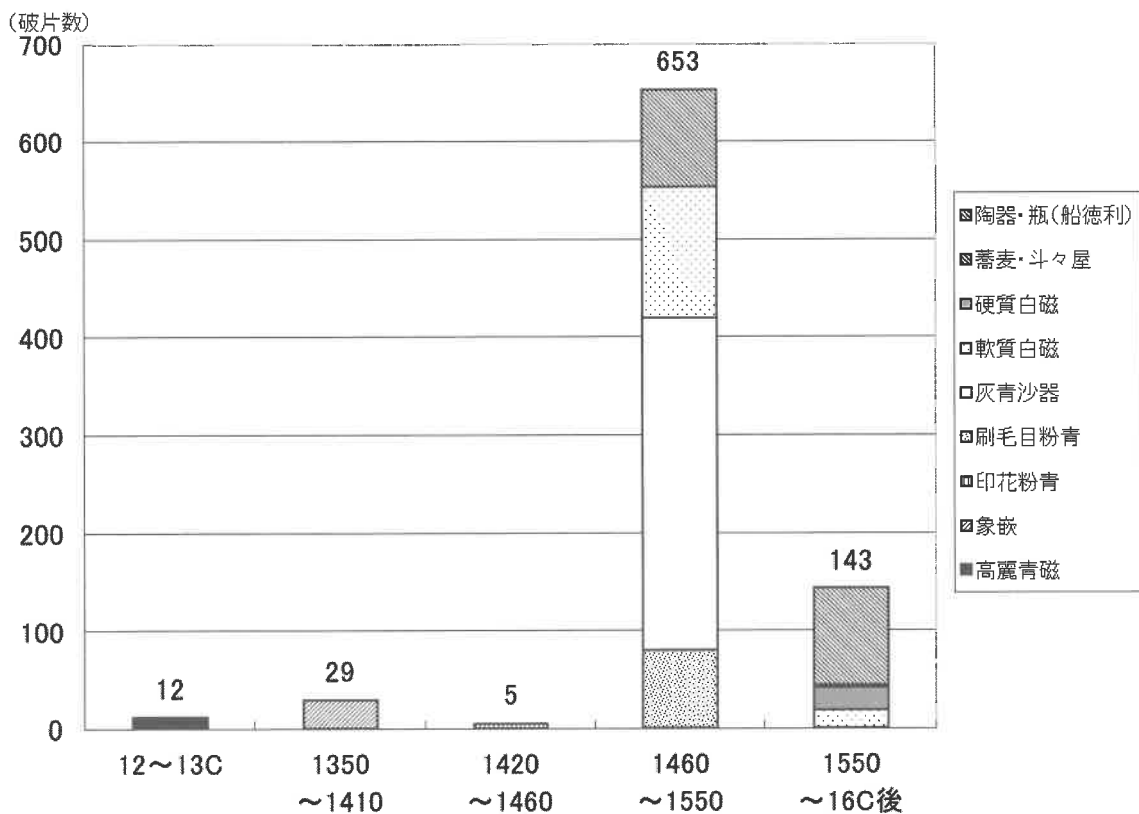
遺跡名(地区)	貿易陶磁器								破片数 (小計)	調査面積 (㎡)	㎡当たりの 破片数
	青磁	白磁	青白磁	青花	天目	茶入	襦袢その他	朝鮮			
殿屋敷遺跡	49	10	1	10	0	0	1	8	79	313	0.25
山根ノ下遺跡	8	2	1	2	0	0	0	2	15	152	0.10
森下遺跡	47	24	2	9	1	1	8	0	92	900	0.10
上久々茂土居跡	98	3	0	5	9	0	5	2	122	2000	0.06
大峠遺跡	57	16	0	14	0	0	0	4	91	1260	0.07
計 (%)	64.9	13.8	1.0	10.0	2.5	0.3	3.5	4.0	100		



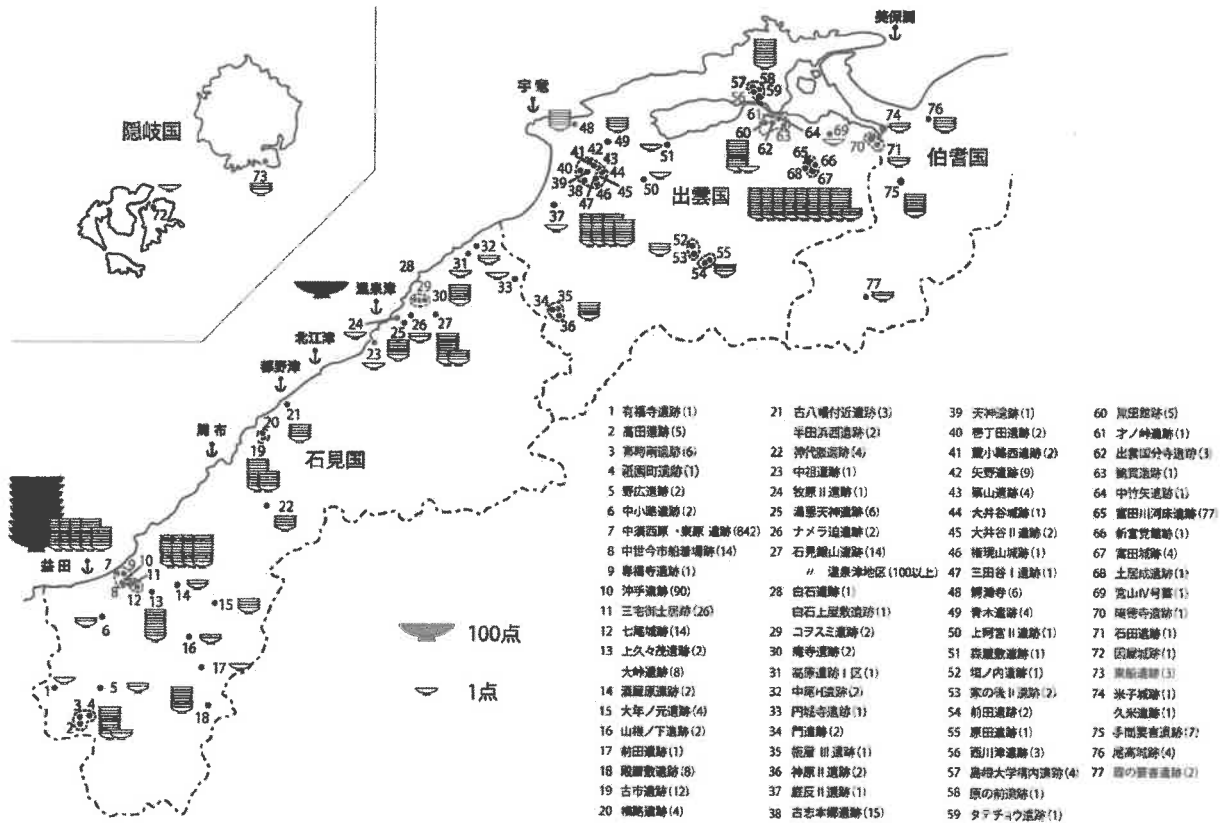
第2図 中須東原・西原遺跡出土品の主な生産地

表2 日本海側の主な朝鮮陶磁器出土遺跡

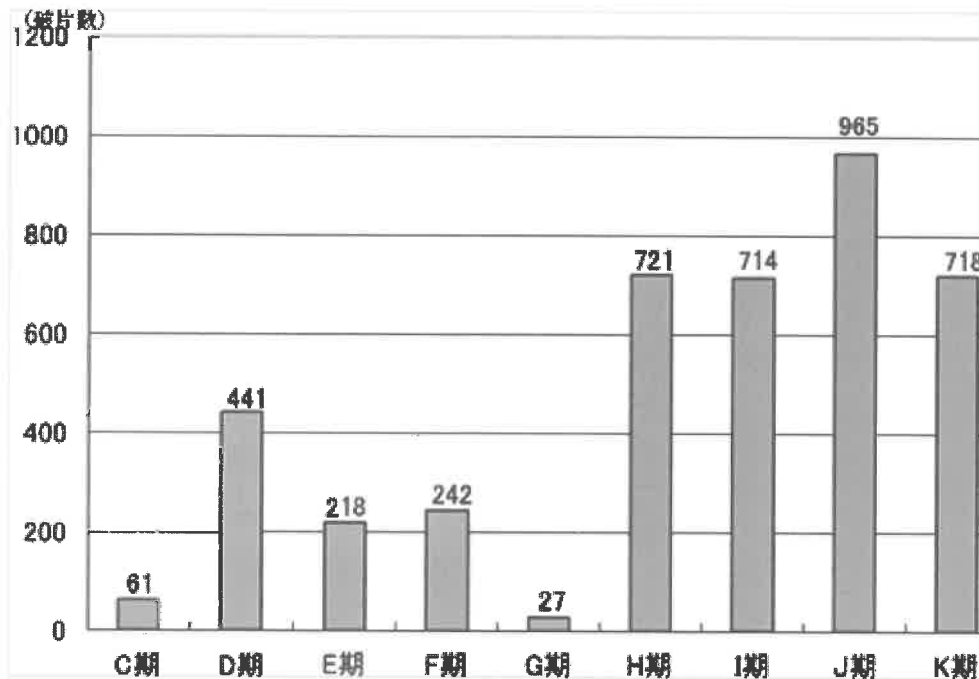
遺跡名	所在地	調査面積 (m ²)	朝鮮陶磁器 (破片数)	点数/面積
大内氏館跡	山口県	8,826	131	0.014842
大内氏関連町並遺跡	山口県	11,476	498	0.043394
宮ノ下遺跡	山口県	2,100	28	0.013333
中ノ浜遺跡	山口県	880	22	0.025
瀬戸遺跡	山口県	1,200	24	0.02
一乗谷・朝倉館	福井県	8,195	65	0.007932
一乗谷・西山光照寺跡	福井県	5,500	437	0.079455
下町D	新潟県	4,220	14	0.003318
下町C	新潟県	8,979	42	0.004678
江上館	新潟県	5,830	14	0.002401
藤島城	青森県	5,263	10	0.0019
浪岡内館	青森県	5,966	13	0.002179
根城本丸	青森県	15,883	12	0.000756



第6図 中須東原・西原遺跡出土朝鮮陶磁器の時期別出土数



第7図 山陰西部における朝鮮陶磁器の出土遺跡と数量



第8図 中須東原・西原遺跡出土中国陶磁の時期別出土数

石見銀山遺跡関連講座

中世石見国 の繁栄

～東アジアと日本海を舞台とする交易に迫る～



益田市中須東原遺跡出土遺物



益田市中須西原遺跡の碑数遺構



中世の石見国では、早くから日本海を舞台とする交易・交流が盛んでした。16世紀になるとさらに活発になり、国内はもとより中国や朝鮮などの東アジアの特産品がもたらされました。

その背景にあったのは石見銀山の存在でした。銀は大量に海外へ流出し、人や物の移動範囲が広がったのです。

このような日本海を舞台とした交易を中心に、石見銀山や中世石見国の繁栄に迫ります。

**入場
無料**

日時 平成30年 **10月28日** 日
13:30～16:00 (開場/13:00)

会場 島根県芸術文化センターグラントワ
(島根県益田市有明町5-15)

事前申し込み不要 定員80名

講演

「石見銀山の開発と中世西日本海地域の交易」

目次 謙一氏 (島根県古代文化センター専門研究員)

報告


「港湾遺跡から見た日本海交易

～15・16世紀を中心に～

佐伯 昌俊氏 (益田市教育委員会文化財課主任主事)

【主催】島根県教育庁文化財課 (世界遺産室) 【共催】益田市教育委員会

問い合わせ先 石見銀山世界遺産センター 講座担当 TEL0854-89-0899 (平日8:30～17:15)



平成30年度 石見銀山遺跡
関連講座 2

奪い合う銀山！石見銀山を めぐる争奪戦の歴史

日 時 平成31年2月9日（土）
13：30～16：00

場 所 和鋼博物館（島根県安来市安来町）

「石見銀山争奪戦」と戦国大名

島根県文化財課世界遺産室 研究員 伊藤 大貴 氏

私からは、「石見銀山争奪戦」と戦国大名」と題し、石見銀山をめぐる戦国大名同士の争い、特に政治的な動きについて、概略のようなお話をさせていただきます。

まず、石見銀山のお話をする前に、戦国時代の石見国についてお話しします。こちらの安来市は出雲国、島根県の東部であります。石見国というのは、今の島根県西部に位置しています。戦国時代という時代は一般的には応仁・文明の乱を境に、各地で戦争の時代に入っていきます。戦国時代の島根県地域では、尼子氏が有名ですが、尼子氏、さらには毛利氏といった戦国大名同士が争う時代になります。そうした中で、石見はどのような状況だったのかというのを簡単にご説明いたします。

石見国の状況を申し上げます。まず、戦国に入る前の室町時代に幕府によって設置された守護に山名氏という一族がおります。山名氏は応仁・文明の乱の混乱に巻き込まれて、勢力を大きく衰退させていきます。石見国は様々な地元の領主が割拠している一方で、守護山名氏の衰退を境に、隣国である周防（山口県）の大内氏が石見国全域に勢力を拡大し支配下に収めていきます。以上の点が戦国時代初期の石見国の置かれていた政治状況です。

そうした中で、石見銀山の発見に至るわけです。「銀山旧記」と呼ばれる、石見銀山の歴史などに関する基本文献がありますが、「銀山旧記」によれば、大永6（1526）年3月に筑前国博多の商人の神屋寿禎が銀山を発見したとされます。ただ、近年では、小林准士さんが大永7（1527）年の方が正しいのではないかと指摘されており、有力な説になっています。このように調査研究の進展に伴って少し発見年が変わってきていますが、今回は小林さんの説に従って大永7年説を前提にお話しします。

その後、朝鮮半島から銀の精錬技術の伝来による生産量の増加、東アジアとの貿易も含める

形で石見銀山の周辺が活況を呈していきます。石見銀山の周辺には人や物資が流入していき、大きな町（都市）が出来上がっていきます。

こうした状況の下で石見銀山をめぐる争奪戦が生じていきますが、「銀山旧記」では次のように書かれています。享禄元（1531）年、銀山に比較的近い川本を拠点としていた領主・小笠原氏が銀山近くの大滝城を攻略して支配をします。その後、天文年間に入ると大内氏、尼子氏と銀山の支配者が変化していき、また大内氏が銀山を奪い返しますが、天文9年には小笠原氏が銀山を攻略し、天文11年に小笠原氏が銀山に所在する山吹城に入ると記されています。こうした「争奪戦」が繰り返された結果、小笠原氏が永禄3年まで銀山支配を行って、最後は毛利氏が銀山を攻略するという流れがあります。

一般的にイメージされやすい、石見銀山をめぐる戦国大名の争いというものは、大体このような「銀山旧記」の説に拠って立ったものが多かったかと思えます。ただ、「銀山旧記」にしばしば登場する小笠原氏については、戦国大名同士の争いに小笠原氏クラスの地元の領主が入り込むのはおかしいとの指摘があります。この点は井上寛司さんが指摘をされています。また、天文年間における尼子氏の銀山領有もそのような事実は認められないという点が原慶三さんによって指摘されています。井上さんや小林さん、原さんをはじめとする先学の研究により、「銀山旧記」の描く銀山争奪戦という構図が大分見直されてきています。そもそも「銀山旧記」自体が江戸時代の編さん物でありますので、どうしても脚色、あるいは事実誤認を一部含んでおります。本日は先学のご研究を踏まえながら、実際の石見銀山をめぐる争いはどのようなものかという点をお話ししていこうと思っております。

それではレジュメの「1. 石見銀山と大内・

尼子両氏」に入ります。大内氏の石見銀山支配ですが、大内義隆が支配する時期が大半になります。石見銀山が位置するのは邇摩郡という地域ですが、大内氏が邇摩郡を支配する際、邇摩郡代として問田興房という人物を任命しています。問田氏の下には現地で実務に当たる邇摩郡奉行がおりまして、郡奉行には片山繁幸・横路吉路という2人の家臣が任命されていました。

一方で、石見銀山の支配については史料が多くなく、なかなか復元するのが難しいのですが、断片的に残る史料をもとにすると、次のような仕組みが見えてきます。まず、大内氏の石見銀山支配は邇摩郡代の問田氏らを介する形ではありません。石見銀山関係の取次を担当する大内家臣には飯田、吉田、青景という当主側近3名が出てきます。その下には大内氏から銀山に派遣される検使という役人がいます。例えば、銀山には銀を掘る技術者（山師）の集団がありますが、そのリーダー格である銀山大工の人たちは「大内氏当主—銀山取次—銀山検使」の下で支配を受けているとされます。

このように、通常の邇摩郡支配と銀山支配については、それぞれ関与している人間が違うことが見て取れます。邇摩郡支配、石見銀山支配、それぞれ別個のものとして築かれていると言えるわけです。銀山の取次役として見える飯田や吉田、青景という家臣は大内義隆の近くにいる側近です。邇摩郡代が関与するのではなく、当主側近が仲介役として関係してくる点を踏まえますと、当主の大内義隆に直接繋がっていく仕組み、大内氏当主が直接石見銀山を押さえるというあり方が浮かび上がってくるのではないのでしょうか。

さらに、銀山の取次役の1人に飯田興秀という人物がおります。飯田興秀は筑前国博多の代官を務めています。貿易の玄関口である博多の支配を担当する家臣が銀山の取次役としても登場するわけです。当時、博多を経由して銀の輸出をしますから、海外貿易をにらんだ形で銀山支配に関与しているのではないのかという推測

も成り立つように思います。

いずれにしても、石見銀山支配というのは周辺地域の支配とはまた違うあり方で、大内氏の当主の大内義隆が直接押さえています。大内氏は石見銀山を他とは異なる地域として大変重要視していたということがわかるだろうと思います。

そうした中で状況が変わってくるのが、尼子氏による石見国侵攻です。尼子氏は、もともとは出雲国守護をしていた京極氏の守護代を務めていました。京極氏は戦国時代の初めぐらいから徐々に衰退をしていき、1500年代の初頭にかけて出雲京極氏が断絶した後、尼子経久が実権を握ることで戦国大名になっていくと言われます。特に尼子氏の場合は、中国地方各地に攻め込んで「十一州の太守」という言い方もされますように、各地に攻め込んでいるイメージもありますが、もちろん石見国も例外ではありません。ただ、これは長谷川博史さんが丹念にご研究されていますが、実態というのは時期によって大きく異なると言われております。

尼子氏と石見国の関係について整理しますと、早い事例では、永正14（1517）年に石見国の守護職をめぐる山名氏と大内氏が争った際に、尼子氏がこれに介入していると言われております。また、大永3（1523）年ごろには石見国那賀郡方面に侵入しています。那賀郡は今の浜田市を中心とする地域ですが、例えば浜田市の高井ヶ岡八幡宮の棟札には、大永3年8月に尼子経久が石見国に攻め込んできて、高井ヶ岡八幡宮の所在している地域のお寺や神社を全部壊したと書いてあります。尼子氏に限らず、軍事行動する際に、お寺や神社が攻撃対象になって焼かれるケースはどこの大名でもよくある話ですが、こういう軍事行動に伴って、地域社会が大きな戦争被害を受けているということがわかります。ただ、1520年代にかけて確認できる軍事行動は散発的な事例であり、実際のところ長続きしません。しばらくの間、尼子氏は石見国よりも山陽方面（備後、安芸、美作など）や播

磨国といった地域への軍事行動に軸足を置いていると見られます。

ただ、天文年間の半ばぐらいから少し流れが変わっていきます。天文9（1540）年ごろから石見銀山の周辺地域で合戦が行われています。天文9年9月15日、場所はわかりませんが、石見銀山のある邇摩郡内で合戦が行われています。また、天文9年12月には温泉津にある櫛山城で合戦がありました。さらに天文10（1541）年1月から3月にかけて、今度は大田郷（現在の大田市大田町）で合戦が相次いでいます。加えて天文12（1543）年5月12日には、尼子晴久が赤穴盛清に対して大田の郊外にある行恒村を給付していますし、また天文12年9月1日には、石見銀山の麓である久利郷で合戦が行われています。同じ年の10月20日には、また尼子晴久が赤穴盛清に川合郷の一部（現在の大田市川合町川合）を与えています。天文12年以降、大田の郊外にある岩山城（現在の大田市久手町刺鹿）に尼子方の武将・多胡辰敬が在番するようになります。このように天文年間半ば以降の石見銀山周辺地域では、相次ぐ合戦や尼子氏による味方への所領給付事例、尼子方の武将が籠る軍事拠点の登場といった事例を確認できます。

ただ、尼子氏が進出できたとしても、ちょうど今の大田の市街地ぐらいまでが境界ではないかと思えます。恐らく石見銀山があるようなもっと奥深くまで入ることはできなかったのではないかと思えます。要するに、この時点の尼子氏は石見銀山を攻略できていないというのが今の理解になっています。一応、石見国内に入ってきて拠点を築くわけではありますが、依然として石見銀山については、大内氏が強固な支配を展開しているというのが天文年間後期の状況であります。少しずつ状況が変化していますが、まだ大内氏による石見銀山支配を突き崩すような事態には及んでいないということです。

続いて、その状況が変わってくるのが、大内氏の内紛以降です。レジュメの「2. 大内氏の内紛と尼子氏・毛利氏」に入ります。先ほど天

文12年に大内氏が出雲国に攻め込むというお話をしましたが、結局、尼子氏の反撃を受けて逃げ帰ってしまいます。この手痛い敗戦後の対応をめぐる、大内氏の家臣団内部では意見対立などが起こり、最終的に大内氏は内紛を引き起こしていきます。特に当主の大内義隆は、この時期になると自分のお気に入りの側近たちを重要視するようになってきます。それに対して不満を抱くのが、大内氏に古くから仕えていた重臣・陶晴賢です。この人は、もともと「隆房」と名乗っていますが、今回の報告では、基本的に「晴賢」という呼び名で統一します。陶晴賢と大内義隆が政治的に対立していき、最終的に陶晴賢は挙兵をして、大内義隆を攻撃します。そして、天文20（1551）年9月1日に大内義隆は長門国の大寧寺で自刃してしまいます。陶晴賢は、新たな当主として大内義長（晴英）を擁立しますが、事実上、陶晴賢が大内氏の実権を握っていくようになります。

では、この流れがどのように石見銀山と関係するののかという点ですが、先ほど申し上げましたように、大内氏の当主が直接石見銀山を押さえています。その当主が亡くなれば、当然影響を受けることが想定されます。この点について見ていきたいと思えます。

例えば、「銀山旧記」の原形とされる「於紅孫右衛門縁起」という史料があります。奥書の年号から「於紅孫右衛門縁起」は中世末期に作成されたとされます。初期の石見銀山の様子を伝える史料としては、大変貴重な証言を残しているもので、一次史料と照らし合わせながら考えていくと十分に利用することができるだろうと思えます。

この中に、この大内氏のクーデターと銀山の関係について重要な記述があります。「銀山旧記」には、大内義隆が死亡した直後、小笠原長雄が銀山大工の吉田正重という人物を切腹させたと書いてあります。ここに出てきた小笠原長雄という人物は、石見銀山に近い邑智郡川本を中心とする国人であります。「銀山旧記」を読

むと、切腹させられた吉田正重は、大内義隆と非常に密接な関係のある大工であると書かれています。吉田正重が切腹させられた日を見ると、天文20年9月18日ですが、大内義隆が自刃した17日後に当たります。つまり、少なくとも義隆が自刃した17日後には石見銀山にも影響が及んでいると考えられるわけです。また、そうなりますと、銀山大工を切腹させた小笠原長雄と大内義隆を攻撃した陶晴賢の両者は恐らく連携しているのだろーと言えらるわけですね。

それだけでは終わらずに、吉田正重は切腹させられてしまったわけですから、銀山大工は空席になってしまいました。では、何をしたかという、陶晴賢は後任の大工として「房宗」という名前の人物を山口から送り込んできたということが書かれております。しかも、この房宗という人物は、名前に「房」という字をつけています。先ほど陶晴賢は、もともと「隆房」と名乗っていたということを示しましたが、「房宗」の「房」という字は陶氏から与えられたものと推測できます。こういう上位の者から名前をもらうこと、いわゆる偏諱を受けていることがわかります。ということは、義隆が亡くなった後、大内氏の実権を握った陶氏は、自分の息のかかった大工を銀山に送り込むことをしているわけでありまして、クーデター後の陶氏が石見銀山支配に関与していると言えるのではないかと思います。つまりは、大内氏の当主は亡くなりますが、実権を握った陶氏によって事実上、銀山は掌握されている。広い意味では依然として大内氏がまだ銀山を押さえているというのが天文20年の状況ということになります。ただ、当主がクーデターで死亡してしまうわけですから、全く影響がないかというそうではなくて、もちろん石見国全体にも悪い影響が広がっていきます。

その後、石見国内では、小笠原氏と福屋氏という地元の領主たちが争いを始めます。巨大な大名権力である大内氏の混乱を突く形で、小笠原と福屋という国人同士が所領の拡大をめぐっ

て紛争を繰り広げていきます。このような地元の領主たちの対立というものは、石見の国内の情勢というのをより一層混迷化させていくわけでありまして。

そうした中で登場してくるのが、安芸国の戦国大名の毛利元就です。安芸高田の郡山城主です。もともとは安芸国の一人にすぎないですが、最後は中国地方の広範囲を支配する大大名にのし上がっていきます。この時期の毛利元就は、大内方の安芸国あるいは備後国の地元の領主たちを取りまとめる軍事指揮者のような役割をしていました。地元の領主たちのリーダー格のような存在ですが、伝統的に安芸の領主たちは中国山地を越えて石見の領主たちとも関係を取り持っていますので、毛利氏も次第に石見国内の情勢に関与してくるようになります。また、天文20年以降、小笠原と福屋の争いが広がりますが、毛利元就やその子供の吉川元春などは、石見国内の争いに仲介役・調停者として介入し、石見国内に徐々に進出をしていくわけでありまして。

また、状況が変わってきますのが天文22(1553)年の秋です。この当時、大内氏の実権を握っていた陶晴賢は、津和野の領主の吉見正頼を討とうとします。伝統的に陶と吉見というのはお互い仲が悪いということもあって、この機会に吉見氏を成敗することになります。そして、大内方の安芸・備後・石見などの領主たちに吉見氏攻めへの協力を要請してくるのです。

毛利氏は、尼子氏が安芸・備後方面に攻め込むような動きを続けている中で、このような新しい動きに巻き込まれることも含めて、対応に苦慮していきます。そうした中で毛利氏は、天文23(1554)年5月に一転して反大内氏の立場を鮮明にします。これまでの毛利氏の政治的姿勢は基本的に大内方に味方していますが、この時に大きく転換していくわけですね。これを受けて、今まで対立していた尼子・大内両氏は一転して協力関係になります。そうすると「毛利氏VS大内・尼子両氏」という新しい対立構図が

成立しますので、天文23年以降の情勢は大きく流れが変わっていきます。

こうして対立軸が非常に複雑に変わっていきませんが、続いて「3. 尼子・毛利両氏の「銀山争奪戦」」に入ります。

弘治2（1556）年ごろの石見銀山の周辺状況について、説明しておこうと思います。まず、石見銀山支配の要になる山吹城というお城があります。城郭については、これから山根さんに詳しくお話いただきますが、山吹城にいた城番たちの動きについて説明します。

山吹城は、石見銀山の支配拠点として大内氏が築城したものです。大内氏が支配していた時期には、大内氏の指示で福光氏や石見吉川氏、あるいは刺賀氏といった石見銀山近くの地元の領主たちが城番として詰めていたことが知られています。弘治年間に入ると山吹城周辺の動きが、また変わってまいります。レジュメには弘治元（1555）年10月に毛利元就が巖島合戦で陶晴賢を破ると書いていますが、これで大きく形成が逆転していきます。毛利氏が一気に有利になっていくわけですけれども、弘治2年の春頃に尼子晴久が石見国に侵攻してくるという状況になります。少なくとも弘治2年3月までには、山吹城衆の一人である刺賀長信が毛利方の一員として史料に見えますので、恐らくは弘治元年の暮れ以降に、山吹城に詰めていた地元の領主たちも大内氏の下を離れて、毛利方に帰属することになったのだろうと言われています。つまり、このこと自体は毛利氏による石見銀山掌握を示しておりますので、これをもって大内氏の石見銀山支配は事実上終焉を迎えたと言えるわけです。

弘治2年の石見東部地域は、川本の小笠原氏、温泉津の温泉氏を除くと、ほとんどが毛利氏に味方するような情勢が形成されていきます。尼子氏にとっては不利な情勢になっていきますが、事態を打開しようとした尼子晴久は自ら大田へ出陣してきます。そして尼子・毛利の両者は攻防戦を繰り返すのですが、石見銀山

周辺も一連の戦いに巻き込まれていきます。例えば、弘治2年3月、尼子方の小笠原長雄は、自身の配下である久利氏に対して「銀山境合戦」の戦功を賞しています。具体的にどの辺かはわかりませんが、石見銀山の入り口付近で合戦が行われているということがわかります。

一方、5月11日には、毛利氏が「銀山通路」で雲州衆と合戦をしていることが見えます。「銀山通路」というのも、またこれも具体的な位置がわかりませんが、銀山に通じる道沿いというのは確かだろろうと思います。銀山に通じる陸路沿いで尼子方と合戦をしているのです。さらに6月26日には毛利元就・隆元親子が、山吹城にいる刺賀長信の「進退」を承知したこと、刺賀親子ともに粗略に扱うことはしないことを約束しているという史料があります。「進退」という内容については、少し具体的な中身がわかりませんが、恐らく身分保証というようなものだろうと思います。この頃になりますと、石見銀山周辺に尼子方が侵入して合戦が相次ぐようになっていきますので、戦況が悪化する中で、刺賀氏を見捨てるようなことはしないと毛利氏に改めて約束させていると考えられます。

一方で7月の終わりごろ、毛利元就は石見銀山近くの忍原にて尼子方に敗北したとの一報に接しています。忍原は石見銀山の至近距離にある地域です。尼子氏がじりじりと銀山近くまで到達してきている様子がわかります。

そして8月9日には、毛利氏は「銀山尼子陣」を佐波氏や山吹衆の協力の下で退散させています。この時、邇摩郡内にある三久須や矢筈、三子といった敵方の城も退散したと毛利元就は言っていますが、「銀山尼子陣」とある点も踏まえすと石見銀山地内まで尼子氏が入ってきていることがうかがえます。一応、毛利氏は尼子氏を退散させたと言っていますが、石見銀山近辺が非常に緊迫した情勢に追い込まれていることは確かだと思います。

一方で、毛利氏がいつまで石見銀山を掌握で

きていたのかという点を考えますと、8月13日付の毛利元就書状には、銀山に林孫右衛門という人物を使者として派遣したとありますので、少なくとも8月13日までは毛利氏が掌握しているのではないかと思います。

ところがまた状況が変わってきます。9月3日、尼子晴久は山吹城などの敵城をすべて制圧したと味方の国人に伝えています。この時の晴久は大田におりますから、銀山からもさほど距離は離れておりません。つまり、尼子氏の石見銀山制圧は9月3日よりもそんなに離れてはいない時期と思います。史料が残っていないので何とも言えませんが、8月中旬から9月初めまでの間に何かしらの合戦があって、尼子氏が石見銀山を制圧していくことになるのだろうと思われれます。これは、毛利氏にとって大きな敗北になります。毛利氏が石見銀山を回復するのは6年後になりますので後々まで尾を引くことになるわけです。

先ほど登場した毛利方の武将・刺賀長信は、温泉津にある海蔵寺というお寺で切腹をさせられました。新たに山吹城を押さえた尼子氏は、古志氏などの直臣たちと一緒に出雲国須佐高櫓城主であった本城常光という人物を城番として置きました。山吹城、石見銀山をめぐる情勢は新たな局面を迎えていきます。

ところで尼子氏の石見銀山制圧は、何を目的にしていたのかという具体的などころまではわかりませんが、恐らく小笠原氏の存在が大きいのではないかと思います。石見東部における最大の尼子協力者である小笠原氏は、石見銀山を越えた山の向こうにある川本の領主です。また、この頃になりますと石見東部における尼子方領主は非常に数が限られてきますので、その中の一人である小笠原氏と連携を取りたいと考えたのではないのでしょうか。実際に見ると、交通路をめぐる争いという側面が出てきます。

江戸時代の初頭に成立した「森脇覚書」という史料には、大田に出陣した尼子晴久が石見銀山を攻めるために銀山に向かう陸路を封鎖しよ

うとしたことが見えます。また、晴久は小笠原氏に加勢するために出陣したともありますので、小笠原氏と連携するための陸路掌握、最終的には小笠原氏への援軍派遣に繋がっていくのだろうと思います。そうすると、尼子・小笠原両氏の連絡を取る際に大きな障害になってくるのが中間地点の石見銀山です。石見銀山には毛利方の武将として刺賀長信がおりますから、両者連携の妨げになるわけです。尼子氏が執拗に石見銀山に対して攻撃を仕掛けている背景の一つにはこのことが影響しているのではないかと考えられます。弘治2年の途中で尼子氏は石見銀山を制圧して、山吹城も掌握しますが、尼子氏にとって比較的スムーズに小笠原と連絡がとれるようになったのではないかと思います。やはり交通路掌握の問題、尼子方との連携という要素は無視することはできないように思います。

一方で毛利氏も、小笠原氏の存在が軍事行動上の大きな障壁となっていることを十分に認識しておりまして、今度は小笠原領内への侵攻を進めていきます。小笠原氏に対しての攻撃を強化していった結果、小笠原氏の本拠地である川本の温泉城が毛利氏に包囲されていきます。包囲戦の末、小笠原氏は永禄2（1559）年の夏には毛利氏に降伏します。尼子氏にとっては、今まで協力してくれた味方の小笠原氏を失ってしまいます。しかも、毛利氏に降伏した小笠原氏は、吉川元春の配慮もあって毛利方として参戦してきます。今まで味方だった人間が、逆に敵になるということです。戦乱の際にはよくある話ですし、すぐに石見銀山を奪われたわけではありませんが、尼子氏にとっては手痛い状況になったことには変わりありません。

こうした中で尼子氏は別の手を考え始めます。永禄2年以降、尼子氏は室町幕府将軍・足利義輝に対して、和平の仲介を依頼し始めます。足利義輝という人物は、このような各地の戦国大名同士の争いに調停役として関与することをよくやっておりますので、尼子氏は一連の

争いに足利將軍家を引っ張り出してくるわけ
です。そして足利義輝は自分の叔父である聖護院
門跡の道増を安芸国に派遣するなどして、積極
的に和平調停に関与しました。戦国時代の足利
將軍家は無力になったというのが通説的な理解
ですが、最近では研究の進展により依然として
ある程度の影響力を残している存在と言われて
おりますので、足利將軍家がこういうことをや
り始めると、毛利氏も無下に断ることができま
せんでした。將軍である足利義輝の顔も立てる
必要があるので、毛利元就は非常に困惑したよ
うです。ただ、そうはいつでも、簡単に和平を
受け入れるわけにはいきませんから、交渉は難
航します。

その後、両者が粘り強く交渉した結果、永禄
4（1561）年12月によりやく和平が成立しま
す。尼子氏にとっては何とか望みが出てきたと
いうような状況になりますが、間の悪いこと
に、また厄介事が前後して起こってしまいま
す。それは福屋氏の尼子氏への寝返りです。こ
の背景には小笠原氏の毛利氏に降伏したこと
の余波が影響していました。もともと小笠原氏と
敵対していたのが福屋氏でした。永禄2年に小
笠原氏が毛利氏に降伏して、毛利方に転じてい
きますが、福屋氏は、今まで敵対していた小笠
原氏が自分と同じ陣営に加わってくることをよ
く思わなかったようです。福屋氏は徐々に毛利
氏に対する不満を抱いていき、尼子氏と密かに
手を結ぶということを考えます。そして永禄4
年11月ごろになると、福屋氏は尼子方に寝返
り、毛利方の拠点であった福光城（現在の大田
市温泉津町福光）を攻撃します。その一方で福
屋氏は、尼子氏の援軍を期待していたように
すが、実際は上手くいきませんでした。永禄5
（1562）年1月ごろの尼子氏の動きを伝える史
料によると、尼子氏は福屋氏の行動には関与し
ませんということを言っているようです。尼子
氏は、折角毛利氏と和平が成立したのに、やや
こしい動きになっていくのは好ましくないと判
断したらしく、毛利氏への一定の配慮を見せる

わけです。援軍を得られなかった福屋氏は、毛
利氏によって激しい攻撃を受けていきます。福
屋氏の居城・松山城攻めが永禄5年2月に行わ
れますし、一方で石見銀山近辺でも2月ごろに
は石見銀山方面の情勢が「物騒」という知らせ
が伝わっています。また、同じく2月には、石
見銀山に近い三久須の敵を毛利氏が撃退したこ
とが見えますので、石見銀山周辺の情勢は再び
厳しくなっていきます。福屋氏の軍事行動を
きっかけに毛利氏は再び石見東部での攻勢を強
めていくのです。

こうした中、永禄5年3月、福屋氏は出雲国
杵築に逃亡します。毛利氏の激しい攻撃に堪え
切れなくなって、最終的には出雲国に逃げ込ん
でしまいます。続けて6月には、温泉津の温泉
氏や鱈走城の牛尾氏といった現在の大田市沿岸
部に拠点構えていた尼子方が相次いで撤退し
ました。さらに石見銀山の山吹城に籠っていた
本城常光も同じくして毛利方に投降していま
す。実は本城常光は数年前から毛利氏に寝返り
工作を受けておりました、本城氏も変化する情
勢の下で毛利氏への帰属を決意していきます。

こうして尼子方が相次いで撤退することで、
石見東部は完全に毛利氏が制圧することになり
ます。そして石見銀山も毛利氏によって再度奪
回されますが、それだけで終わりませんでした。
毛利氏に投降した本城常光はそのまま山吹
城主として活動を続けたようですが、この年の
秋までに毛利氏によって一族が討滅されてしま
いました。恐らく毛利氏としては、石見銀山
（山吹城）を直接掌握したいという思いがあっ
たらしく、もともと尼子方であった本城氏は潜
在的に危険という認識をしていたと思われま
す。そのため、最終的に本城一族は討滅させら
れてしまうわけです。その代わりに石見銀山
（山吹城）には毛利方の武将が籠め置かれます
ので、一連の動きを経て石見銀山は毛利氏に
よって完全に掌握されることとなります。

最後になりますが、少しまとめておきます。
石見銀山をめぐる戦国大名同士の「争奪戦」は

実際のところ、大内氏の強固な支配が長い期間続きますが、大内氏の混乱を契機に今度は尼子・毛利両氏の争いへと移行していきます。そして弘治2年から続く石見銀山をめぐる尼子と毛利の争いは、弘治2年8月に尼子氏が山吹城を制圧しますが、永禄5年6月に尼子氏が石見東部から撤退しますと、石見銀山も毛利氏が奪回します。そして、その年の秋には山吹城主の本城氏も一族ごと討滅させたことにより、正式に石見銀山は毛利氏の支配下に収まっていくという流れで争奪戦が終わるわけです。これ以降、慶長5（1600）年の関ヶ原の戦いまでの約40年間にわたって、毛利氏による石見銀山支配が続いていきますが、石見銀山をめぐる状況は新しい段階へと突入していきます。

非常に雑駁なお話の上に、資料も前後して大変お聞き苦しいところが多かったかと思いますが、私からのお話は以上となります。御清聴ありがとうございました。（拍手）

「石見銀山争奪戦」と戦国大名

鳥根県文化財課世界遺産室

伊藤大貴

■はじめに

(1) 戦国時代の石見国

戦国時代

- ・一般的には応仁・文明の乱（1467～1477年）をきっかけにして始まる、各地の戦国大名が勢力争いを行う戦乱の時代

石見国の状況

- ・室町幕府によって設置された守護（山名氏）は、応仁・文明の乱の混乱に巻き込まれて衰退
- ・益田、周布、三隅、吉見、福屋、小笠原といった自立的な国人が割拠する一方、周防国山口の大名・大内氏が事実上石見を支配下に収める

(2) 石見銀山の発見と「銀山争奪戦」

石見銀山の発見

- ・『銀山旧記』によると、大永6（1526）年3月に筑前国博多の商人・^{かみやじゅてい}神屋寿禎が発見

※近年の研究では大永7（1527）年説が有力

- ・朝鮮半島から銀の精錬技術の伝来による生産量の増加、徐々に銀山周辺が活況
- ・海外貿易とも結びつく形で盛行、ヒト・モノが集まる場（巨大な都市）に成長

『銀山旧記』の語る「銀山争奪戦」

- ・当初、大内氏が銀山を支配するも近隣の国人・小笠原長隆が享祿4（1531）年に奪取
- ・その後、大内氏・尼子氏・小笠原氏の間で石見銀山を奪い合う争いへと発展

【近年の研究からみた「争奪戦」の実態】

- ・『銀山旧記』は後代の編纂物で脚色や事実誤認を一部に含む
→実際には石見銀山をめぐる戦国大名の争いはいかなるものだったのか

1. 石見銀山と大内・尼子両氏

(1) 大内氏の石見銀山支配

- ・大内氏家臣と銀山現地の代官や職人集団の頭領が結びつく仕組み
- ・現地の国人や邇摩郡代官を経由するのではなく、大内氏当主が直接押さえる支配体制
- ・取次役の大内家臣の中には博多代官（飯田興秀）も含まれており、銀を輸出する貿易の玄関口である博多の支配とも連携

(2) 尼子氏の石見国侵攻と銀山

尼子氏の成長と他国侵攻

- ・尼子氏：出雲守護京極氏の守護代→京極氏の衰退後、国内の実権を握る

- ・ 尼子経久「十一州の太守」butその実態は時期によって大きく異なる
- ・ ～天文年間前期：安芸・備後や美作・播磨方面への侵攻が主。時期によって方向性異なる

尼子氏の石見国侵攻

- ・ 早い事例：永正14（1517）年、石見守護職をめぐる山名・大内両氏の争いに介入
- ・ 大永3（1523）年ごろ：石見国那賀郡方面に侵入

【例】 浜田市の高井ヶ岡八幡宮棟札

「^(ママ)太永三 ^{みずのとひつじ}〈癸未〉八月下旬頃、雲州尼子伊予守経久云武士発向此国、当郷内神社仏寺不嫌
靈地悉破却畢」

- ・ 天文9（1540）年～：尼子方が安濃・^{あの}瀬摩郡内（大田・久利・温泉津等）で軍事行動
- ・ 天文12（1543）年ごろ：大内義隆の出雲侵攻失敗→敗走する大内勢を追って石見侵入
- ・ 安濃郡を制圧したと見られるが、現在の大田市東部地域に限定 ※石見銀山には至らず

【小括】

- ・ 大内氏：当主が直接銀山を掌握する、強固な支配体制の存在
- ・ 尼子氏の対外侵攻：大田市東側の一部を制圧するも、実際には石見銀山支配に至らず

2. 大内氏の内紛と尼子・毛利氏

(1) 大内氏のクーデターとその影響

陶晴賢のクーデター

- ・ 出雲侵攻失敗後の大内氏：政治路線をめぐる内部対立深刻化
- ・ 大内重臣の陶晴賢（隆房）：新しく登用した側近たちを重視する当主義隆に不満・挙兵
- ・ 天文20（1551）年9月1日、長門国大寧寺で義隆自刃
- ・ 陶晴賢は新たな当主として大内義長（晴英）を擁立、大内氏の実権を握る

クーデター直後の石見銀山

- ・ 石見銀山支配は大内氏の当主が直接関与
- ・ 小笠原氏が銀山大工・吉田正重を切腹させ、陶晴賢が「房宗」という後任の大工を任命
- ・ 吉田正重の切腹日：天文20年9月18日→大内義隆死亡の17日後
- ・ 後任の大工「房宗」：陶晴賢の偏諱^{へんき}を受けて「房」の字を名乗っている可能性高い
- ・ 義隆死亡後、大内氏の実権を握った陶氏が自身の影響下にある人物を銀山に送り込む
- ・ クーデター後は陶氏が銀山支配に関与、依然として大内方の支配体制は継続

(2) 石見国の混乱と毛利氏の動き

小笠原・福屋両氏の争い

- ・ 天文20年の陶氏クーデター：大内氏権力に政治的な動揺もたらす
- ・ 巨大な大名権力の混乱→小笠原・福屋両氏が所領拡大や江の川水運の掌握を目論み対立
- ・ 地元の領主たちの対立が石見国の情勢をよりいっそう混迷化させる

毛利氏の大内氏離反

- ・ 毛利元就：安芸高田の郡山城主。大内方の安芸・備後国人を取りまとめる軍事指揮者として成長、石見国の領主とも繋がりを持つ

- ・毛利元就・吉川元春ら：小笠原と福屋の争いの調停者として介入、石見へ進出
- ・天文22（1553）年秋：陶晴賢、津和野の吉見正頼討伐への協力を芸備の諸領主に要請。毛利氏側は対応に苦慮
- ・天文23（1554）年5月：毛利氏、反大内（陶）方へ転じる。これを受けて尼子・大内両氏は一転して和睦、毛利氏との対決へ **※毛利氏vs大内・尼子氏の構図が成立**

【小括】

- ・陶晴賢のクーデター：石見銀山にも少なからず影響（銀山大工の切腹）→陶氏が掌握することで大内方の銀山支配は継続
- ・大内氏権力の混乱を突いた小笠原・福屋両氏の争いに毛利氏が調停役として関与
- ・毛利氏：天文23年5月に大内氏から離反、新たな対立軸形成

3. 尼子・毛利両氏の「銀山争奪戦」

(1) 尼子・毛利両氏の抗争と山吹城

山吹城衆の動向

- ・山吹城：石見銀山の支配拠点として大内氏が築城
- ・大内支配期：大内氏の指示で福光、石見吉川、^{きつか}刺賀氏といった銀山周辺の領主が在番弘治年間の動き
- ・弘治元（1555）年10月：毛利元就、厳島合戦にて陶晴賢を破る
- ・同2（1556）年3月～：尼子晴久、石見国へ侵攻
- ・少なくとも同2年3月～山吹城衆の刺賀長信は、佐波氏と共に毛利方の一員として見える
- ・弘治元年の暮れに山吹城衆も大内を離反して、毛利方へ帰属（石見銀山の毛利氏制圧）

※大内氏による石見銀山支配の終焉

(2) 尼子氏の石見銀山制圧

尼子氏の動向

- ・弘治2年の石見東部：小笠原・^{ぬく}温泉両氏を除いて、ほとんどの領主が毛利氏に味方
- ・尼子晴久：自ら大田へ出陣、毛利氏との間での攻防戦を繰り広げた末、山吹城を制圧
- ・毛利方の山吹城衆・刺賀長信らは温泉津の海蔵寺にて切腹
- ・尼子方が新たに入れた山吹城衆：尼子直臣（古志氏ら）+本城常光（もと^{す さ た か や ぐら}須佐高櫓城主）

尼子氏の銀山制圧と小笠原氏

- ・小笠原氏：川本の^{ぬく}温湯城に拠点を置く石見東部最大の国人、石見銀山周辺で勢力拡大
- ・天文年間前期は尼子氏に与していたが、後期以降は大内方として活動
- ・弘治年間：大内と尼子vs毛利→石見に侵攻した尼子氏と協力し、毛利氏と戦う
- ・尼子氏の銀山制圧：大田—銀山—川本という交通ルートを確保する目的も
=小笠原氏との連携維持・同氏への支援

(3) 毛利氏の小笠原氏攻めと石見銀山掌握

毛利氏の小笠原氏攻め

- ・小笠原氏：銀山に最も近い尼子方の国人＝石見平定を進める毛利氏にとっての障害
- ・小笠原領内への攻撃を強化、温湯城包囲→永禄2（1559）年夏、毛利氏に降伏
- ・尼子氏にとって最大の支援者の一人を失う

※降伏した小笠原氏は吉川元春の配慮もあり、毛利方として参戦

将軍・足利義輝の和平工作

- ・永禄2年ごろ～尼子氏、将軍足利義輝よしてに毛利氏との和平斡旋を依頼→交渉開始
- ・毛利氏は困惑するも将軍家の介入もあって無下に拒否できず（交渉難航）
- ・永禄4（1561）年12月：ようやく和平成立

小笠原氏の毛利氏降伏と和平の余波

- ・もともと小笠原氏と敵対していた福屋氏が不満を抱く
- ・福屋氏は尼子方に寝返るも尼子氏は毛利氏への配慮から積極的な支援をせず
- ・永禄5年2月～福屋方の松山城を毛利氏攻撃、最終的に福屋隆兼は出雲国杵築へ逃亡

毛利氏の銀山掌握と尼子氏の石東撤退

- ・毛利氏は福屋氏の離反を受けて攻勢を強める
- ・永禄5（1562）年6月：尼子方、相次いで石東地域から撤退
- ・同年6月：山吹城の本城常光も毛利氏へ降伏

※同年秋には毛利氏が本城常光を殺害して山吹城を直接掌握

【小括】

- ・弘治2年～：石見銀山をめぐる尼子・毛利両氏の争い→尼子氏が山吹城制圧（＝争奪戦）
- ・永禄5年6月：尼子氏が石東地域から撤退、石見銀山も毛利氏が奪回

※以後、毛利氏が関ヶ原の戦いまでの約40年間にわたって石見銀山を支配

■おわりに

「石見銀山争奪戦」の実像

- ・実際には大内氏の強固な支配継続、大内氏衰退後の弘治年間より尼子・毛利氏の攻防戦へ

【参考文献】

井上寛司「石見小笠原氏と石見銀山」（『平成26年度石見銀山遺跡関連講座記録集』鳥根県教育委員会、2015年）／大田市教育委員会編『石見銀山学ことはじめ I 始』（大田市教育委員会、2018年）／小林准士「解題一『銀山旧記』の成立事情一」（『石見銀山史料解題 銀山旧記』鳥根県教育委員会、2003年）／佐伯徳哉「石見銀の東アジア流出をめぐる戦国期西国地域権力・社会」（『石見銀山関係論集』鳥根県教育委員会、2002年）／長谷川博史「戦国期の地域権力と石見銀山」（『世界遺産石見銀山遺跡の調査研究』4号、鳥根県教育委員会、2014年）／長谷川博史「大内氏時代の石見銀山」（石見銀山研究会レジュメ、2015年6月）／原慶三「尼子氏の石見国進出をめぐる」（『山陰史談』29号、2000年）

石見銀山を取りまく山城 - 築城と改修の痕跡をさぐる -

元松江市教育委員会史料編纂室 専門官 山根 正明 氏

「石見銀山を取りまく山城 築城と改修の痕跡をさぐる」というテーマでご報告をさせていただきます。伊藤大貴さんの確かな史料に基づいた明快な報告と比べまして、私の報告は、縄張り調査という方法からも奥歯に物の挟まったような、そういった程度のお話ししかできないんじゃないかと思います。あらかじめお断りを申し上げておきます。

はじめに

報告のねらい

お話しをさせていただきたいポイントは大体三点ございます。まずは、メインテーマである石見銀山の争奪戦にかかわる山城を見ておきたいと思います。そして争奪戦の後、毛利氏がそれを維持、防衛する、その間の改修の痕跡、あるいは新規に築城したと考えられる山城を、縄張り調査という方法によって検討したいというのが第一点であります。縄張り調査という方法とそれによる研究は、かなり特殊な言葉を使います。従って、山城の築城過程や山城を構成する部位の役割とか機能を解説することによって、その理解を深めていただきたいと思いますというふうに思います。

次に、温湯城攻めの陣城の配置から、毛利氏による城攻めの実態を追求してみたいというのがねらいの第二点目であります。

それから、銀山経営の重要な拠点となりました温泉津の港、これを防衛するために鵜丸城と呼ばれる山城が築城されます。この築城経過については、信頼できる文献史料が残っております。といっても、実質一点の古文書しかないのですが、鵜丸城がどういうふうにならされたかという背景を検討してみたいというのが第三点目でございます。

1. 山城の築造

山城の部位とその機能

これ(スライド1)は、矢滝城の主郭から見た仙ノ山と、左手が山吹城です。山吹城の築かれたのは要害山と呼ばれる山で、標高が414mあります。右手の仙ノ山は537mあって、その上には石銀集落がありました。銀の採掘や製錬に携わった人たちの住まいや工房の跡が、発掘調査によって明らかにされております。

山吹城から北の方向を見下ろしますと、眼下の中央に広がるのが大森の町並み(スライド2)です。画面の上のほう、谷合いを挟んで仙ノ山を見あげることができます。山吹城の中央部には、近世の城ですと本丸に当たる主郭があって、そこから大森の町並みを見おろした写真です。

山吹城の縄張り図がこれ(スライド3)です。こういう図が、いわゆる縄張り図です。縄張り調査と申しますのは、城や居館(土居)の地表面を丹念に歩いて起伏や段差を読み取り、その特徴をこういった縄張り図に書きとどめるわけです。それをたくさん集め、個々の城の縄張りや普請技法の特徴だとか、全体的な変遷の中でのその城の位置づけだとかの考察を深めていくというのが縄張り研究です。

先ほども申しましたように、縄張り研究ではちょっと特殊な言葉を使います。山城やあるいは居館(土居)を構成する部分部分の呼び名とその役割、そうしたものを前もって簡単に説明させていただきたいと思います。

この四つの用語(スライド4)だけは前提としてご理解をいただきたいと思います。まず一点目、曲輪、「くるわ」と読みます。郭という字を書くときもあります。周囲を急傾斜に削り落としたりしまして、その傾斜面を切岸と呼ぶんですが、登りにくくした平場のことを曲輪と申します。設けられる位置や役割によって、中

心になる曲輪が主郭、あるいは求められる役割によって水の手郭なんていうふうな呼び方をすることがあります。曲輪を重ねて造られるというのが山城の特徴で、それは松江城のような近世城郭も基本的には変わらないのです。

次に、堀切という言葉も時々使うことがあると思います。これは、尾根筋から攻め込む敵兵を遮断するために、尾根筋に直角に空堀を掘った防御施設をいいます。何本か連続して堀切を掘るということもございます。

三点目に土塁、これは土手です。土を盛り上げて、たたいて固く締めて造ったり、逆に地山を削り残して造ったりした土手を土塁と申します。これにも豎土塁だとか登土塁なんていう種別があります。

四点目が虎口、お城であったり、居館であったり、あるいは一つ一つの曲輪の出入り口のこととも虎口と申します。これにも坂虎口という、坂を登って入る入り口もあれば、その入り口のところが食い違っている食い違い虎口、あるいは四角い一柵のような形をした柵形虎口だとか、色々なタイプがあります。私からの今後のご報告に対しては、曲輪、堀切、土塁、虎口、この四つの用語を頭にとどめておいていただければよろしいかと思います。

山城の築造過程と縄張り図の見方

もう少し踏み込んで、実際のところ、築城工事はどんなふうに行われるものかということ、一つのモデルを示すことによってお示します。と同時に、縄張り図を見る時の約束事もお説明をさせていただきたいと思います。

城であっても館であっても、まず目的に応じてどういう場所に造るかということ、これが非常に大事でして、地取りと申します。その上で全体の配置設計をする、これが縄張りです。そして、土を動かして土木工事を、これが普請であります。大体中世の山城の築造過程はここまでです。天守を初めとして櫓を造ったり、御殿を造ったりなんていう建築工事は、作事と

申します。近世の城ですと、この作事のウエートが非常に高くなってきますけども、中世の山城、あるいは館は普請までの段階が中心になります。

それを改めて模式図として例示しましたが、この図（スライド5）です。築城にあたっては、地取りをして縄張りを決めますと、地山の樹木を切り払います。その地山を削って、削った土をならしたりあるいは盛り上げたりなどの土木作業をしながら、曲輪を造っていくわけです。ごらんのように、ここの辺りでは削られた土をたたいて締めて曲輪を広げ、こちらは削り落として急傾斜にする。こういうふうな急傾斜が切岸と申すわけですが、切岸を縄張り図では毛羽線で書くという約束事になっております。

普請の作業をさらに進めますと、例えばこんなふう（スライド6）に、主郭の中央部にさらに土盛をしたりすることもあります。その上に、火の見櫓みたいな、井楼櫓を造って遠くが見通せるようにする、そのための足場を造ったりすることもあります。この櫓台が発展していくと天守台になっていくわけです。

例えば、主郭の南側が緩やかな斜面になっているとしますと、その緩斜面から攻め上ってくる敵兵に対抗して腰郭を構えて応戦したりもします。主郭に対して、近世城郭だったら二の丸にあたる、一段下った位置にかなり広い曲輪（I郭）を造る場合もあります。I郭の東南端をカギ型に土塁を張り出し、そこに兵達を配置して緩やかな斜面から攻め上る敵兵に対して弓矢や、あるいは時代が下れば鉄砲を射かけて防ぐこともされます。このような施設を折と呼んでいます。それから、同じ土塁でも、主郭からI郭へと下る切岸をわざと削り残して豎土塁とする場合もあります。

次は、こんなふう（スライド7）にI郭の東下方にII郭が造られていた（スライド7）としましょう。ここに、この山城の主要な出入り口である柵形虎口があります。そこには多分二つの木戸口が設けられていて、さらに厳重に防備する構想だった

と思われます。松江城ですと馬溜に当たるのが
枡形虎口で、柵門と大手門にあたる二つの木戸
口ですね。

もう一つの入り口がⅢ郭の東側にあります。
これは、堀を等高線に平行に掘っていますから
横堀と呼ばれます。その真ん中をわざと掘り残
して、ここからしか出入りができないようにさ
れている。敵兵も、攻めるのはこの隙間からし
か侵入できないので攻め口が限定されるわけ
です。さらに横堀の内側に土塁を造っておくと、
攻め口を一カ所にすると同時に防御もしやすく
する、そういう縄張りとなされているという図
です。Ⅱ郭の北側下方の斜面から水源が見つ
かったとすると、それは大事な場所ですので、
井戸郭などと呼んで大切に守ろうとします。そ
の連絡路を守るためにⅢ郭からの登土塁が造ら
れています。

この山城は、西側から東方に尾根筋が下って
いくその先端に向かって造られています。従っ
て、主郭の西側に堀切を掘って尾根筋伝いに攻
め込もうとする敵兵を遮断（スライド8）して
います。ただ、その中央部にはわざと掘り残し
た土橋があって、ここからしか攻め込めないよ
うな縄張りになっています。その敵兵に対し
て、檜台だとか、主郭西端の土塁から弓矢や鉄
砲を射かけて防ぐわけです。

主郭の南側の腰郭下方の緩斜面に対しては、
さらに連続した堅堀を掘って防御するという縄
張りになっております。この連続堅堀では横の
移動ができませんから、一本の堅堀の間からし
か攻め上れない。従って、緩やかな斜面を塞い
で防御するための非常に有効な縄張りというこ
とになります。このようなぐあいに、色々な施
設を造りそれを組み合わせることによって防備
を嚴重にしたり、打って出て効果的に反撃をす
るような、そういう縄張りと言語が各地に残さ
れた山城で認められるのであります。

2. 大内・尼子・毛利の角逐と山城

久利氏の所領支配と城山城・市城

それでは、大内氏、尼子氏、毛利氏といった
戦国大名たちが石見銀山の争奪戦に突入する、
それ以前の石見東部の山城の状況を見ていき
たいと思います。ここでは、大田市久利町の二つ
の山城と、大田市久手町刺鹿の岩山城を例にし
てご説明することとします。

久利郷は非常に古い歴史のあるところ
です。つまり、平安時代の末期、11世紀の中頃
に、清原頼行という人物が久利郷の郷司に任命
されています。それ以来、鎌倉幕府の御家人と
なり、それから南北朝のあの争乱の時代、そし
て室町時代にも久利氏は久利郷を所領として支
配を続けます。邇摩郡は周防の大内氏の分郡支
配が行われた地域ですので、比較的早くから久
利氏は大内氏に仕えます。その大内氏が倒され
ますと、吉川氏に仕えます。そして、関ヶ原の
戦いで降吉川氏が岩国に移りますと、岩国藩士
として江戸時代を岩国で過ごし、そして現在ま
で続いているという、非常に長い歴史を持った
武士の家系です。そういう在地領主の造った山
城をまず見ていただきたいと思います。

久利郷の位置は北方の大田市街から大森へ
と向かう、そのほぼ中間に当たります。久利郷
と仁摩郷、天河内郷、それと佐摩郷、これが
久利氏の最大領土であります。この佐摩こそ
が、いわゆる大森です。大森銀山から算出さ
れる銀のことを佐摩銀とかソーマ銀というの
は、この佐摩に由来しております。

ところが、鎌倉時代の終わりぐら
いになりますと、久利氏も分割相続を繰り返
した結果、その四つの所領にそれぞれ独立性の
強い久利氏一族が分立するような状態になり
ます。特に福田村では、佐摩の久利氏と久利
惣領家が相続をめぐって六波羅探題まで出か
けて裁判をするというような状態になります。
久利氏惣領家の中でも、さらに鬼村とか角折
とか赤波とか市原には、それぞれまた分家が
かなり独立性を強くし

てくるというような、そういう状況（スライド9）が見られます。

久利氏の嫡流、本家筋に当たるのが、居館を構えていたのは、銀山川の左岸の段丘の上でした。その裏手の山上に城山城という山城を築いていました。これをさらにもっと細かく見ていきましょう。この図（スライド10）は、久利氏の居館の周辺に残っている小字地名を復元したものです。このうちの「坪ノ内」あるいは「惣領」というあたりが、久利氏の土居つまり居館のあったところだと思います。

先ほど申しました背後の城山城というのは、大体この矢印のあたりになります。「城ノ曾根」などの山城に関係する小字地名も残りますが、小字地名の中で注目したいのは、「楫屋」あるいは「楫屋前」・「楫野屋」です。鍛冶屋さんですね。武器や農具を作ったり修理したりする鍛冶職人を、居館の周辺に住まわせていたことがうかがえます。

それから、「矢剥」という小字については、弓矢の矢を作ることを矢をはぐと申しますから、そうした技術を持つ工人が住んでいたと考えて良いでしょう。「櫛屋」・「紺屋」・「亀屋」・「坂屋」・「漆垣内」・「茶垣内」という小字からは、そういう職人や工人の住まい、あるいはその工房の存在がしのばれるところです。紺屋は紺屋さんですね、染物屋さんです。亀屋は、亀の字ではありますが、土器の甕ではないかと思えます。坂屋は酒屋かもしれない。久利惣領家は、そうした職人や工房を居館の内部や周囲に配置していたと考えられるところです。

そして、その背後に久利氏は山城を築いています。このように、室町時代になりますと、居館と山城のセットが各地に見られるようになってきます。益田氏のように所領規模の大きな国人は七尾城のような大きな山城を築きますし、居館である三宅御土居は見事な土塁を備えていました。平時に住まいとする居館は、防御という側面からはどうしても脆弱ですから、いざという戦時に立て籠もる山城を、手近な里山に築

いておいたようです。このように居館と詰めめの城のセットを根小屋式山城と呼んでおります。

小領主である久利氏の場合は、ごらんのように非常に簡単な山城を築いていました。細い尾根筋に、たいして土を動かしたとは見えないちょっとした削平地（スライド11）を造っています。主郭の下のあたりはやや手の込んだ縄張りが見えますが、後世の耕作による改変ではないかと思っています。畑とされた時に、かなり加工されている嫌いがあります。

ところが、城山城と同じような標高の市城（スライド12）になりますと、縄張りも普請の程度も違ってきます。市城は、東側を流れる銀山川をさかのぼっていきますと佐摩に至ります。西側流れ下る赤波川の谷をさかのぼっても、大森の城上神社のところに行きつきます。つまり、銀山川と支流の赤波川の合流点に向かって突き出した、その突端の位置に市城が築かれたのです。

天文九年（1540）には、久利淡路守と子息長房らが内方として久利城で戦ったことがわかりますし、天文十二年（1543）には尼子勢が久利郷に侵攻してきて戦闘が行われました。恐らく、そのいずれかの時点、私は天文九年の時点だろうと思いますが、城山城のような、あの程度の山城ではとても支えきれないということで、急遽市城を造ったのであろうと思っています。

市城は、ぐるりと馬蹄形に連なる尾根筋のピークピークに郭群が造られ、それを城道でつなぐ縄張りになっています。城域の北端は居館とされていますが、とても丁寧な普請で、尾根筋上の郭群のそれとは異なり、後世の築造ではないかと考えています。馬蹄形の真ん中の谷合いに、久利氏の一族だとかその家臣達、あるいは救援の内方の兵だとかが駐屯したのではないのでしょうか。この辺りは、駐屯空間と我々が呼んでいる場所であります。

尼子氏の石東進出と岩山城

銀山争奪戦以前の山城の具体例として、岩山城（スライド13）を見てみることにします。この山城は、尼子氏の家臣の多胡辰敬という武将が、大田市久手町に派遣されて拠りどころとした城です。なお、久手と羽根とは明代の中国にまで知られた港の所在地でした。

岩山城は、非常に固い凝灰岩の山をそのまま使っておりまして、土を動かすという普請の作業をほとんどやってないんですね。もう自然地形そのものが、例えば自然の岩の大きな割れ目が堀切になっています。複雑なでこぼこがあるように見えますが、露頭した凝灰岩の岩山の裂け目、割れ目です。それが一種の迷路のようで、横堀、堀切の役割を果たしています。主郭には檜台の柱が立てられたような穴がありますが、規則性は感じられません。岩山城は、ほとんど自然地形のまま、それをそのまま山城として利用するというタイプの山城であります。つまり、今後ご紹介する山吹城を初めとした、非常に丁寧な縄張りや普請が施される以前の山城というのは、こういうものだったという理解でよろしいんじゃないかと思っております。

温湯城の攻防戦と陣城（向城）

次は第二の課題、毛利氏の城攻めの実態を、陣城の配置と縄張りから見てゆくこととします。戦いに必要なために急遽つくられた城のことを陣城と申します。特に、城攻めのための足がかりとして築城された陣城は、向城という呼び方をします。刺鹿の岩山城も陣城と見てよろしいかと思えますけども、毛利氏が築いた向城となると随分趣が違います。

温湯城攻防戦の場合の向城を見ていきます。温湯城と小笠原氏については、先ほど分析がありました。小笠原長雄は、福屋氏に対抗して弘治二年（1556）に籠城しますが、その後、毛利氏に対抗して尼子方としてこの温湯城（スライド14）に立てこもります。温湯城は、主郭の東側に大きな堀切とその外側に小さな堀切が三本

掘られ、西側の緩斜面は連続縦堀で守るというふうに、規模は雄大ですし、縄張りも緊密で、普請の状態といい、さすが小笠原氏の本城にふさわしい非常に丁寧に造られた山城です。

これを毛利元就はどういうふうに攻めたか、向城の配置からまず検討してみましょう。この（スライド15）の真ん中にあるのが温湯城です。その周りには北側の尾根筋、それから南側の尾根筋にも、要するに温湯城を取りまく四方の尾根筋ごとに温湯城に向かって曲輪が段々に造られていることが読み取れます。毛利の場合の城攻めは非常に用意周到でありまして、周辺の尾根筋をずっと押さえて、攻略しようとする敵城に対して向城のラインを伸ばしていくという戦法をとるわけですね。

向城の一つの会下山城（スライド16）ではこのようになっています。一番高いところに中心となる郭群が置かれています。温湯城との標高差は110mほどです。ここから尾根筋伝いに小規模な曲輪を段々に重ねてずっと下ってゆきます。その先端には二本の堀切があります。この地点からさらに50mほど行きますと、もう温湯城の東端になります。だから、何て言いましょるか、シャクトリムシがずっとこうゆっくりゆっくり近づいていくような、そういう向城の造り方をしております。

昨年の8月に、広瀬町の中央交流センターで「陣城と城攻め」という報告をしました。そこでは、富田城を例にして、毛利方の向城のご説明をさせていただきました。富田城の場合も、京羅木山城砦群を本営とし最前線の戦闘指揮所を勝山城において、飯梨川の対岸から始まって、新宮谷側と塩谷側のぐるりに毛利方の向城群が造られております。

その中でも、日向丸と呼ばれる郭群があり、富田城の本丸との標高差は40mぐらいしかなく、距離も700mほどです。700m離れた背後から40mの高低差で跳められると、もう城中での動きは丸見えだっただろうと思いますね。兵力の配置や移動はもとより、籠城側の日常の暮ら

しななかも丸見えだったんだらうと思います。日向丸を毛利氏に押さえられたことが、尼子義久にとって、富田城を明け渡して降伏する直接的なきっかけになったらうと思います。毛利の場合の温湯城攻めはその約三年前でありますけども、全く同じような攻略法をとっているということが言えます。

3. 石見銀山周辺の山城

山吹城の普請と改修

それでは石見銀山周辺の山城を見ておきます。まず、銀山防衛のための山吹城から検討します。山吹城の縄張り（スライド3）を見ますと、主郭の北端には櫓台があります。40[㍎]に30[㍎]に広がる主郭ですし、しかも、礎石らしい石もあるので、毛利氏の支配下に入ってからあるいは江戸時代になってからも、改修の手が加えられていることが読み取れます。

主郭の北側下方の曲輪の虎口には石垣が残されています。また、主郭の南端には非常に深い空堀が掘られていることがわかります。空堀の西端はL字形にクランクしていますから、入り込むとそこから追い落とされるような一種のトラップ（わな）になっています。吉川氏が岩国に移って築いた岩国城にもこのような大きな空堀があります。それから、南側の緩斜面には見事な連続空堀が並んでいます。

ところがさらに尾根筋を丁寧にたどってみますと、曲輪としてきちんと削って造られてはいないけれども、北側の尾根筋にも南側にもずっと小さな郭群が続いていることがわかります。先ほど紹介した会下山城の普請と大差のない粗放な造りの郭群です。

ここから推定しますと、まず第1期の山吹城、大内氏の時代の山吹城は、これに近い造りの山城であったと思います。そうした曖昧で粗放な普請の山城が、毛利氏の手落ちてから、大改修されたと思います。さっきの、吉川氏の岩国城に残るような空堀も、毛利支配下のもの

かもしれないし、虎口の石垣は大森から見える方向に築かれています。それから、礎石を置いて立てられた建物あるいは櫓台、こうしたのは、江戸時代になってから付け加えたものであろうと思います。そもそも縄張り調査では、その役目を終えて放棄された最終状態の山城が、長い年月の風雪で自然に帰る寸前を見ているわけですので、縄張りも普請も何回か大きく変えられているというふうに考えておく必要があります。

矢滝城・石見城・矢筈城の縄張りと普請

続いて、銀山周辺の主だった山城遺構（スライド17）をご説明します。矢滝城と矢筈城、それから石見城、ちょっと簡略な造りですが復城と温泉城、それから温泉津の三つの山城について、その縄張りや普請の特徴を見ていただきたいと思います。

この報告の最初に、矢滝城の主郭から仙ノ山と要害山山吹城を見ていただきました。標高636[㍎]の屹立した山頂に築かれた矢滝城はこういう縄張り（スライド18）になっています。山吹城の方向の斜面には、ハの字形に開いた二本の空堀が認められます。主郭北側斜面の下には、降路坂という大森から温泉津に向かって下る銀の輸送ルートが走っています。したがって、矢滝城はこれを意識して、北方の郭群の普請が丁寧です。それに対して、南側の郭群では曲輪と曲輪との段差、その間の切岸は低く、削り落としも曖昧です。

矢滝城には、大内義隆が銀山防衛のために築かせたという伝承がありますが、最初の普請は南側の郭群程度だったかもしれません。それが降路坂を意識して、北郭群だけをかかなり丁寧に造り直しています。北と南の郭群をつなぐ南北に広がる曲輪は、城兵の駐屯空間だったと考えられます。

ただ矢滝城を見る時間問題なのは、北郭群の中央に朝鮮戦争の時にアメリカ軍がレーダー基地を置いた、それをNHKがその後利用し、今も

建屋が残っていることです。つまり戦後に改変されたことが明らかです。繰り返し申しますが、山城の縄張り調査では、その最終的な改変がどういう意図でいつごろ行われたかということ踏まえて評価しないと、とんでもない間違いをすることがあります。

仁摩町大国の石見城は、大森から仁摩へ向かって下っていく通路の途中に、仁摩平野の一番奥と言ったほうがいいでしょうか、そういう地点に残されています。先ほどの刺鹿の岩山城と同じで、凝灰岩の岩山の上（スライド19）に非常に丁寧な普請で造られています。規模はさほどでもないのですが、大変な労力をかけただろうと思います。例えば大きな堀切を掘っていますし、土塁のライン（スライド20）がつながって眼下の街道をにらんでいます。主郭や第Ⅰ郭、Ⅱ郭、Ⅲ郭は、いずれも固い凝灰岩の山上をかなりの人手をかけて平たんに造成しています。

土塁のラインから見ても、石見城は図面の下方の谷側に向いた縄張りの山城です。つまり、上がっていくと大森につながり、下っていくと仁摩の港に行くことになる谷筋の街道です。戦国も終わりごろ、細川幽斎という大名が九州に行く時には、仁摩の港に上陸して、この石見城の下の街道を通過して銀山へ行き、大森の町に滞在しています。そして降路坂を下って温泉津へ行って、温泉津から再び乗船して九州に向かうとルートをとったことが「九州道の記」に記されています。石見城の縄張りも普請も、明らかに南側の谷筋を意識した造りになっています。

次に検討したいのが、仁摩町大国と温泉津町西田の境界の矢筈城（スライド21）です。南側下方が、大森から温泉津に向かう銀山道の降路坂です。従いまして、降路坂のさらに下の方向に矢瀧城が築かれているわけですね。実は、図の北側には西田を経由して温泉津に至る街道が通っているのですが、普請の重点は南方を向いています。

つまり、南方1kmの矢瀧城と対になって降路

坂を守る、そういう意図で地取りがされています。掘切や堅堀の普請が、いずれも図面でいくと下の方を向いています。北方の50mぐらい下方のテラスに造られている郭群は、この城に駐屯する兵達の駐屯空間になっていただろうと考えられます。矢筈城もかなり固い地山を削っていますが、石見城ほどの丁寧さはないです。

これは温泉津町湯里の温泉城（スライド22）です。温泉氏の城です。恐らく南側の平地に温泉氏の館があって、その背後にこういう山城を造ったのでしょう。これも根小屋式の山城です。温泉氏は後に温泉津の櫛島城に本拠を移し、さらに毛利氏に追われて出雲へ退去してしまいます。この川筋を下っていくと湯里の港に行きます。矢筈城で説明したように、西田を通過して銀山に行く重要ルートですので、改修されて利用されたのでしょう。ただ、縄張りと言語の程度から見ると、この西田経由の街道は、仁摩から大国経由銀山ルートや温泉津から降路坂経由銀山ルートよりも重要度は低かったのではないかと思います。

次に、もっと海岸に築かれた山城を見ておきます。仁摩町宅野の港を警備するのが復城です。南側の鴨城と南北呼応して宅野港を守るための城です。周囲は断崖になっていますが、頂上をわずかにならして曲輪とただけでほとんど手を加えていない。東側背後の丘陵に恐らく駐屯する兵のために小屋がけがされていて、常時この港を監視する、あるいは沖合を監視していたのでしょう。こういうタイプは海城と呼んでいます。温泉津湾口の海城とはずいぶんと違います。

4. 城普請 温泉津湾口の場合

鵜丸城・櫛島城・笹島城の縄張りと言語

さて、今日の課題の三番目は、こうした山城は一体どういうふうになされたのかという疑問です。それを温泉津湾口の三城で検討してみることになります。調査をすればするほど新しい山

城遺構が発見できますが、実際にそれがどういうふうに造られたのか、城普請の実際はほとんど不明です。信頼できる史料がほとんどないためであります。

そういう現状のなかで、毛利氏の場合、二つの方法があったとの指摘がなされています。一つは公事普請と呼ばれる方法です。普請役という負担を毛利氏が村々に割り当てて行わせる場合と、自力普請の二方法です。自分の城なんだから自分でやりなさいというわけで、人手や資材を国人や地侍とよばれた配下の武士達に負担させて、いわば自前で城普請をさせる場合とがありました。

さて、二月二十日付けの「鶴之丸普請賦之事」(スライド23)という史料が残っています。年紀は入れてないのですが、元亀二年(1571)に出された命令であるということが、広島大学の本多博之氏の研究によってわかっています。要するに、多くて八十杖から少ないところは七杖を村ごとに割り当てて、鶴之丸城を完成させなさいという命令書がこれです。毛利氏の奉行人から温泉津奉行に対して二月二十日に命令が出されて、三月二十日までに造れというのです。

この普請役で造られた城がこれ(スライド24)であります。鶴丸城と呼んで、温泉津湾の湾口にあります。灯台が造られておりまして、ちょっといじられているわけですが、縄張り図(スライド25)を書いてみますと、こういう縄張りとなります。四角く土塁で囲んで造った枡形虎口と、掘り込んで造られた大きな枡形虎口が認められますが、大小二つの枡形虎口はいずれも北側に開口しています。つまり沖泊の方向です。沖泊は温泉津湾の枝湾の一つで、江戸時代には北前船で賑わった港でしたので、鼻ぐり岩という、船の舳い綱を繋いだ穴が今もたくさん残されています。毛利方の船も沖泊湾に停泊したのでしょう。

鶴丸城では、主要な曲輪の周囲には二段場所によっては三段の、地形に合わせた腰郭をめぐ

らせていることがわかります。これは鉄砲や弓矢を構えて城を守ろうとするための施設です。同じく海城ですが、先ほど紹介した復城とは比較にならない丁寧な普請が施されていることが読み取れます。

沖泊湾を挟んで向かいの島が先ほどのお話にありました櫛島城です。上空からの写真(スライド26)がこれです。これが櫛島城の縄張り図(スライド27)です。おもしろいことに、この城は沖泊湾の側はほとんど手を加えていません。つまり、温泉津の湾口と日本海側に面するところだけに丁寧な普請を施しております。もともとは温泉城の温泉氏の城だったと言われておりますけども、恐らくは鶴丸城と一緒に大改修をしたと考えられます。

毛利氏にとって、温泉津は、銀山に物資を入れたり、あるいは積み出したりする銀山経営のうで大切な町でしたから温泉津奉行を置いて直轄支配をしていました。同時に、温泉津は毛利水軍の軍港ともなりました。元亀二年の二月という時点は、尼子勝久や山中鹿介が尼子家の再興を目指して故国出雲に侵入した、いわゆる尼子家復興戦の末期にあたります。前年二月の布部合戦において救援にやってきた毛利勢に破れて富田城に入城を許してから、尼子方は劣勢になるのですが、その後も宍道湖や中海あるいは日本海沿岸で船戦を展開して抗戦を続けました。毛利元就は、警固衆と呼んだ毛利水軍を派遣してこれに対抗させました。その警固衆が中継拠点としたのが温泉津港だったわけです。

ですので、櫛島城に対しても非常に丁寧な普請をしておりまして、今でも(スライド28)こんなふうに曲輪の切岸(段差)がよくわかりますね。周囲は切り立った海食崖で、岩棚が続いていますが、風が強く海が荒れるととても島に渡るなどできません。

櫛島城の向かい500mぐらい西側には笹島城(スライド29)があります。笹島城の縄張り図(スライド30)がこれです。周囲はこういう海食崖です。自然の切岸と言えれば切岸だけれど

も、頂部もほとんど手が加えられてないですね。突き出した南側の丘陵は、駐屯地として利用されたのでありましょうけれど、ちゃんと図面に描けるほどの普請はなされていません。先ほど見ていただきました復城と非常によく似ています。対岸の鵜丸・櫛島の両城の縄張りや普請と対照的な造りとなっています。

「鵜丸普請賦之事」から

もう一度、「鵜丸普請賦之事」という史料を検討します。たとえば温泉三方に対して三十杖という普請役が掛けられています。この一杖というのは一間の普請役を意味しています。つまり毛利氏にあっては、約2_尺弱の切岸とそれに面する曲輪を造るための普請役なのです。ですから、60_尺近い切岸と曲輪を造るための普請役を温泉三方で負担しなさいということになります。この時点で、合計三八六杖の普請役が賦課されているわけです。

普請役をかけられた郷村を地図に落とす（スライド31）とこのように分布します。邇摩郡の沿岸部から、那賀郡の江の川から西側の村々に割り当てられていることがわかります。邇摩郡全体かということ、そうでもないですね。例えば、佐摩つまり大森はかけられてない。久利もかけられてない。ただ、久利氏については毛利輝元から直々の別命があって、やっぱり負担はさせられたようです。那賀郡も全域ではありません。

従って、どういう範囲なんだろうかということですが、私が考えているところでは、結局、温泉津奉行の支配下の郷村に賦課されたのだらうと思っています。逆に言えば、あの範囲が温泉津奉行の管轄下ではなかったかと考えております。

次に、三十杖とか七杖とかいう違いのある数字の根拠は何かということです。これは、その郷村の年貢高ではないかと考えられます。ただ、そう考えても一律ではなくて、温泉三方だと一杖つまり一間当たり六貫文ですが、波積だ

と、九貫文で一間を負担しなさいということになります。つまり、ばらつきがあります。

さらに、賦課された普請役が想定した普請の範囲あるいは距離は、実際に普請工事が行われたと考えられる距離と対応するかというと、どうも対応しません。鵜丸城の切岸の普請距離を、地図上から測っていくと、550_尺程度になります。合計三八六杖の普請は737_尺程度ですから、実距離よりもオーバーするんです。だから、鵜丸城と櫛島城とを合わせて、つまり鵜丸城と櫛島城を同時に普請する予定で温泉津奉行の配下の郷村に賦課したものかもしれないと考えています。

また、普請の現状を見る限り、どうもこの時の普請の範囲に対岸の笹島城は入っていないようです。さらに、曲輪を造成し切岸を削り落とす土木工事がそもそも普請なのですが、恐らくは、塀とか格子とか、柵ですね、そうした本来ですと作事に当たる部分も含めたのではないかと考えています。このように実際の普請の現場と、それを命じた史料とがぴしっと照合するという例はありませんので大変貴重な事例ですが、今のところでは以上のように推定しているところでもあります。

むすびに代えて

石見銀山遺跡から見えるもの

今日は石見銀山遺跡のうちの山城についてのお話をさせていただきましたが、私、以下のように考えております。石見銀山遺跡には多くの方々が関心を持って訪れていただいておりますが、このようになる前提として、大田市や島根県教育委員によって、色々な角度や方法によって非常に丁寧な調査が続けられておりました。現在もそれは継続されています。つまり、一朝一夕に成果が上がったのではなく、長い調査と研究が下敷きにありその成果が蓄積されて、保存と活用の方法が導かれているのです。そういう地道な調査と研究がまずは大事だということ

を、ぜひご理解いただきたいのです。

もう一つ申し上げますと、しかしそれは決して、県教育委員会や大田市の人達にしかできないことではなく、私達にもできることがあると申し上げたいのです。例えば、地名調査とか縄張り調査というような方法は、誰でも、いつでも、どこからでもできる調査方法です。それも地元の地の利とか土地カンが最も効果を発揮する方法です。私のこの拙いお話がきっかけになって、ぜひ地元の皆さんに地の利や土地カンを生かした調査や研究を進めただけたらということをお願い申し上げたいと思います。どうも長時間のご静聴ありがとうございました。(拍手)

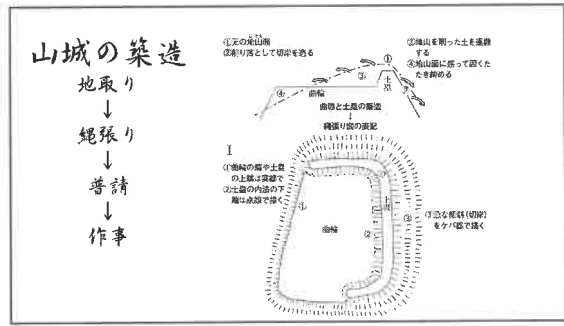


会場の様子

スライド1



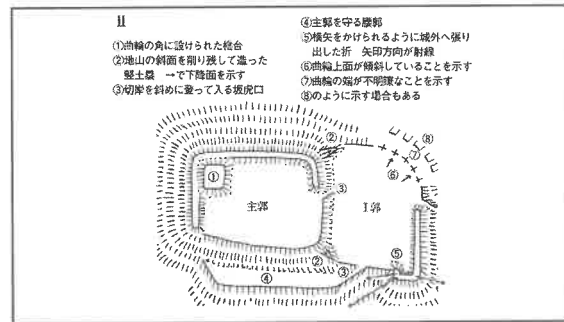
スライド5



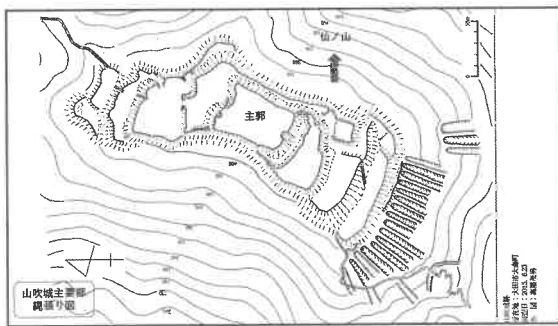
スライド2



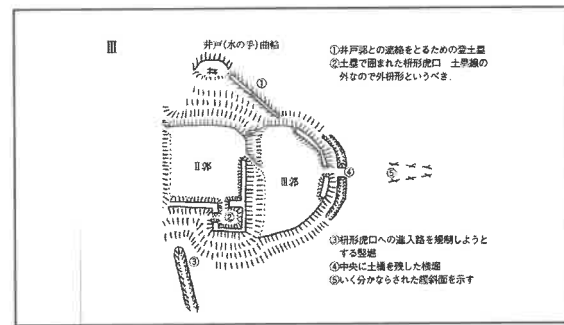
スライド6



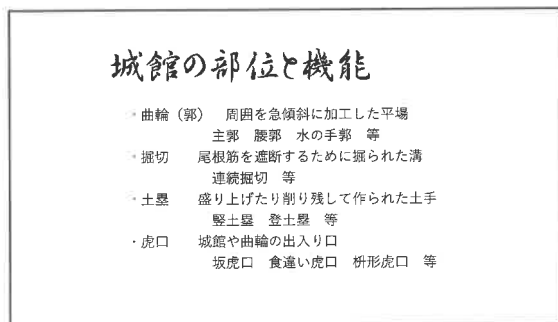
スライド3



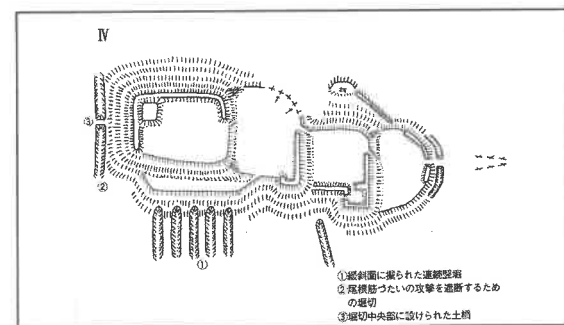
スライド7



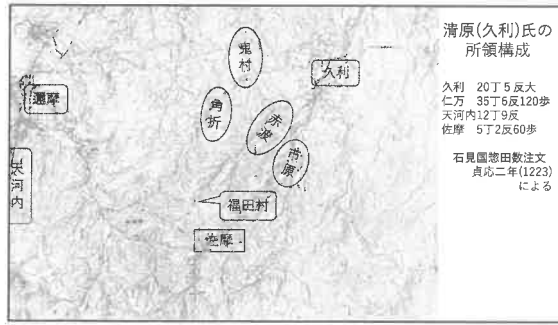
スライド4



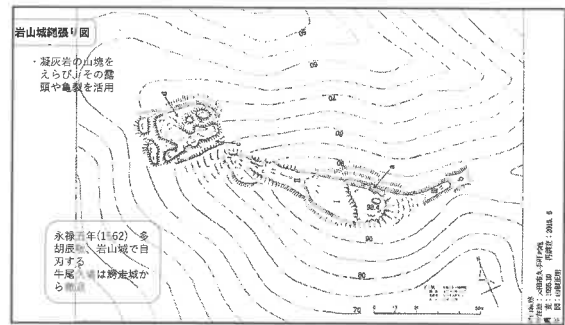
スライド8



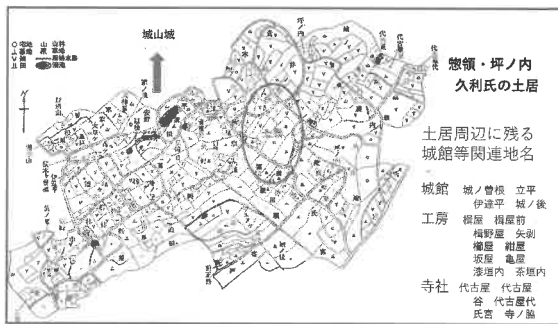
スライド9



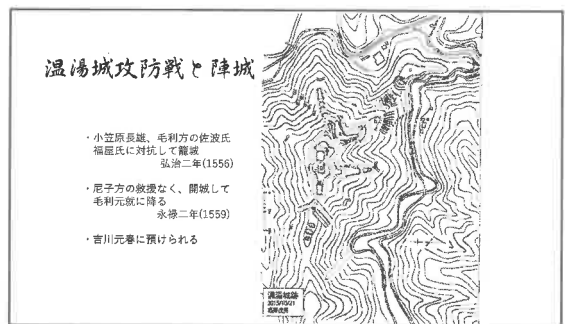
スライド13



スライド10



スライド14



スライド11



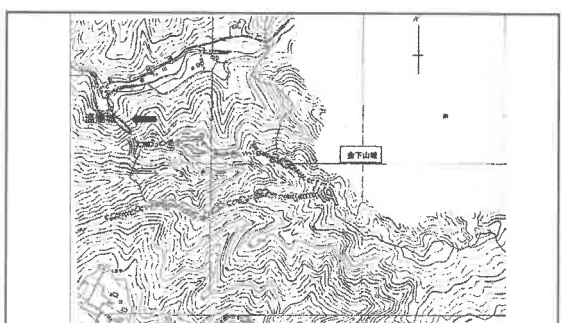
スライド15



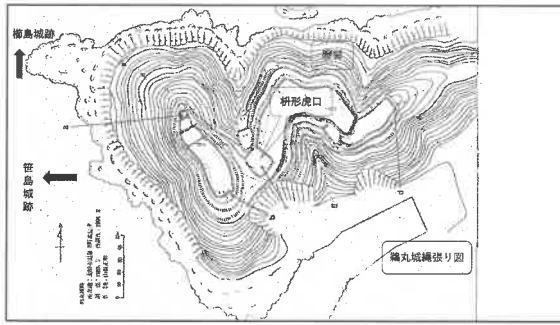
スライド12



スライド16



スライド25



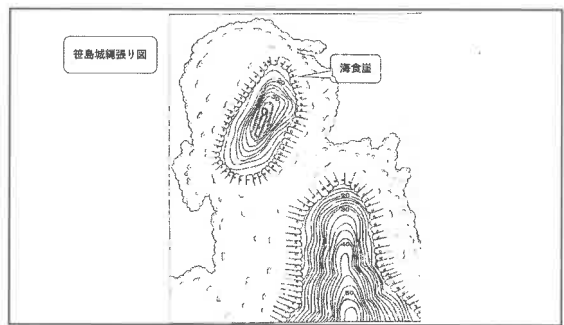
スライド29



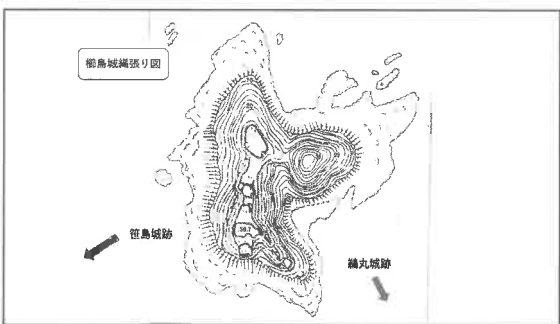
スライド26



スライド30



スライド27



スライド31



スライド28



平成30年度 第2回石見銀山遺跡関連講座

奪い合う銀山！ 石見銀山をめぐる 争奪戦の歴史

石見銀山が発見されてから、大内氏や尼子氏等によって支配された石見銀山。しかし、一五五六年の毛利元就による石見国への進出を契機に、毛利氏と尼子氏との間で激しい争奪戦が始まりました。なぜ奪い合うのか？銀山支配をめぐる争奪戦の実像について、石見銀山の城跡を中心にして紹介します。



入場
無料
要申込

日時 平成31年
2月9日(土) 13:30~16:00 (開場/13:00)

会場 安来市 和鋼博物館
島根県安来市安来町1058

定員 80名

事前にお申し込みが必要です

以下の電話番号にお名前・参加人数をお知らせください。
島根県教育庁文化財課
世界遺産室講座担当
TEL 0852-22-6388
(受付時間：平日8:30～17:15)

講演


「石見銀山争奪戦」と戦国大名
伊藤 大貴 (島根県世界遺産室研究員)

「石見銀山を取りまく山城
一築城と改修の痕跡をさぐる」
山根 正明 氏 (元松江市教育委員会史料編纂室専門官)

尼子経久像と月山富田城

【主催】島根県教育庁文化財課 (世界遺産室) 【共催】安来市教育委員会

問い合わせ先 島根県教育庁文化財課 世界遺産室 講座担当 TEL0852-22-6388



平成30年度 石見銀山遺跡
関連講座 3

奪い合う石見銀山

日 時 平成30年8月25日（土）13：30～15：15
平成30年9月9日（日）13：30～15：15

場 所 中国新聞ホール（広島県広島市中区土橋町）

石見銀山の開発とその時代

石見銀山資料館 館長 仲野 義文氏

本日は、石見銀山が開発される背景や、その開発によって日本の社会や外交にどのような変化があったのか、さらに足元の、石見銀山のある現地で、どのような政治的な動きがあったのかをご紹介したいと思います。

次回、島根大学の長谷川先生が、毛利氏と尼子氏の戦いの具体的なお話、毛利氏が石見銀山をどのように支配し、この銀がどのように利用されたのかということ、具体的にお話していただけるのではないかと思います。したがって、今日は、そこに至る、毛利氏が銀山を奪うまでのところの話で、長谷川先生にバトンタッチをしていきたいと思っています。

最初にご覧ください。(スライド1) 世界遺産に登録されたのが2007年ですが、そのとき、福岡県大牟田市の個人の方から、うちにこういうのがある、ということでお電話をいただきました。これは、かつて石見銀山に神宮寺というお寺があり、そこのお寺に関係した三谷家が毛利元就から拝領したものです。こういうものも、石見銀山に残っています。現地に残る毛利氏ゆかりの文化財も紹介しながらお話をしてみたいと思います。

銀山あるいは鉱山を理解する前に、(スライド2) をみていただきましょう。これは日本列島で、これがプレートです。地球は、十数枚の硬い岩盤、プレートによって覆われていますが、日本列島は、そのうちの4つのプレートに関わっています。ユーラシアプレート、北米プレート、太平洋プレート、フィリピン海プレートという4つに日本列島は乗っかっている。かなり不安定な地質構造になっています。プレートとプレートの境界のところ、これが動くことによって地震が起こってくるわけです。日本列島は地震大国といわれますが、この4つのプレートが複雑に絡み合っていることで地震が多い。そしてプレートとプレートが挟まったところの先にマグマだまりができる。このマグマだ

まりが、金や銀という鉱物をつくりだしています。

少し具体的にお話をいたしますと、これ(スライド3)がマグマだまりです。高温のマグマがあるのですが、地下には地下水があり、マグマによって、地下水が高温の熱水になります。その熱水のなかに、地中にある金や銀が溶けていくわけです。実は、皆さんのお宅の庭とか、学校のグラウンドもそうなのですが、銀で言えば7億分の1ぐらいはあるのです。しかし、グラウンドの土を全部集めても、肉眼で見えるほどのものにはなりません。ただし、この火山、マグマの活動によって、地下水が熱せられることによって、このなかに地中の金や銀が溶け込んで、鉱液に濃集していくわけです。こういったものが岩の割れ目みたいなところに入って、冷えて固まり鉱脈ができます。だから、火山があることによって、日本列島にはたくさんの金や銀の鉱床があるということです。

これは火山の位置です。(スライド4) 東北のほうに多い。伊豆半島、鹿児島の方も多いです。次のもの(スライド5)は金銀鉱床の分布図です。火山があった山梨、伊豆半島、そして鹿児島県のほうにたくさんあります。火山の分布と、金銀鉱床の分布は、だいたい一致している。つまり、火山のあるところに概ね金銀があるということです。

石見銀山がある一帯がこれです。航空写真(スライド6)ですが、この辺を見ていただいたら、お椀をひっくり返したような山の姿が見えます。今から150万年ぐらい前にこの一帯で火山活動が行われました。大江高山火山帯といって、大規模な火山活動が行われたことによってできた地形です。たまたまこの仙ノ山(スライド7)というところに、先ほどのようなかたちで銀が集まっていったということです。不思議なことに、金や銀の鉱床がどういうメカニズムできるかというのはわかるのです

が、なぜこの山にできたかというのは、なかなかわからないというのが実態です。この仙ノ山という山に銀の鉱床が広がっておりまして、そこを狙って、16世紀以降、石見銀山で銀の開発が行われます。

16世紀以降、開発が行われます。実際、山のなかに入っていくと、こういう跡があります。(スライド8) これは露頭堀というのですが、鉱脈の先端部が地表面に露出している状態を露頭といい、この採掘跡を露頭堀といいます。最初はこういった山肌に露出した銀の鉱石、あるいは自然銀というのを見つけて掘っていているわけです。そのほか、こういう掘り方もあります。(スライド9) これは、ひ押し掘という、「ひ」というのは鉱脈のことを指していきまして、鉱脈を直接掘り進んでいくという掘り方です。さらに水平の鉱道です。横相(よこあい)といい鉱脈を目指して、山の麓から掘っていくような掘り方。この方法の代表的なものが大久保間歩です。これが銀鉱石です。(スライド10)

日本列島は、東北のほうに金が多いですね、古代から金というのは加工もし易くいろいろなかたちで使われていて、世界遺産になっているところもあります。奥州平泉の中尊寺の金色堂は、まさに黄金文化の象徴ですが、あの一帯で古くから金の採取が行われているわけです。平安時代には日宋貿易で、金が重要な輸出品なので、古代からけっこう利用されています。古代の銀山ってどこかわかりますか。意外に知られていないと思うのですが、古代、銀山が開発されたところは、限られており、それが対馬です。長崎県の対馬が、古代の唯一の銀生産地だといわれています。江戸時代にも開発されていますが、673年に『日本書紀』のなかで、初めて銀が朝廷に納められたという話が出てきます。いろいろな古い史料を見ても、日本で銀山を開発したというところはあまり出てきません。唯一出てくるのが、この対馬です。

史料1『対馬国貢銀記』のなかに、実際、具

体的にどういう方法で銀を採取したかが出ています。この『対馬国貢銀記』は、『日本科学古典全書』という本に収められているのですが、この三枝博音をご存じですか。この人は哲学者で、広島出身です。

『対馬国貢銀記』のなかに銀山の具体的な内容がでてきます。史料の最後、下の行から2行目、「高山の四面風を受くるの處に置く」とあり、採った鉱石を風当たりの良い山の斜面のところに置いて、薪、松の木を燃料に焼いて、それで銀を取ったという記述が出てきます。これが古代の銀の精錬法です。古代においては、この対馬しか銀の生産地というのは、日本列島にはないということです。

もう一つは、これは鉱山ではないですが、奈良県の飛鳥池遺跡です。この遺跡は古代の工房遺跡ですが、そのなかで、つぼみたいなのが、つぼといっても杯程度の小さなものが出ています。これを科学分析すると、なかからビスマス、鉛、銀というのが出てきましたので、どうもこういう粘土で作られた器を使って、銀の精錬をしていたのではないかといわれています。7世紀でも、対馬であったり、飛鳥池はどちらかという、加工の技術ですけれども、古代においても銀製錬の技術が日本にないわけではなかった。しかし、そんなに銀生産というのは行われていないということです。その対馬も13世紀以降、開発がストップしますので、おそらく古代末から中世の半ばぐらいまでは、日本ではほとんど銀が生産されていないという状況になっていたわけです。ところが、16世紀になると、突如として日本各地で金銀山の開発、特に銀山開発が、一気に進んでいくこととなります。

ではなぜ16世紀になって、銀山が突如として各地で開発されるようになったのか。教科書で見ると、戦国時代、戦国大名は軍資金が必要なので、例えば、金山とか、銀山の開発を積極的に進めたという話が出てきますが、それは間違いではありません。ところが、どうも石見銀山

は、そういう考え方よりも、別に大きな理由があるということです。国内の事情というよりも、むしろ世界の大きな動きのなかで石見銀山の開発が行われていくということです。一般に15世紀末から16世紀にかけては、大航海時代といわれる時代です。ヨーロッパのイベリア半島にあるスペイン、ポルトガルという国が大洋に進出する時代です。特にポルトガルはアジアに進出して、スペインは南米に進出していくということ。コロンブスが新大陸を発見するという時代です。

このスペインやポルトガルの対外活動によってどういうことが起こったかという、今までヨーロッパとアメリカとは、ほとんどつながりがなかったわけですが、スペインの進出によって、ヨーロッパと南米がつながっていく。さらにポルトガルのアジア進出によって、ヨーロッパとアジアがつながっていく。1580年代ぐらいになると、メキシコのアカプルコからフィリピンのマニラに向けて定期船が就航されるようになって、南米とアジアがつながっていく。そのことによって、かつてない規模で大陸と大陸との間で、人やものの動きが活発になってくるわけですが、特にものの動きは活発になってくる。そうすると、当然、取引にとって共通の価値を持っているようなものが必要となり、やがて銀が貿易通貨として一役注目されるわけですが、銀が注目されることによって、銀の需要が起こっていく。その結果、各地で鉱山の開発が進みましたが、当時、世界の二大銀の生産地というのは、ほかならぬ南米と日本でした。

南米は、メキシコのサカテカス鉱山、そしてグアナファト鉱山、世界遺産になっています。(スライド11)これが1540年代ぐらいに開発されています。また、ボリビアのポトシ鉱山も有名で、当時、世界最大の鉱山でした。1年間に200トンぐらいの銀を生産していたといわれています。大規模な鉱山です。世界で銀ブームが起こるのですが、その銀ブームのなかで開発されている鉱山です。日本では、石見鉱山が最初

に開発される。これが1526年です。先ほど言いましたように、南米の鉱山も1540年代、日本の鉱山も、石見鉱山が1526年ですから、だいたい同じ時期に、世界的な鉱山が開発されている。ということは、石見鉱山の開発というのは、国内で銀が必要となったというよりも、むしろ世界的な銀ブームというものが、その開発の契機になっているということです。

とはいってしまっても、直接的な動機付けというのは、ヨーロッパの銀需要という話ではなくて、日本の場合には、なんといっても東アジアです。お手元のレジュメの2をご覧ください。世界的な鉱山開発のところですが、日本の場合には、どちらかというと、東アジア、特に朝鮮や中国での銀需要というものが、鉱山開発の大きな動機付けになっているということです。朝鮮半島では、特に15世紀ぐらいから、中国の高級品に対する需要が、貴族、王朝のあいだで強まってきました。当然、それを買うためにはお金が必要であり、特に銀が重要になってくるのです。

皆さん、『宮廷女官チャングムの誓い』という韓流ドラマがあったのをご存じですか。丁度あの時代です。中宗とか。その前に燕山君という国王がいたわけですが、その時代に中国のぜいたく品に対する需要が強くなって、国内でも鉱山開発をするのです。ところが、朝鮮半島は中国に支配されているので、常に中国に対する貢納の義務を負っています。銀が出ているということになると、結局、中国から銀を納めろという話になるので、燕山君のあとの中宗とう皇帝の時代には、止む無く、鉱山開発をやめています。しかし、中国の高級品に対する志向は強いので、銀に対する需要も根強くあるわけです。

一方で中国は、14世紀ぐらいになると、銀経済の時代を迎えます。その背景には大きな理由があって、一つは、中国での貨幣政策の失敗が原因だろうといわれています。中国は明の時代ですが、明は元を倒して、誕生しますが、元の終

わりごろはインフレが起こっています。そこで、新たに明を建国した朱元璋は、基本的に税金は穀物で納めなさいという現物主義のシステムを採用しました。とは言いながら、一般の人たちが使う場合には、銭、銅銭を鑄造していくわけですが、中国は当時、銅山開発はあまり行われていませんから、銅資源が不足していて、国内の銭の需要を賄うほどの銭の生産というのはいけなかった。その結果、いわゆる私鑄銭という、偽金みたいなのがつくられたり、あるいは、国内で銭が不足するという問題が起きたりします。

そこで、中国では鈔と呼ばれる紙幣を発行するようになります。この紙幣は、最初は、兌換紙幣といって、これを持っていったら銀と交換できていたわけです。ところが、当時の明では、そんなに銀山の開発は行われていませんから、国家がこれを引き換えるだけの銀を保有していなかった。その結果、紙幣はたちまち紙切れのような状態になる。しかも、中国は当時、南京から北京に首都を移したり、鄭和の南海遠征という、永楽帝の時代には南海遠征をやったりだとか、いろんなことをやっています。土木工事をやったりしている。そのために多額の資金があるので、鈔を乱発していく。そうすると、これが紙切れ同然になってくるので、一般の人たちはいったい何を財産として蓄えていくかということ、やっぱり銀になっていくのです。これは今でもそうですね。不景気になると、金の値段が上がるというのがあるじゃないですか。それと同じように、この鈔を乱発していったために、鈔の信用が失墜してしまって、結果的に、特に中国の南のほうでは、銀に対する需要が高くなって、やがてそれに押されて、明政府も、租税の銀納化というのを進めていくわけです。租税の銀納化が進むに伴って、国内でも銀に対する需要が少しずつ増えていくわけです。

さらに、もう一つ重要な問題があって、よくいわれるのですが、北虜南倭という問題です。

南倭というのは、東シナ海で跳梁している倭寇、海賊です。こういう海賊が、明の海岸部を襲って、大きな問題になっているわけです。さらに、北虜は、北方の遊牧民族の問題です。この遊牧民族が、中国に、経済交流を求めて猛烈にアタックしてくる。そのために、辺境地域に兵隊を派遣したりする。さらに、万里の長城をつくっていく。この軍事的な脅威に伴って、やはり銀が重要になってくる。なぜかという、この一帯に兵隊を送っているのですが、この人たちの食糧、いわゆる軍事物資は、遠方から運ばれてきます。しかも、現物で運びなさいということなので。中国って面積が大きいでしょう。例えば、沖縄から北海道まで運ばないといけないのです。だから農民たちは、その負担がものすごく大きくて、やがて、その負担の軽減のために国家に銀を納めて、その銀を結局、この辺境地域に送って、その銀で現地調達させるという仕組みが取られてくるようになるわけです。

いかに軍事費が大きいかが、このグラフ（スライド12）を見ていただいたらわかります。国家が持っている銀の収入です。この辺から日本の銀が入ってきますが、国家が持っている銀の保有量よりも、軍事費のほうが多い。それだけ中国での軍事費は大きくて、その軍事費を賄うために銀が重要になっていくということです。つまり、14世紀以降、中国では、貨幣政策の失敗だとか、北方に対する遊牧民族対策という問題から、銀というものが次第に国家で必要となってくるという状況が起こってくるわけです。それを踏まえて、これから銀山のお話に入っていきます。

石見銀山を研究するときに、必ず見ていく史料があります。『銀山旧記』です。『石見銀山旧記』と一口に言っても、『石見銀山起』、『石陽銀山記』そして、『おべに孫右衛門ゑんき』というのがあったり、江戸時代はたくさんつくられています。例えば、『国書総目録』を見ても、100近いぐらい、『銀山旧記』というのはあった

と思います。それだけ『銀山旧記』というのは、江戸時代、広く読まれたし、多種多様な『銀山旧記』が書かれています。

石見銀山の調査研究は、20年近く行われていますが、その過程で『銀山旧記』の内容を見直す動きもでてきます。例えば、従来は、1526年、大永6年という年が、石見銀山の発見の年だといわれていたのですが、どうもそれは違うのではないかと。特にこういう古い時代に書かれた『銀山旧記』あたりでは、大永7年というのが、正しいのではないかと。多くの研究者も指摘しており、この年号がどうも有力であるのではないかと。それを受けて最近では、銀山の発見年を大永7年、1527年にリーフレットでも書き換えるようになってきました。

皆さんのお手元に『銀山旧記』を翻刻したものを載せています。内容は、大永中、1526年のころに、大内之介義興が、当国、石見の国を領有するとき、筑前博多に神谷寿亭という人がいた。「雲州、出雲へ行かんとて、一つの船に乗り石見国の海を渡る。はるか南山を望むに嚇然たる光有り」。つまり、海から南の山を見たら、キラリと光っていた。そして、「寿亭船子に南山のあかるくあきらかなる光あるは何故やと問いければ、船郎答えて申すけるは、是は石見の銀峰山なりと語り伝う」。要するに、神屋寿禎という人物が日本海を航行中、南の山を見たらキラリと光っていたということで、銀山は発見されたとのことです。ちょっと怪しいなという。私も漁船に乗って見ましたが、光っていませんでした。だからちょっと怪しいなという気はします。

ただし、物語的にはよくできています。なぜなら、普通だったら、神屋寿禎が発見したで終わるところですが、わざわざここに大内氏という人物を登場させているからです。大内義興が石見の守護であることを前置きし、次に神屋寿禎が登場する。神屋寿禎はなんのために出雲に行ったか、実は銅を買い付けに行くという話が

出ています。この大内氏や、神屋や、銅という3つの言葉でつながるキーワードは、日明貿易です。ですから、どうも銀山の開発には日明貿易というものが、大きな背景にあるのではないかと。ということですね。

では、そもそも大内氏ってどういう人か。広島にも関わっていますが、この大内義興、西国一の守護大名で、山口を拠点としています。筑前博多あたりも支配し、中国地方も支配している大名です。それだけではなくて、面白いのは、自分の先祖は、百済の琳聖太子という。自分は百済の琳聖太子の子孫だということで、朝鮮に貿易をしようと要求していくわけですね。そして、朝鮮との貿易を積極的にやっています。だから、『李朝實録』を見ると、大内氏の船が朝鮮に行ったという話が出てきます。さらに朝鮮貿易だけでなく、1451年ぐらいから日明貿易にも参画するようになり、永正13年、1516年には、足利将軍義隆を将軍に復帰させたという功績で、大内氏は日明貿易の実質的な配船も含めた、管掌権を獲得していきます。

さらに、大永3年、1523年に寧波の乱、中国の寧波で、大内氏と細川が日明貿易を巡って軍事衝突をします。結果的には大内氏が勝ち、それにより大内氏は日明貿易を完全に独占するようになります。ですから、寧波の戦い以降、日明貿易の中心的な主催者は大内氏になっていくということです。では、大内氏そのものが、中国皇帝に対しての贈り物を用意するかというと、彼が直接やっているわけではない。実際は堺の商人や、赤間関、門司の商人を使ったり、博多の商人も使うわけですね。この博多の商人のなかに、神屋家というのがあるわけですね。

神屋寿禎という人物は、実在する人物です。しかしながら、神屋寿禎の一次史料は極めて少なく、レジュメの3枚目、天竜寺の策彦周良という僧が書いた『策彦入明記』というのがあって、その初渡集のなかに、神屋寿禎のことが出てきます。策彦は第18次の遣明船で博多に寄港しているのですが、そこに神屋寿禎が訪ねてい

ます。皆さんのお手元のレジュメにも、天文7年12月28日に書いてある。「統上司公老親壽禎」と書いてあります。そして、その人が山芋とか、ゴボウとか、お酒を持って、策彦のところに訪ねていくということです。その翌8年11月6日も、寿禎が来て、扇子を携えて持ってきたとか。面白いのは、ここのところで、先ほど出てきましたように、統上司公という人の老親が神屋寿禎だということが書かれていますが、この統上司公というのは、博多の聖福寺というお寺があります、駅の近く。そこの僧で、庵主の三正統上司という人物、彼が神屋寿禎の息子だということです。

ここはものすごく重要です。なぜかというところ、この博多の聖福寺というのは、日明貿易の拠点となる寺院です。ですから、神屋寿禎の息子がそこにいるし、神屋も中国貿易をやっています。大内氏も日明貿易をやっています。しかも、大内氏は日明貿易をするために、この聖福寺に接近している。つまり、石見銀山を開発した人たちは、いずれも対外貿易でつながっているということです。先ほど、明の時代に銀の需要の話をしました。彼らは、この時期、中国では銀がものすごく重要なものであるということを知っているわけですが、そういうことを知っている人たちが、石見銀山の開発に乗り出していく。したがって、石見銀山の開発そのものというのは、国内で銀がたくさん必要だったというよりも、むしろ海外での銀の需要が、開発の大きな動機付けになっているということがわかります。

ところが、石見銀山で神屋寿禎が開発するのですが、まだ銀を精錬する技術がなかった。そこで、神屋寿禎は、1533年に宗丹と桂寿という2人の技術者を博多から石見銀山に招いて、灰吹法という銀の精錬方法を伝えます。「此年寿亭博多より宗丹・桂寿と云うものを伴ひ来り、八月五日相談し」。鏈というのは銀と石が混ざったもの、銀鉱石のこと。「鏈（銀と石と相雜ものを鏈と云）を吹熔し、銀を成す事を仕出

せり、是銀山銀吹の始り也」ということです。これが1533年です。これが書かれたのは、1533年からもっとあとのことです。200年ぐらいあとの書かれた史料ですので、本当かということになります。世界遺産の登録のときにここが大きなポイントになりました。そこで、登録のための調査で、同時代の史料があるかどうか、国内を探しましたが、ないのです。

ところが、『李朝實録』、史料6に書いてありますが、これには倭人、日本人が、銀を売って商品を買うことが最近になって始まったと。それは、わが国の朝鮮のスパイみたいな人たちから、ひそかに銀をつくる方法を教わったからだ書いてあります。これは1540年ごろの史料ですが、同じような記述は、1539年ぐらいの史料にも出てきます。これらの内容から、石見銀山にもたらされた銀の製錬技術は、朝鮮から入ってきているのではないかということが考えられます。

面白いのが、この端川という鉱山、これは北朝鮮です。(スライド13) 今、レアメタルとか、レアアースがものすごくあるということで、注目されている鉱山です。もともと鉛の鉱山ですが、鉛にはなかに銀が入っているので、だいたいの古い時代の銀の生産の原料というのは鉛です。この端川も鉛鉱山で、そこでどうも銀の生産が行われているということです。これは1503年ぐらいの史料で、当時、端川では、どういう方法で銀の精錬が行われたかということがわかります。これでは良人金甘仏・掌隸院奴金儉同という人が、鉛から銀を精錬して、2銭得たということで、その方法は、水鉄というのは鋳物の鉄。鋳物の鉄を使って、そのなかに灰を入れ、そのうえに鉛の鉱石のかけらを置いて、そして燃料の木炭を置いて、火を付けてあおって、銀を取ったという話です。鉄の鍋を使って、端川の鉱山では銀の精錬をやったと出てくるのですが、実は石見銀山でも鉄鍋が使われています。

これは石銀の藤田地区というところで、平成

10年ぐらいに発掘調査をしたら、鉄の鍋が出てきました。この中の土を分析したところ、動物の骨を焼いて作った灰の成分と鉛とか銀が出てきた。これは先ほどの端川の鉱山の技術と、よく似ています。同じと言っていいぐらい酷似しています。この鉄鍋や、文献の内容から総合して、朝鮮半島から石見銀山へ灰吹法というのがもたらされたのだろうと。

これ以前の、灰吹法という、先ほど、飛鳥池のやつを見ていただきましたけれども、あれはだいたい土製の器に直接、鉛を吸収させて銀を取るのです。灰は使わない。ところが、朝鮮から伝えられた技術というのは、灰を使っています。灰を使うことによって、炉を任意に大きくできるのです。炉を大きくできるということは、大量生産が可能になってきます。石見銀山に導入された技術は、日本の在来技術ではなくて、海外から輸入した技術で、しかも、大量に銀を生産することが可能な技術。そういうものが導入されたということになります。この灰吹法が導入されることにより、石見銀山の生産も本格的になる。この技術は国内にたちまち伝播していきます。

史料4は、『生野銀山旧記』です。生野銀山は、兵庫県朝来市にあります。これも日本で有数な銀山です。この銀山は、1542年に開発されます。開発にあたって、石州から人が来たと書いてあります。つまり、石見銀山から来た技術者によって、生野銀山の開発が1542年に行われるということです。天文12年です。そのあとの史料5は、肥後の大名相良氏のものです。これによると、相良の領国内の宮原というところで鉱石が見つかったと。その鉱石をわざわざ石見銀山の技術者に鑑定してもらったという話です。そののちに、宮原では、鉱石から銀を取ったという記録があるので、ここもまた石見銀山の技術者の関与が推察されます。

石見銀山が開発されて10年ぐらいになると、各地に石見銀山の技術が広まり、16世紀後半になると、日本でかなりの数の銀山が開発

される。灰吹法というのは金の精錬技術にも用いられますから、16世紀後半から17世紀前半にかけて、日本では各地で金銀の生産、シルバーラッシュやゴールドラッシュが起こってくるということです。この多くの鉱山を後に秀吉や家康が支配していく、それについては、今日は割愛します。石見銀山の灰吹法によって日本各地で鉱山開発が行われ、だいたい17世紀初頭で世界の3分の1の銀が、日本から輸出されたという話があります。その多くは石見銀山だったということはよくいわれていますが、量は別としても、石見銀山の灰吹法によって、各地で金銀山開発が一気に進んで、日本は世界有数の銀の生産国になっていくことは事実です。

さて、石見銀山の話に戻ります。1533年に灰吹法が伝わって、いよいよ山元で本格的な生産が行われていく。では、この銀はいったいどこに行くかということです。実は、国内に流通するよりも先に、海外に行くのです。日本では、まだ金は都あたりでも使われたりしますが、銀は、ほとんど貨幣として使われることがない。だから、国内の需要はあまりないので、朝鮮あたりに輸出されていく。鞆ヶ浦という港から、博多へ向けて積み出されていきます。そこからさらに朝鮮半島に輸出されるということです。

いつごろから輸出されるかということ、『李朝實録』を見ると、1538年ごろに日本の商人が銀を輸出するようになったという記述があります。また1539年には、倭銀を輸入して中国に送る、1540年には、「倭銀が流布して市塵に充物。赴京の人公然と駄載し、一人の齎せる銀は、三千両を下らない」とかできます。この3,000両というのはかなりの量です。今までほとんど銀の話題が出てこないのですが、1540年代ぐらいになると、なんと3,000両の銀が朝鮮に流入したというのが出てきます。さらに1542年ごろには、日本は銀を大量に有しているので、貿易を許せば、さらに銀の輸入が進んでいくと。

この年、日本国王使の安心という人が、銀

8万両、3.4トンぐらいの銀を朝鮮に持ち込んで、貿易をしると要求します。8万両ってすごいです。朝鮮の慶尚南道の政府が保有している木綿をすべて買ってもお釣りがくる。木綿は当時、朝鮮ではお金と同じような価値を持っていますから、これが入ってくることによって、木綿が日本に流出するということは経済的に大きな問題になる。さらに、これだけの銀が朝鮮に入ったということがわかれば、中国から貢納しなさいという話になるので、朝鮮では、この貿易を受け入れるべきか否か、大変な議論になっています。最終的には、3分の2ほど受け入れようという話になります。

ここで注目したいのは、この安心という人物です。彼は本物の日本国王使ではなく偽の国王使です。対馬で偽造した国書を携えて行くわけですが、朝鮮側でも、どうもわかっているみたいです。そういう人が銀を持ち込んでいます。この安心は臨濟宗という宗派で、対馬の西山寺の僧であり、臨濟宗幻住派というグループに属している。その幻住派のグループのなかには、博多の聖福寺が入っています。聖福寺には神屋寿禎の子どもがいますから、当然、神屋寿禎ともつながっていく。そうすると、この銀8万両の出どころはどこか、石見銀山と考えて間違いないだろうという話です。こういうかたちで石見銀山で生産された銀が、朝鮮へたちまちに入っていく。ところが、朝鮮に滞留しないで、この銀は中国にどんどん向かっていく。

そうしますと、日本の商人たちも、朝鮮よりも中国がいいという話で、わざわざ、朝鮮に輸出した銀を買い戻して、中国に送ったりするようになります。さらにそういった情報が、やがて中国の南のほうの人たちに伝わって、やがてそういう人たちが日本にやってきます。例えば『李朝實録』には「政院啓して曰う、今唐人を推するに言語一致せず、奸詐をなさんとす」。つまり、朝鮮の沿岸に唐人、中国人が漂着して、悪いことをするのではないかと。「初めて居処を問うに、或いは河間と曰い、或いは福建

と曰う」。あなたはどこから来ましたかと言うと、福建から来た。福建になにかあるかと聞いたら、こういうものがありますということで、調べてみたら本当にあったということですね。さらに、「又問う」。ここが重要で、「何事に因りて到来するや、と」。どうしてあなたはここに漂着したのかと聞いたら、「則ち答えて曰う、貿銀の事を以て日本へ行くに、風が漂わせる所となりてここに致る、と」。つまり、日本に銀を求めてやってくる。その途中に暴風雨に遭って、朝鮮の沿岸に漂着したと。こういう船を荒唐船といいます。1540年代ぐらいになると朝鮮沿岸に漂着する船が多くなります。

それまで、中国の南のほうの商人たちの関心が向かっている場所というのは、東南アジアです。あるいはインドの方まで行っています。ところが、東には、ほとんど来ていません。だから、日本の沿岸に中国人が、それまであまり出てこなかったのですが、1540年代ぐらいに東シナ海に日本の銀が大量に輸出されるようになると、やがて中国人の活動も東のほうに移っていく。そういう人たちが、日本人の海賊と一体となって、いわゆる略奪行為をやっていくわけです。そういう人たちを倭寇といいます。倭寇の拠点はずいぶん平戸です。平戸には六角井戸というのがありますが、これが王直の井戸だといわれています。王直は倭寇の頭目です。当時、中国は民間人の貿易を禁止していますから、私貿易というのはすべて密貿易になり、中国官憲の取締りの対象になります。そういう人たちは、それらを逃れて五島列島だとか平戸、そういったところに拠点を置くのです。

この史料には、1542年に平戸から中国に向けて銀が運ばれるという話が出てきます。先ほど博多を中心に銀が出ていくという話をしますが、1540年代ぐらいになると、平戸、特に松浦氏という大名は、対外貿易にもとても熱心ですから、おそらくこういった銀も平戸を通じて、倭寇といわれる人たちの手を経て中国に行く。そういう倭寇の活躍が東シナ海で1540年ぐ

らいに活発になってくる。ちょうどその時期、西からはポルトガル人が来ているわけです。ポルトガル人も中国と正式の貿易をやろうとしますが、中国はそれを拒否しますので、基本的にポルトガルと中国との貿易はできないわけです。そうすると、倭寇と密貿易。例えば、揚子江の河口付近にリャンポーという島がありますが、そういったところとか、東南アジアなどで、彼らは密貿易をやっているわけです。

そういう状況のなかで日本の銀の情報が伝わって、最終的にはポルトガル人が日本にやってきます。1543年8月25日に種子島の西村というところに船が漂着したと。100人ぐらい乗っていますが、これがポルトガル、「その形類せず」なので、ヨーロッパ人を見た最初の日本人の感想かもしれませんが、次のところが重要です。「その中に大明の儒生一人、名は五峯なる者あり」と書いてあります。この五峯という人物が、倭寇の頭目の王直という人物です。安部龍太郎さんの本で『五峰の鷹』があります。つまり、ポルトガル人が、わざわざヨーロッパから自分の船を仕立ててやってきたわけではなくて、中国で船をチャーターして、ジャンク船という船をチャーターし、そして王直みたいな人たちが水先案内人になって日本にやってくる。ところが、たまたま暴風雨に遭って、種子島に漂着するという話です。

鉄砲伝来や、ポルトガル人の種子島漂着は、必ず教科書で習います。日本にとって初めてアジア以外の人たちと交流が始まったということなので、小学校6年生から歴史の勉強を始めますが、必ず習います。日本の歴史にとってすごく重要な出来事だからです。けれども、学校で皆さん、教えてもらいましたか。なんのために彼らが日本に来たか。最近ちょっと変わってきましたけど。われわれが子どものころには、そんなことは書いてありません。実際、石見銀山の調査研究を進めていくうちに、彼らの目的は銀であると。この出来事は1543年ですが、佐

渡や生野が発見されるのは1542年です。1年ぐらいで大量に銀を生産することは不可能なので、おそらく彼らが求めてきた銀の多くは、石見銀山の銀と考えてもいいのではないかと思います。いずれにせよ、ポルトガル人が日本に来る直接的な大きな動機付けに、石見銀山の銀があったということだと思います。

ポルトガル人によって鉄砲が伝わるというのは大きいです。やがて国内で生産できるようになる。余談ですが、江戸時代には日本は世界でも有数の鉄砲の保有国になっています。『鉄砲を捨てなかった日本人』という本もありますけれども、日本では、鉄砲は武器としては使われませんでした。その保有量は世界でも有数だったといわれています。

話を戻しますが、ポルトガル人によって日本に鉄砲が入ってくる。これは大きな軍事的革新です。鉄砲だけではなく、フランキ砲という大砲も入ってくる。それによって戦争のやり方が変わったり、城の築き方が変わったりするといわれています。長篠の戦いで鉄砲隊を組織したなんて有名な話ですけども、まさに戦国時代の象徴的な武器として鉄砲という存在がある。鉄砲の伝来にも、実は銀というのは深く関与しているということです。

さらに、この度、潜伏キリシタンの遺跡が世界遺産になりましたが、そのキリスト教が入るきっかけは、ザビエルです。ザビエルは、堺には日本中の銀が集まっている、そこに商館をつくれれば、10倍ぐらいもうかるということをやっています。銀の情報は、ザビエルの書簡などを読むとけっこう出てきます。さらに、面白いのは、ザビエルは、カステイーリャ人、つまりスペイン人は、日本を銀の島だと言っているんだということです。ザビエルを通じて、日本は銀の島だという情報がヨーロッパに伝わっていくわけです。

実は、日本銀というのは、ヨーロッパに行かないのです。なぜかというと、世界最大のマーケットというのは中国です。だから、中国へ日

本の銀は向かっていく。南米の銀も、ヨーロッパに向かっていきますけれども、ヨーロッパに入った銀も、やがて中国に向かっていきます。先ほど、アカプルコとマニラのあいだで、ガレオン船という定期船が就航するという話をしましたけれども、こうした船を通じて南米の銀が中国に向かっているんです。だから、ある研究者は、当時の中国というのは、まさにブラックホールのように銀をのみこんだと言っています。多くの方は、日本の銀は、ヨーロッパに行ったとイメージされる方がいらっしゃいますが、最大のマーケットは中国です。銀はヨーロッパには向かわなかったが、彼らを通じて、日本の情報はヨーロッパに確実に伝わっているのです。

これは1595年のベルギーのアントワープでつくられた日本地図です。(スライド14) こういう日本地図もつくられるようになるのですが、石見とか、出雲とか、国の名前が書いてある(スライド15)のですが、ここに実はラテン語で銀鉾山と書いています。こういった地図を通じて、石見と出雲のあいだに銀鉾山があるということをヨーロッパ人が知っているし、おそらく石見というところに銀山があるということは、彼らを通じて知っているのです。そのことが、ヨーロッパに銀がもたらされること以上に重要になってくる。こうした情報を通じてヨーロッパの人たちが、日本人に関心を持ってくるようになるということです。ちなみに、今、石見銀山の話をしました。世界遺産でしょう。もう一つ、この地図のなかに世界遺産が書かれています。どこかという、巖島と書かれています。だから、この地図にはくしくも2つの世界遺産が書かれています。

これ以降、ポルトガルと日本の貿易が始まり、やがて江戸時代には、オランダとの貿易が始まっていきます。これによって、日本はヨーロッパとつながっていくことになるわけです。そのことが、日本のさまざまな文化に影響を与えます。例えば、今、私が着ているボタン、こ

れはポルトガル語じゃないですか。たばこ、長襦袢の襦袢、おすしのバッテラもポルトガル語です。金平糖もそうです。そう考えると、食文化もそうですけれども、芸術や学問、科学技術なども、ヨーロッパの影響を受けている。着物もそうです。ポルトガル人は貿易で中国から生糸を仕入れて、それで日本で販売して、ばく大な利益を得ています。大量の銀を輸出する代わりに、大量の生糸が日本に入ります。これにより京都の西陣だとか、博多織だとか、そういうものが発展していった、安土桃山時代になったら、ものすごくきれいな着物を着るようになります。

もう一つは、石見銀山のある現地でも大きな政治的変動が起きました。ここからはこれについてお話します。石見銀山の開発以前以後の変化として端的に一番わかりやすいのは山城です。石見銀山の争奪に伴って、石見銀山周辺で山城がたくさんつくられていきます。これが象徴するように、銀山ができたことによって、今まで政治的に拮抗していた状況が一気に崩れていき、戦国大名を中心に地元の国人領主あたりが巻き込まれて、銀山一帯で大きな軍事衝突が行われていくという話になるわけです。

石見銀山が開発された当時は大内氏が守護です。大内義興が、1517年、永正14年に、石見の守護に任命されます。大内氏はそれ以前から、石見のうちの邇摩郡だけは知行することを室町幕府から認められています。分郡知行といいますが、石見全体の守護ではないのですが、邇摩郡だけは守護権力を行使できるということです。1517年になると、いよいよ義興の時代になって、この石見の守護に補任されます。それを記念してかどうか知りませんが、石見銀山の近くの仁摩町にある石見八幡宮という神社には、永正14年に大内氏が本殿を建立したという棟札が残っています。だから、大内氏にとって、やはり邇摩郡というのは重要だったということが言えると思います。この石見八幡宮の近くの山の上に石見城があって、これは尼子氏方

の温泉氏の城です。温泉津の湯里というところに本拠を持つ国人ですが、その温泉氏は尼子氏方に付くのです。この城は世界遺産です。

大内氏は、このように永正14年以降、邇摩郡だけではなくて、石見国の守護になります。出雲で尼子氏は有名です。月山富田城を本拠地に行っている尼子氏は、大永3年には、那賀郡という江津市と浜田市の近く、その一帯をも領有しています。つまり、その時期、石見銀山が開発される前後には、守護としては大内氏がこの一帯を支配していますが、尼子氏の領国経営のなかに、この邇摩郡も含めて一帯が支配されているということです。だから、守護の大内氏と戦国大名の尼子氏が、この一帯を支配しているということです。かといって、すぐさま尼子氏が大内氏を倒して銀山を奪うということにはならなかったのです。

さて、大内氏の石見銀山支配の具体的な実態は不明ですが、先ほどの『おべに孫右衛門ゑんき』には若干の記述が見られます。それによると、大内氏は銀山奉行として、青景、吉田、飯田という、大内氏の家臣ですけれども、そういう人たちが銀山の奉行として取り次ぎをやっているということが書かれています。さらに、この大工の与三右衛門とか、又三郎という人たち、これは技術者ですが、彼等に対して大内氏は官途を与えて、その政治権力のなかに再編しているということです。

また、大内氏にどのぐらいの銀が銀山から納められるかという点ですが、これも銀100枚ぐらい。後になると、銀500枚ぐらいになっています。大内氏の場合、生産量の10分の1ぐらいを税金として徴収したのではないかとわれています。ですから、最大で生産量は5,000枚ぐらいということなので、けっこう出ているということは言えると思います。このぐらいのことしか、大内氏の時代の支配はわからないというのが実態です。

内容レジュメを見ていただきましょうか。5の銀山の領有をめぐるというところ、先ほど

『おべに孫右衛門ゑんき』の話をしました。その次をめくっていただくと、先ほど話したように尼子氏と大内氏の勢力というのは、邇摩郡、銀山の周辺で重複するような、拮抗関係にあるわけですが、尼子氏はこの段階では、石見銀山の支配はできていません。実際には、大内義興が石見銀山を領有し、彼の死後には義隆が家督を継承します。ところが、義隆は天文20年に陶晴賢の謀反に遭って自刃させられます。そのうち、豊後の大友から義長を養子に迎えるわけですが、彼は陶氏の傀儡であるあるため銀山の実質的な支配を陶が行っていたといわれています。

では、尼子氏はいつごろから銀山に進出してくるのでしょうか。史料10は大田市久手町に刺鹿地区があります。そこにいた在地の領主、刺賀長信を大内氏が山吹の城番に任命するという内容です。では、その時期、尼子氏はどうしていたのか。それは次回、お話をされる長谷川先生によれば、大永から享禄ぐらまでは、尼子氏は他国、例えば、備中だとか、この安芸のほうへ進出していたようです。そして天文年間の初めごろもまだ出雲とか石見ではなくて、畿内方面に向かっていたとのこと。ですから、石見銀山は開発されていますけれども、いまだ尼子氏の勢力が、本格的に石見銀山の支配に乗り出すということには至らなかった。そのあと、天文後半ぐらいになると、本格的に石見銀山の進出に乗り出すようになるわけです。

では尼子氏の石見銀山への進出は、いつごろから本格的になってくるかということですが、レジュメをご覧ください。これから天文10年3月ごろになると、尼子氏が大田のほうに進出していることがわかります。大田とは、大田市の中心市街地で、そこで軍事衝突があったという記録が出てきます。しかし、大田や石見銀山の周辺で、軍事衝突は行われているけれども、銀山本体には至っていない。

ところで、天文12年、大内氏が月山富田城攻めを行います。尼子氏は大内氏勢を退け、その

結果、大内氏は敗退して引き返します。このとき、毛利元就も、尼子氏の月山富田城攻めに参加しています。元就は富田城から引き返す際、大田市波根町の長福寺に立ち寄って、お世話してもらったりしています。このとき同寺の三休上人から「矢違いのお守り」もらっていますが、このお守りは、矢に当たらない呪が掛けられたものです。そのうち永禄10年に、元就が再び長福寺を訪ねます。そのときに、元就から長福寺の三休上人に福田衣という、陣羽織が与えられています。その陣羽織はのちに袈裟に改良されて、現在お寺の寺宝として大切に保管されています。

話を戻しますが、天文12年、大内氏が富田城攻めで大敗すると、尼子氏は先の刺鹿というところに、多胡辰敬という人物を配置します。多胡辰敬という有名な武将ですが、彼は岩山城という城を築いて石見東部の押えとします。天文年間半ばころから銀山の周りに尼子氏の勢力が徐々に拠点をつくっていくという状況がみられます。

とはいえ、この時期では尼子氏による銀山への攻撃や領有は至っておりません。しかし、この状態は大内家が滅びることで本格化します。実際には大内家が滅びるというよりも、陶晴賢が滅びることですが、これにより銀山を巡る争奪戦が尼子氏と毛利氏との間で展開することになります。皆さんもご存じのように、陶晴賢は、弘治元年、厳島の合戦で毛利氏にやられます。毛利氏はその翌年の弘治2年3月に、吉川元春や口羽通良などの家臣を石見に派遣して、石見銀山の領有に乗り出していく。3月ぐらいには毛利氏によって石見銀山は押さえられたようです。銀山の山吹城には、大内氏の城番であった刺賀を取り込んで引き続き在番させています。

その後、尼子氏と毛利氏のあいだでは衝突が行われます。特に有名なのが、史料11の史料です。弘治2年8月、尼子氏方の勢力が、銀山周辺の三久須、矢筈、三ッ子山の山城から攻めて

いることがわかります。しかし、このときは、今の邑智郡美郷町の青杉城を拠点にしている佐波氏の援軍によって、尼子氏の勢力を排除することができたようです。

ところが、史料12にあるように、これは9月3日の史料ですが、この段階では、尼子氏が毛利氏から銀山を奪取しています。ですから、毛利氏が弘治2年3月ぐらいで石見銀山を押さえますが、そのわずか5カ月後には、尼子氏が奪取するという状況になっています。さらにそののちには、毛利氏と尼子氏のあいだで激しい争奪戦が行われていくという話です。特に重要になってくるのが、彼らが直接対峙するというのではなく、そこにいる国人が重要な役割を果たしています。例えば、尼子氏方で言うところの川本の小笠原。この小笠原の動きはとても重要で、毛利氏もかなり苦慮していました。ところが、永禄2年、毛利氏はこの川本の温湯城を攻めて、自分の味方に付けます。これにより、形勢が逆転しました。そして結果的に、永禄5年6月、再び毛利氏が、尼子氏から銀山を奪うことに成功します。当時、山吹城には本城常光が城番として置かれておりましたけれども、毛利氏は本城を懐柔して、山吹城から退去させます。その結果、永禄5年に毛利氏が再び銀山の領有ということになっていくわけです。

さて、毛利氏にとって石見銀はどのように利用されたのでしょうか。一つ目には正親町天皇の即位式のときに、石見銀山の銀を毛利氏が寄付している事例があります。二つ目には鉄砲の問題があります。毛利氏は、鉄砲隊を比較的早い段階で軍事組織として編制するといわれています。弘治3年、周防須々万沼の城攻めで初めて使用され、永禄年間には軍事組織の中に鉄砲中間が編制されるようになるといわれています。銀山周辺では永禄4年に江津に松山城で、鉄砲を使っています。これは山陰の鉄砲の使用では、軍事的な使用では早いといわれています。

鉄砲は国内でもつくられるようになるのです

が、火薬は国内では作れていない。それは火薬の原料となる硝石が国内にはないからです。そのため海外から輸入しなければなりません。中国や東南アジアのタイあたりから輸入する。輸入するにあたって、銀は重要になってきます。さらに鉛もあります。鉛は基本的に国内でも生産されますが、戦国時代になると銀生産や鉄砲玉などにおいて大量に消費されるようになります。そのため、鉛なども中国やタイから大量に輸入したりしています。これにあっても銀が必要になるわけです。さらに、その銀は、少量でも高額な貨幣ですから、例えば、兵糧枚をわざわざ前線に送る必要はないわけです。銀を前線に送って、現地で購入させればいいわけです。その意味で戦国大名の勢力拡大にとって銀の獲得は不可欠といえるのです。

毛利氏による銀山の支配は関ヶ原の戦いまでの40年ぐらいです。この期間については、おそらく長谷川先生のほうが具体的にお話をされるのではないかなと思います。関ヶ原の戦いまでの毛利氏の話では、おそらく厳島神社の話が出てきたりするかもしれません。ちょうど去年、世界遺産登録10周年の展覧会で、厳島神社の銀の狛犬が展示されていましたが、厳島神社と石見銀山の関係なども興味深い話がたくさんあります。長谷川先生からは、毛利氏と銀山の関係を政治的、経済的だけではなく文化面など多方面からのお話が聞けるのではないかなと思います。どうぞご期待下さい。

大変雑ばくなお話でしたが、どうもご清聴ありがとうございました。(拍手)



会場の様子

世界遺産石見銀山特別講座「奪い合う石見銀山」@中国新聞ホール／平成30年8月25日13：30

石見銀山の開発とその時代

講師 仲野義文（石見銀山資料館館長）

1. 日本の銀生産

日本列島と鉱物資源

日本列島は、フィリピン・太平洋・ユーラシア・北米という4つのプレートが交わる複雑な地形上に存在→世界的にも地震や火山活動が活発な地域



金銀銅などの鉱物資源が豊富

鉱物という地球からもたらされたある種その場所固有の資源を利用し、古来以来日本の社会や文化を発展させ、さらには外国との交渉を行ってきた。・・・東大寺の大仏、平泉の黄金文化、日宋貿易etc

* 古代の銀生産と対馬銀山

天武天皇3年（673）3月に「對馬國司守忍海造大國言、銀始出于當國、即貢上。由是、大國授小錦下位。凡銀有倭國、初出于此時。」（『日本書紀』⇒対馬国での銀生産が我が国の嚆矢

対馬銀山は長崎県対馬市巖原町檜根に比定、古代唯一の銀生産地

【史料1】大江維持『対馬国貢銀記』（三枝博音『日本科学古典全書』第9巻1952年）

其の銀を採るの地は極めて險難と為す。多年穿壙の中、漸く深く口より底に入ること二三里許り。日月の光り之を照すことを得ず。三人手を連ね以て一番と為す。一人は燭を乗る、萩を以て炬と為す、星許なり。銷えざること久し。一人は器を捧ぐ。一人は鉄鎚を持ち之を取る。鼓鞞雜り入るも、三人を常法とす。其の後斗斛を量り、之を高山の四面風を受くるの處に置く。松樹の薪を以て之を焼くこと数十日。水を以て之を洗ふ。斛は別に其の率法を定む。其の灰は鉛錫と為る。

* 奈良県飛鳥池遺跡

7世紀後半の飛鳥池遺跡（奈良県）の工房跡から、灰吹法の痕跡がある土器片や凝灰岩製の石製ルツボが出土。その内部から金銀に加え鉛やビスマスが検出。これによりこの遺物が灰吹法に用いられたものであることが判明（村上隆『金銀銅の日本史』岩波新書）

※しかし、銀の大量生産に対応する技術ではない！

2. 世界的な銀山開発ブーム

国内の銀山開発は石見銀山の開発を契機に急激に進む⇒その背景は？

* 大航海時代と銀山開発

15世紀末、イベリア半島のスペイン、ポルトガルでは大洋に進出し、1492年にはコロンブスがバハマ諸島に到着、1498年バスコ・ダ・ガマがインド航路発見をした。これにより「世界の一体化」が進み、世界規模での交易が拡大した。→ **国際通貨としての銀の需要が高まる**

ポトシ銀山（1545年）、サカテカス銀山（1546年）、グアナファト銀山（1548年）

日本における銀山開発も世界的な銀ブームの文脈で考えることが必要！

* 東アジアの銀需要

朝鮮王朝

朝鮮王朝では16世紀末から皇帝や貴族階級における奢侈の風潮が強くなり、そのため唐物などの奢侈品に対する需要が高かった。

燕山君時代には、このような需要を受けて端川やなどの銀山が積極的に開発された。しかし、明朝への金銀貢納が復活するのを恐れた中宗は1533年、国内での銀生産を禁止したが、唐物への需要は減退することはなかった。

明王朝

14世紀以降中国では「銀経済の時代」を迎える

貨幣政策上の問題

元朝末の紙幣によるインフレの影響、銅銭や鑄造原料の銅資源の不足→現物納を基本とした租税体系
一方貨幣制度は銅銭を本位。太祖洪武帝（朱元璋）は、1361年、銅銭鑄造のため首都南京に宝源局を、翌年各行省に宝泉局を設置し、洪武通宝を鑄造。ただし、1368年の鑄造高は8900万文、その後2億文程度が鑄造→北宋時代の5分の1）→その結果、市中の銭不足、私鑄銭が横行し、1375年に「大明通行宝鈔」を発行。しかし、兌換準備銀の不足による不換紙幣化→市場信用を不得
経済的に豊かな江南地方では、鈔の暴落を期に銀に対する需要が進む→江南地方では他地域に先行して早くも1436年以降、田賦の一部が折銀、すなわち銀納化が実施（金花銀）。

北虜の問題

漢民族の王朝として成立した明王朝は、北方の遊牧民族による侵攻に苦慮
北方民族の対策→万里の長城を整備、九辺鎮なる軍隊を配置して防備
軍隊を維持→米穀などの現物納を基本。ただ広大な領土をもつ中国の場合、軍糧の運搬にかかる負担は過酷→山西平陽府から大同鎮への輸送距離は「道路一千里」と比喻
正統年間に輸送負担の軽減のため、従来穀物の直納から銀代納へと変わる→**銀需要の増大**

3. 石見銀山の開発と展開

*「銀山日記」

石見銀山の歴史を記述した史料に「銀山日記」がある⇒異本・類本・写本が多数
「お紅孫右衛門ゑんき」・「石州仁万郡佐摩村銀山之事」・「石陽銀山記」・「銀山濫觴記」etc.

※大永7年（1527）説が支持

*発見譚にみる開発の背景

大永6年（1526）、大内義興が石見国守護のとき、筑前国博多商人神屋寿禎が出雲国鷲銅山に銅を買付に行く途中、日本海の沖より南山が光り輝くのを見つけ石見銀山を発見

【史料2】『石見銀山日記』山中家文書

大永中に大内之介義興、当国を領有する時、筑前博多に神谷寿亭と云うものあり。雲州へ行かんとて、一つの船に乗り石見国の海を渡る。はるか南山を望むに嚇然たる光有り。寿亭船子に南山のあかるくあきらかなる光あるは何故やと、問いければ、船郎答えて申すけるは、是は石見の銀峰山なりと語り伝う。

※大内氏と神屋氏との人的な繋がりを示唆的に表現 → **日明貿易をめぐる人的結合**

*大内義興

大内氏は、周防国山口に本拠を置く守護大名
百済の琳聖太子の後裔と主張し、朝鮮との積極的な貿易を展開
宝徳3年（1451）から日明貿易にも参画
永正13年（1516）、足利義植の將軍職復帰の功績によって遣明船派遣にかかわる永久的な管掌権が認められる

大永3（1523）、「寧波の乱」で細川氏を打ち破る → 以降日明貿易は大内氏による独占状態

※日明貿易を通じて神屋家と深い関係

*神屋寿禎

博多商人の神屋家の一族で実在する人物で、近年佐伯弘次氏によりその実像が明らかにされた
寿禎に関する史料は少ない → 「策彦入明記」初渡集に以下のごとく見出

天文7年12月28日 統上司公老親壽禎。恵以山芋・午房並酒兩瓶。

同 8年1月6日 壽禎来臨。携以扇子。

同 2月4日 神屋壽禎設斎。蓋統公司北堂之父春叟元仲三十三白忌辰也。

天文10年7月3日 午時。博多船来。神屋壽禎恵以斗合式ヶ。初喫博多酒。

同 7月13日 神屋壽禎恵大斗合一ヶ並茄子一盆。

同 7月21日 天目墨台一ヶ・大通庵。同一ヶ・玉雲。同一ヶ・神屋壽禎。

第18次遣明船の出航にあたって博多に滞在中の天竜寺妙智院策彦周良を訪ね贈物をする

統上司公=博多・聖福寺龍華庵主三正統上司 → 神屋壽禎は彼の老親

統公司北堂之父春叟元仲=三正の母方の父親が春叟元仲、壽禎の妻は春叟元仲の娘

天文21年(1552)10月22日に七回忌が実施 → 没年が天文15年(1546)10月22日

神屋主計家とは別系統

* 灰吹法の伝播

天文2(1533)年、神屋壽禎は博多より宗丹・慶寿を招き、灰吹法を導入する。これにより採鉱から製錬に至る一貫した生産システムが確立され、大量の銀が生産されるようになる。

【史料3】『石見銀山旧記』山中家文書

此年寿亭博多より宗丹・桂寿と云うものを伴ひ来り、八月五日相談し鏈(銀と石と相雜ものを鏈と云)を吹熔し、銀を成す事を仕出せり、是銀山銀吹の始り也

※ただし、灰吹法伝播にかかわる一次史料はない→記述の信憑性に問題

『中宗実録』には灰吹法伝播に関する記述が散見。たとえば、1539年には「伝于政院曰、柳緒宗多有所失、故不計殞命、期於得情刑訊可也、但倭人交通、多貿鉛鉄、吹錬作銀、使倭人伝習其術事」(中宗34年8月19日)とあり、地方役人柳緒宗が倭人から鉛鉱石を買って銀を製煉し、さらにその技術を倭人に伝習せしめた罪で処罰されたことが見える。同様に、1542年には「憲府啓曰、倭奴売銀貿始於近年、縁我国奸細之徒潜教造銀之法」(中宗37年4月)と、倭人に「造銀の法」を教えたとある。

* 灰吹法の普及

石見銀山に導入された灰吹法は、1540年代には各地に普及した。

生野銀山は天文12年(1542)に開発が始まる。石見の技術者が関与!

【史料4】『生野銀山旧記』生野書院蔵

然に蛇間歩里の人は是を掘出す、雖然銀に成事をしらす、然る所に石州之人来り、此石を求て、於石州吹処に大分銀あり、則此もの石州より金堀・下財・金吹を語らひ来て今の御立山の内所々に間歩を開く、山神の上より東堂カ谷何右衛門間歩皆此節の山なり

相良氏の領国肥後宮原で鉱石が発見され、石見銀山の太工洞雲が鑑定。

【史料5】相良義滋書状『大日本古文書』相良家文書417号

寔吉兆、千喜万祥、珍重々々、仍銀石之事、太工洞雲へ見せさせられ候、但州石にも勝候之由申候歟、満足此事候、如此之儀、日本珍物候之処、至当代現来之儀、不相応之事候之条、倍可為校量候…

天文十五年丙午七月六日於宮原銀石現出之旨、記録之儀、不可有油断候

16世紀後半には日本国内で金銀山開発ブームが起こる

4. 日本銀の流出とその影響

* 銀の輸出

銀生産の拡大によって、日本から大量の銀が朝鮮・中国に輸出されるようになる。1540年には「倭銀流布充物市廛、赴京之人公然馱載一人所賣不下三千両」(中宗35年7月)とあり、続く1542年には「倭国造銀未及十年流布我国已為賤物」(中宗37年閏5月)と、大量の銀が朝鮮に流入したことが見える。さらに、同年日本国王使僧と名乗る安心東堂が、銀8万両(3.2ト)を持ち込んで貿易を要求

※安心東堂は対馬の西山寺住持。臨済宗幻住派に属し、聖福寺と関係が深い。

日本銀が倭人等によって東アジアにもたらされる一方で、外国からも日本銀を求めて活発な交易活動

が行われるようになる。多くは中国南部の福建省などの商人で、彼らの中には暴風雨にあって朝鮮に漂着する者も出現。

【史料6】『中宗実録』巻103、中宗39年（1544）6月（『李朝實録』第廿四冊、学習院東洋文化研究所、1977年）

壬辰、政院啓曰、今推唐人言語不一至、為奸詐、初問居処、或曰河間、或曰福建、問福建有何物、則曰有某山、即取大明一統志考之、則果有之、又問、因何事到来、則答曰、以質銀事往日本、為風所漂而至此

ii. 倭寇の跳梁

1540年代から東シナ海域に日本銀が流入するようになると中国人海商の活動が活発化する。彼らは倭人と一体となって密貿易や略奪行為を行う。⇒五島列島や平戸などを拠点

【史料7】メンデス・ピント『東洋遍歴記』東洋文庫229頁

このようにしてこの戦闘が終了したので、敵のジャンク船に積んである物の財産調べをしたところ、戦利品は八万タエルにのぼった。その大部分は、その海賊が平戸からシンシェウに行く三隻の商人のジャンク船から奪った日本銀であった。従って、この船だけで海賊船は十二万クルザトを載せていたのであり、沈没したジャンク船にもほぼ同額のものを積んでいたということであって、味方のものの多くはそれを大変残念がっていた。

1542年、イスラム教徒の乗った中国船の積荷がポルトガル人の船を攻撃するも撃破される。敵の積荷を調べたところ平戸から漳州へ向かうジャンク船から奪った日本銀であった。

【史料8】南浦文之『鉄砲記』

※ポルトガル人の日本来航の背景には日本銀の存在が関与

天文癸卯秋八月二十五日丁酉、我が西村の小浦に一の大船あり。何れの国より来るかを知らず。船客百余人、その形類せず、その語通ぜず。見る者もって奇怪となす。その中に大明の儒生一人、名は五峯なる者あり。…手に一物を携う。長さ二、三尺。その体為るや、中通じ外直にして重きをもつて質となす。その中は常に通ずと雖も、その底は密塞を要す。その傍らに一穴あり、火を通ずるの路なり。形象、物の比倫すべきなり。その用為るや、妙薬をその中に入れて、添えうる小団鉛をもつてす。

5. 石見銀山の領有をめぐる

*大内義興の銀山支配

永正14年（1517）石見国守護に補任⇒この年11月、石見八幡宮（大田市仁摩町）の社殿を建立
享祿元年（1528）の義興死後、義隆が家督相続⇒銀山も

【史料9】「おべに孫右衛門ゑんき」高橋家文書

- 一、両大工周防の山口へ罷下り、御判を申受候、屋形様の御取次青景殿、吉田若狭守殿、飯田石見守殿両三人ハ御奉行之事
- 一、大工方へ官名を被遣候事、与三右衛門ハ大蔵丞、吉田又三郎ハ采女丞と御名被下候事
- 一、銀山御公用参候事、京銭百貫文、但銀ニシテ百枚、是ハ年中之御役目相定ル事

銀山奉行として青景隆著、吉田若狭守（興種）、飯田石見守（興秀）が取次となる

大工吉田与三右衛門、吉田又三郎に大蔵丞、采女丞の官途名を与える

大内氏への公納銀100枚⇒のち500枚

天文20年（1551）、陶隆房（晴賢）の謀反により大内義隆が自刃（大寧寺の変）

銀山の支配は陶氏、その後大友晴英を当主として擁立（大内義長）

山吹城の城番として刺賀長信が勤める

【史料10】天文22年4月5日大内義長袖判知行充行状『萩藩閩閩録』巻66刺賀佐左衛門11

石見国阿濃郡刺賀郷五百貫地、同国邇摩郡内重富村肆拾貫地等事、先証於山吹城令焼失云々者、任当知行之旨、刺賀治部少輔長信可領掌之状如件

戦国大名尼子氏の活動

長谷川博史氏によると

大永・享禄年間⇒他国への侵攻

天文年間前半⇒畿内方面への侵攻を軸に権力の安定・強化を図る

天文年間後半⇒西（日本海沿岸の港湾や石見銀山）の確保（それによって実現される東アジア海域との関わり）に活路

天文10年（1541）3月7日、「至安濃郡大田相動之時」尼子方の奥坂与左右衛門を討ち取る

天文12年（1543）、大内義隆が月山富田城を攻めるも敗戦、石見国安濃郡を尼子氏が制圧、その後多胡辰敬を刺賀郷岩山城に置く

大田市波根町の浄土宗長福寺の自伝によると、毛利元就は出雲国からの退散の途中長福寺に立ち寄り、「矢違いのお守」をもらう。その後、永禄10年（1567）に陣羽織（「福伝衣」）を寄付したと伝えられる

毛利元就と尼子晴久による争奪戦

天文24年（1555）10月、毛利元就は巖島の戦いにて陶晴賢を討伐

弘治2年（1556）3月、毛利元就は吉川元春・宍戸隆家・口羽通良らを石見国に派遣⇒直後に石見銀山を掌握

同年8月、銀山周辺の三久須、矢筈、三ツ子の諸城より攻撃するも佐和氏らの活躍により撃退

【史料11】毛利元就書状『萩藩閩閩録』巻11ノ浦凶書

銀山尼子陣之事、此方為後卷罷出候事、其間候而、浮立候、然砌、佐波ニ置候此方人数、佐波衆申談、中途之山へ打上、成行候処、則時退散候、山吹衆敵数輩討捕由候、左候間、三久須、矢筈、三ツ子以下敵城悉退散之由候、昨日佐波衆此方之衆至池田相動、則時切取候、其俣大田江相動之由候、定而大田之事茂可事行候歟、

同年9月、尼子晴久による銀山領有

【史料12】年末詳9月3日尼子晴久書状『萩藩閩閩録』巻168益田五郎兵衛2

対両三人示給之得其意候、此表之事、山吹已下之敵城悉伐捕之、属本意候、其表之儀、無油断方々可有計略事肝要候、尚各可申候、恐々謹言

永禄2年（1559）8月、尼子方の小笠原氏は川本の温湯城を開場し毛利氏の軍門に下る⇒毛利氏の形勢優位

永禄5年（1562）、尼子方の山吹城の城番本城常光を懐柔し下城させ、石見銀山を奪取以後、関ヶ原の戦いまで戦国大名毛利氏による支配が続く

参考文献

長谷川博史『戦国大名尼子氏の研究』吉川弘文館 2000年

伊藤 幸司『中世日本の外交と禅宗』吉川弘文館 2002年

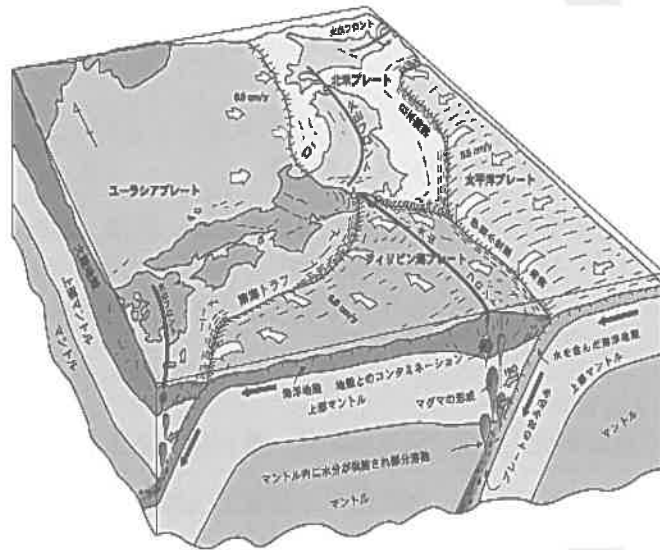
村上隆『金銀銅の日本史』岩波書店、2007年

佐伯 弘次「博多商人神屋寿禎の実像」『境界からみた内と外』（『九州史学』創刊五〇周年記念論集・下）岩田書院 2008年

スライド1



スライド2



スライド3

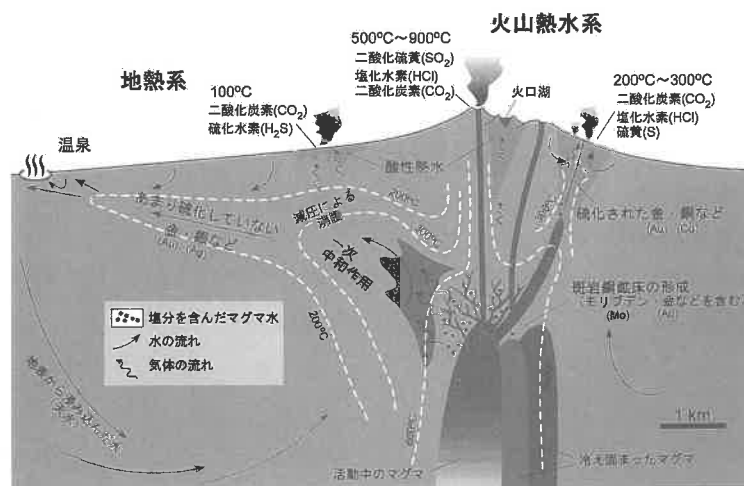
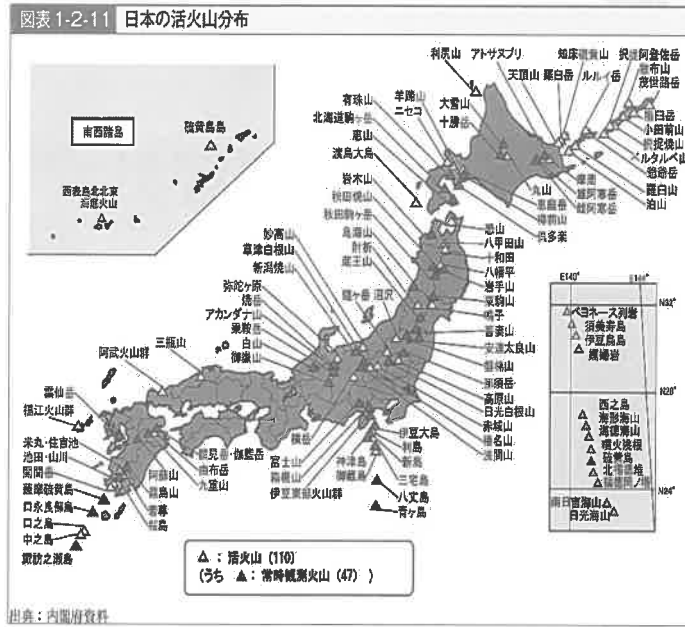


図 2-5-1 「マグマ熱水系モデル」における金の沈殿 (3)

スライド4



スライド5



スライド6



スライド7

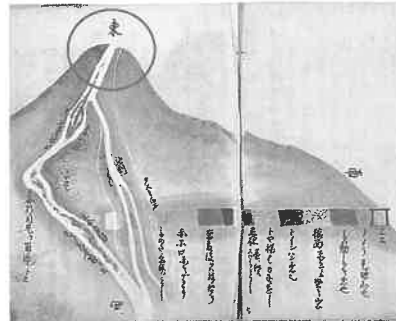


スライド8

露頭掘跡



銀鉱石が地表にあらわれた場所をほった！



「金銀山大概書」佐渡市教育委員会

スライド9

ひ押し掘跡



鉱石が「ひ」は鉱脈のこと。鉱脈に随って鉱石を採掘する方法



スライド10



大久保間歩



スライド11

16世紀の世界的な銀鉱山

メキシコ・サカテカス銀山



メキシコ・グアナフアト銀山

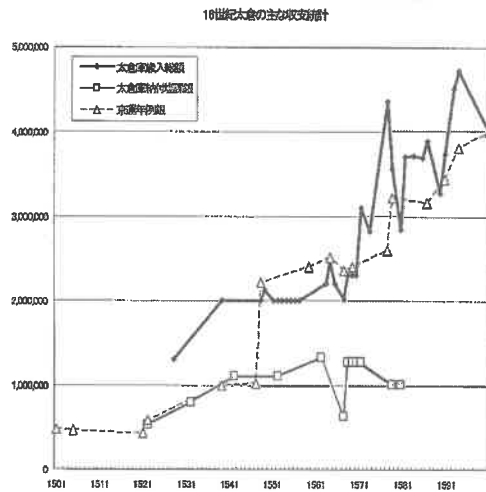


ボリビア・ポトシ銀山



スライド12

遊牧民の侵攻と軍事費の増大



スライド13

端川鉛山と灰吹法



『燕山君日記』

良人金甘仏・掌隸院奴金俊同、以鉛鉄鍊銀、以進日、鉛一斤鍊得銀二錢。鉛是我国所産、銀可足用。其鍊造之法、於水鉄鑪鍋内用猛灰作圀、片截鉛鉄填其中、因以破陶器四圍覆之、熾炭上下以鑪之、伝日、其試之

石見銀山遺跡出土鉄鍋



スライド14



スライド15

Argentum fodinae (銀鉱山)



島根大学教育学部 教授 長谷川 博史 氏

本日は「毛利氏と石見銀山」という題名で、お話をさせていただきたいと思います。

私自身は、かつて約20年間、この広島にお世話になっておりまして、当時から石見銀山には、関心もあり、何度か足を運ぶ機会がありました。こちらから見ると、遠い隣の県とお感じになる方も多いかもかもしれません。私は今、島根県の松江市に住んでおりますが、松江市から石見銀山に行くのも2時間ぐらいかかります。広島市内から石見銀山に行っていた頃も、やはりそのぐらいかかりました。そんなに距離は違わないという気がいたします。当時から関心を持っていたという縁もあるのですが、今回こういう機会を与えていただいたことを大変ありがたいと思っております。

今日は、島根県から、毛利氏と石見銀山に関する話をしてほしいと依頼がありましたので、それに対応するという意味で考えてみた話です。スライドに出ているのは、毛利元就、大内義隆、尼子晴久という、いわゆる戦国時代の中国地方の争乱を代表する、主役になっていた人たちです。いずれも石見銀山を目指していく。石見銀山を大変重視していたというのが共通した特徴だろうと思います。毛利元就が大内氏を打ち倒し、尼子氏を滅ぼして、最終的には、石見銀山を約40年間、支配するというのが、16世紀の後半の特徴的な動向であろうと思います。その毛利氏がどうやって石見銀山を掌握していくのか、毛利氏が石見銀山の何をどのようにして支配していこうとしたのか、そういうことについて考えてみようと思っております。はじめに、毛利氏による銀山の掌握過程、それから、支配のあり方、特徴、最後に全体を通してどういったことが言えるだろうかということについて、お話を、3章立てて話をさせていただきます。

はじめに

まず、「はじめに」のところですが、今日の話の中心の内容は、まとめればこういうことです。石見銀山の掌握とは、何を目的とするものであったのか。石見銀山の掌握とは、何を掌握することであったのか。これは、戦国時代のいろいろな諸勢力が、石見銀山を目指していく、石見銀山を掌握していくというように言いますが、それはいったいどういう意味があるのか。何を掌握することが、石見銀山を掌握することであるのかということ、毛利氏を事例に考えてみようということです。なぜそういうことを考えるかといいますと、石見銀山のような貴金属を産出する鉱山というのは、富の源泉といえますか、そこで多額の収入が得られることが掌握を目指す重要な理由であるということ。これは言うまでもない、前提のことであろうと思われるのです。

銀は、どの時代でも価値が高いものですが、特に16世紀の世界的な銀需要の高まり、これは世界史を考えるうえでも欠かせない銀の世界的な流通が背景にあります。銀の価値そのものが、ほかの時代よりも高いという意味では、これを捉えるのは当然、大事な問題だったと言えます。ただし、この銀を捉えるというのは、実際には鉱物が地下から出てくるわけですので、どうやってそれをつかまえるのか、あるいは掌握するのかというと、少し考えてみれば、そう簡単なことではない可能性がある。完全にすべての銀を特定の権力が全部、自分のものにするというのが、そんなに簡単なこととは思えないということです。

間歩については、仲野さんからお話があったと思います。確かに江戸時代には、明確に一つの権益としてかたちを整えてくると思いますが、戦国時代以前は、至るところに露頭のかたちで銀がむき出しの状態というのが、初期の段階と思われる。そうしたものをすべて一括し

て管理し、すべて自分のものにするということがどれだけできただろうかという疑問があるわけです。銀の直接的な入手はどこまで可能か。こういうことを考えていくなかで、実際にその銀を掌握する目的や意味について考えてみたいと思います。結論的に言うと、いわゆる貿易利権や、軍費という財政的な理由に加えて、もう一つ、とても重要な、銀山を捉えなければならない理由があったのではないかという話です。

16世紀の史料に出てくる「石見銀山」とは、要するに石見国に出現した銀鉱山という意味です。16世紀後半になりますと、今、私たちが世界遺産として認識している石見銀山以外に、ほかにもたくさん銀山があったというのが実態なので、史料上の用語としては、石見の銀山というのは、もう少し幅が広い可能性があります。ただ、話がややこしくなりますので、今日、お話をする内容は、戦国時代には佐摩銀山などとも称された、現在世界遺産の選定を受けている範囲に含まれる銀鉱山を、石見銀山と称して話をさせていただきます。

それから、この佐摩銀山というのは、毛利氏が直接管理して支配していたということが、これまでの研究でほぼ明らかになっています。かつては、豊臣政権の直轄支配であるとか、豊臣政権と毛利氏の共同管理ではないかといわれていた時代もありますけれども、今回は石見銀山が毛利氏の直接的な支配下にあったということを前提に話をさせていただきたいと思います。

I 毛利氏による銀山の掌握過程

毛利氏による銀山の掌握過程を紹介します。石見銀山自体は、現在では、大永7年、1527年に発見されたというのが、ほぼ定説化していると思います。1527年に博多の商人の神屋寿禎が、銅を取りに島根半島に行った帰りに、船の上から石見銀山を発見したという伝説・伝承が、『銀山旧記』等書かれて残されています。いろいろ伝説・伝承は多いですが、やはり圧倒的に周防国の大内氏、西国を代表する守護

大名であった大内氏が、銀山を管理しているという体制が、初期の段階の石見銀山であろうと考えられます。

この石見銀山では、1533年に灰吹法が開発されて、これは朝鮮半島から来た技術だともいわれます。もともと以前にも日本に伝わっていた技術であったともいわれますが、効率的に精度の高い銀を精錬できるということで、生産量の拡大につながったというのが一般的な説明です。以後、1540年代ごろから、石見産銀というのはどんどん産出量を増して、海外に向けても流れいったといわれております。ただ、1551年、天文20年に、大内氏の政変が起きました。これは周防国山口で、大内義隆の重臣であった陶隆房が反乱を起こし、大内義隆が自害するという有名な大内氏の内紛がありまして、これを契機に陶氏が銀山を支配していた時期があったことがうかがえます。

毛利氏が出てくるのは、これ以降のことです。毛利氏は、基本的には多くの時期を大内氏の配下として過ごしてきました。安芸国を代表する国人領主とか、あるいは国衆といわれてきた存在ですけれども、この時期に急速に力を伸ばしつつあるというところで、特に大内氏と対決を始める天文23年、1554年という年、「防芸引分」という言葉を書いています。防州の大内氏と芸州の毛利氏が戦争状態に入って、ここで初めて毛利氏が自立に向けて大内氏と対立していくという流れが見られるようになりました。この大内氏からの毛利氏の自立という動きが、石見銀山にも大きな影響を及ぼしたと考えられます。

この時期の中国地方の政治情勢というのは、周防国の大内氏と出雲国の尼子氏が大きな力を持って、二大勢力として競い合っているという状況です。そのなかで、石見国では、津和野の吉見正頼が大内氏に対して、陶氏に対して、反旗を翻すというかたちで挙兵をし、益田氏は大内氏方として対決をしているといった状況であったのですが、毛利氏が対決し始め

たという情勢の変化を受けて、それまで対立関係にあった大内氏と尼子氏が手を結んでいくのが、この天文23年ですので、1554年というのは、中国地方の政治的な対立の構図が激変している、転機となっている、そういう年であると考えられます。これは有名な、1555年10月の厳島合戦につながっていき、ここで毛利氏が陶晴賢を打ち破ったことで、毛利氏の覇権がいよいよはっきり見えてくるという状況になりました。石見銀山を守る山吹城の城主は、当時はもちろん、大内氏の配下にあったと思われかもしれませんが、この厳島合戦の結果を受けて、毛利氏方に転じていったと考えられます。

お配りしているレジュメの2ページ目の上のほうに地図を載せております。1556年、厳島合戦翌年の前半ごろの政治的な状況、勢力分布の概略を、全部ではないが、関係するところを列挙したものであります。この丸印は、大内義長、これが大内氏で、尼子晴久、これは同じ陣営だと考えていい。四角で囲んだ陣営があると思いますが、この当時は、従来の政治的な対立の構図が大きく変化をし、この四角で囲んだ、いわゆる毛利方が、新たに中国地方の中心部から急速に力を伸ばしていくといった状況下にあるだろうと考えられます。

山吹城と小さく書いていますが、これが石見銀山を守る城であります。毛利方の四角で書いてあるのは、1556年前半の時期に、大内氏からも離脱して、当然、それと連動して、尼子氏とも対立する立場として、石見銀山が毛利氏に属しているという状況です。この段階で初めて毛利氏は直接的に石見銀山を把握していると考えられます。短期間ですけれども、この山吹城が毛利方であるという状況が見られる年がこの図に示した年だということです。ただし、その後、毛利氏の支配が継続したのではなくて、同じ1556年8月に、山吹城が尼子氏によって制圧をされてしまい、毛利氏の手を離れていきました。以後、1556年から1562年までは、出雲国の尼子氏が石見銀山を掌握します。この間の毛利

氏の動きとしましては、まずは大内氏を滅ぼしていく。弘治3年、1557年に大内氏を滅ぼして、さらには、石見銀山のすぐ南側の、現在の川本町に温湯城という本拠を持っていた、石見国東部を代表する国衆である小笠原氏が、最後まで反毛利方としてこのあたりで頑張ります。これを打ち破るのに、毛利氏は大変苦慮していくのですが、最終的に永祿2年、1559年8月にこの温湯城という小笠原の本拠が落城しまして、これ以降、もう石見銀山が次の目標であるという状況になります。

最終的に1562年には、これもはっきりとした月はわからないのですが、尼子氏が山吹城に配置した城督といえる存在が本城常光ですが、この本城常光が毛利氏に投降するというかたちで、再び毛利氏が石見銀山を掌握していった。さらにその年の11月、毛利氏が出雲国内で本城氏一族を抹殺するという、毛利氏の歴史のなかでも、特に凄惨な粛清を断行した出来事として、よく挙げられる事件なのですが、この本城氏一族を抹殺することで、毛利氏はより確実に、より強く、石見銀山を支配することができるようになった。これがこの年、1562年のことであると考えられます。その石見銀山の山吹城に本城常光が留守居として置いていた服部就久という人物が、毛利氏に山吹城を明け渡して、石見銀山は完全に毛利氏方になりました。

ここで問い掛けだけ残しておこうと思います。石見銀山をめぐる激しい争奪戦、今回の講演会の全体のテーマも「奪い合う」という、強い言葉ですが、実際にこの奪い合うというかたちで激しい戦闘が行われた時期は、1550年代のことであって、それ以外の時期には、そのような激しい戦争というのは、ほほないという状況です。この時期、1550年代のころになって、こうした激しい人間の血を流すような過酷な戦争をしてまで、石見銀山を奪い合うのはなぜだろうかということです。この点をあとで考えてみたいと思います。

II 銀山支配の展開と毛利氏領国

それでは、2つ目の「銀山支配の展開と毛利氏領国」です。テーマが「毛利氏と石見銀山」ということもあるのですが、レジュメの2ページ目の真ん中の下あたりから。毛利氏による石見銀山支配の基本的な目的や、あるいは、基本的な構造、支配の方法を簡単にご紹介しようと思います。まず、銀山支配の目的と銀入手の実態です。1571年、元亀2年6月というのは、ちょうど毛利元就が亡くなった、同じ月のものです。「毛利氏御四人連署書状」という史料が「毛利家文書」のなかに残されています。この毛利氏御四人というのは、いわゆる「両川」といわれる吉川元春・小早川隆景に加えて、一族でもある重臣、親類衆のなかの代表格である福原・口羽の2人を加えた、新しい若い当主である輝元を補佐する、臨時的なものではありませんけれども、補佐体制として、この4人が連名でいろんな手紙を出したりしている事例が見受けられるので、当時の言葉、史料上の言葉を使って、「御四人」という言い方をする場合があるので、こう書いておきました。

毛利氏の御四人が次のような言葉を、新しい若い当主である輝元、元就亡きあとに残された輝元に対して、元就がこのように言われていたということを書いたものです。下線部ですが、温泉というのは、温泉津ですね。「温泉・銀山御公領の事」、公領というのは毛利氏の直轄領を意味します。「この間、洞春様」、元就のことですが、「仰せ付けられ候ごとく、少しも自余の御用につかまつられず、御弓矢の御用にせらるべく候」というように書いてあります。元就が石見銀山をなんのために獲得しようとしたのか。その大きな目的が、軍事費をいかにして確保していくか、御弓矢の御用にすることが石見産銀掌握の目的なので、ほかのことには贅沢には使うなと元就が言い残したと書いてあります。銀山の銀がなぜ必要であったか。その大きな理由の一つが、軍事費の捻出であるということは、こうした当時の史料から見て

も、間違いのない事実であろうと思われます。

16世紀後半の毛利氏は、戦争に次ぐ戦争の時代で、特に織田信長と全面戦争をして、さらには、豊臣政権下のさまざまな、例えば、四国に攻めていく、九州に攻めていく、後北条を関東に攻め、最後は朝鮮半島まで行かないといけない。この連続する軍事費の捻出をいかにして実現するのかというときに、おそらくは、この石見銀山の銀が、大変重要な役割を果たしたであろうと、容易に推測できます。ただ問題となるのは、それらの銀がどうやって実際に毛利氏の手元に届くのかということです。レジュメの下のほうに書いてある内容を参照していただきたいと思います。

これは、慶長5年、1600年の「石見国銀山諸役銀請納書」という、「吉岡家文書」に残された史料から関係する税金の名前および、その額である銀の枚数を列挙して書き出してみたものです。慶長5年、1600年9月に関ヶ原合戦があります。毛利氏が中国地方の8カ国ともいわれる広大な範囲を、分国として支配していましたが、この関ヶ原合戦に敗北することによって、防長2カ国、現在の山口県に一気に圧縮されて、移封されるという激変のとき、まさにその転換期のもので、その年、慶長5年の当初に、毛利氏が石見銀山から取る予定であった税額がわかる史料です。これを次に入ってきた徳川が直轄領とした際に、何をこれまで納めて、何がまだ納められていないかという引き継ぎをしなければならぬので、そのときに、どういう税金があるかというのを全部列挙してあるという史料が、この「石見国銀山諸役銀請納書」です。

特徴的なもので言うと、例えば、駄賃役、あるいは酒役、京見世役などという言葉がしばしば出てくるのがわかると思います。駄賃役とか、酒役というものは、名前から容易に想像ができるように、物を運んだり、商業活動、金融活動をしたりすることに伴って納められる、いわゆる流通課税であると考えられます。ほかに

間歩役など、枚数がかなり多いものも、基本的に請負によってまとめた額を、ある請負を担った大規模な商人のような存在から、まとめて毛利氏が受け取るというかたちです。こういう金額、これらを全部足して最後に出てきた枚数が、2万3,000枚と書いてあり、これが全部合わせて毛利氏が受け取るはずだった銀の枚数ということになります。

次に、「毛利家文書」にある「銀山納所高辻」という、よく知られた史料です。天正9年、1581年ですから、慶長5年から20年ぐらい前の史料なので、年代差がありますから、厳密な話とはもともと難しいのですが、たまたまこの史料に、銀の換算の仕方が類推できる情報が入っているので、これを基に計算をしてみたというのがレジュメ3ページ目の上にあるものです。この天正9年の「銀山納所高辻」のなかで、この天正9年には、合わせて、銭にして33,072貫、これが毛利氏に納められる額だと書かれています。これを銀に直すと、115貫752匁。それをまた銀の板に直すと、2,692枚であると書いてあります。これを逆に使っていくと、天正9年段階で毛利氏が銀をどのように換算していたかということ、銀1枚あたりが約43匁であることがわかりますから、江戸時代以後も一般的にずっと使われていく銀1枚の重さと齟齬がない。これを銭に直すと、約12貫285文です。ちょっとはしたが出ますけれども、このぐらいの金額です。

もっともこの時期の通貨というのは、価値の変動が非常に激しくて、撰銭というのもよく知られていますが、そもそも銭の価値が大きく変化して低下していくような時期ですので、厳密なことではないです。あくまで目安だということをご了解いただきたいのですが、この「銀山納所高辻」を基にして、さっきの銀2万3,000枚を計算すると、お金にすると28万貫ぐらいです。28万2,651貫ぐらいの数字が出てきます。これも非常に曖昧な大ざっぱな計算ですが、このころ、中世によく使われていた一石一貫換算

にすると、かなり実態とはかけ離れた数字だと思いますが、ほぼ28万石という、目安としてはそんな数字で、いずれにしても、この銀山から毛利氏が受け取ることになっている額が、いかにすさまじい額であるかということがわかります。

たった一つの銀山から28万石というのは、非常に多額であるということがうかがえると思います。肝心なことは、この数字がいかに大きいものだとしても、ここに書いてある税額というのは、いずれも実際に産出される銀の一部に過ぎない可能性が高いということです。ここに出てくる数字は、いずれも毛利氏が受け取る分しか書いてありませんので、これらが銀として納められて、毛利氏の収入になっていくことにすぎませんので、おそらくは、これ以外にも膨大な銀が産出されていたということ、逆にこの史料はうかがわせているのではないかと思います。

毛利氏の銀山支配については、レジュメ6ページ目のところに主な参考文献を載せています。これらはごく一部でありまして、これ以外にもたくさんの研究があります。けれども、今回、主に引用してあるものに限って書いておりますが、このなかに秋山伸隆氏の「戦国大名毛利氏の石見銀山支配」という論文があります。そうした先学の成果を踏まえながら、簡単にまとめるこんな感じだということを、紹介しておきます。毛利氏の銀山支配で重要な役割を果たしたのは銀山奉行。これは秋山氏が仮称として名付けられた役職名だったと思いますが、銀山奉行というのは、当時、毛利氏の本拠地があった、安芸高田郡の吉田郡山にいて、はるかに銀山に向けてさまざまな指示を飛ばしていく銀山担当奉行だといわれる人物で、平佐就之とか、林就長、のちには佐世元嘉といったような人たちが、毛利氏の家臣でありますけれども、重要な役割を果たしていたことが指摘されています。

さらに、銀山代官という、これも史料に出て

こない名称ではあるのですが、現地に派遣されて、現地に常駐していると考えられる毛利氏の家臣として、ここにいます、服部就久とか、生田就光といった人たちの名前が確認できます。平佐就之の「就」も、林就長の「就」も、毛利元就から名前の一部をもらっていると推測をされる人たちで、当時、毛利元就というのは、非常に早い段階から隠居をしております、天文15年ぐらいですから、随分前から本宗家の当主の地位を譲っているという存在です。その毛利元就が自らの手許で育てているといえますか、駆使している側近といえますか、直属の家臣、直臣という言い方もしますが、そうした人たちが、銀山支配に大変重要な役割を果たしているということがいわれてきております。

それから、同時に、服部就久というのは、本城常光の家臣だった人で、この本城氏というのは何者かという、石見国と安芸国にまたがる領主であった高橋氏の生き残り、高橋氏一族です。それから、生田就光という人も高橋氏一族であると考えられまして、この高橋一族というのは、もともと石見国の邑智郡の南部から、安芸国高田郡の北部にかけて存在した領主でした。出雲、石見、安芸、こうした国々の境界領域に、かつて16世紀の初期までは、高橋という非常に有力な一族が支配していた地域があったといわれております。

これが、享禄2年、あるいは享禄3年ともいわれますけれども、毛利氏などによって滅ぼされて、これらの地域も毛利氏が直接的に支配する領域が、一気に広がったということが、これもまたかねてから注目されてきたことです。そのなかに、例えば、生田という地名などが県北にありますけれども（スライド1）、生田就光というのは、ここを名字の地とする高橋氏一族であるということがうかがえる人物です。毛利氏領というのは、この地図の下の方ですね。南の方が毛利の本拠で、この小笠原と書いてある、すぐ北の辺が石見銀山ですので、毛利氏が石見銀山を捉えようかというときには、

このあたりは毛利からみて、非常に重要な場所だと言えるのですが、それ以前、そもそも、このあたりは、石見銀山で取れた銀が、山を越えて運ばれる場合の主要な幹線ルートの一つであったことが推測され、そのあたりを押さえている、いわゆる物流の拠点としての国境地帯を押さえているということが、高橋氏一族の特有の基盤になっていた可能性があって、彼らの力を借りないと、石見銀山を安定的に把握することができなかったということをうかがわせる事実だと思われまます。

毛利氏は、この石見銀山を、すべての時期、同じようなかたちで支配していたのではなくて、特に文禄・慶長期に大幅な改編をして、より以上に膨大な量の銀を把握できるように変えていこうとしたことがわかります。銀山支配の改編という言い方をしていますけれども、例えば、1594年、文禄3年に、銀山改というのをやって、新しく従来とは違う代官衆などを派遣しながら、従来への支配の仕方を大きく変えるような、知行替をやったりしています。1598年、慶長3年には、新しい役人を任命する。吉岡隼人助とか、宗岡弥右衛門尉とか、今井越中守、この人たちはいずれもはっきりとしたことがわからない、いかなる人物であるのかということがなかなかわからない存在ですが、これまでの研究でわかっている範囲で言えば、例えば、吉岡隼人助というのは、和泉国堺が本拠であって、大坂や堺商人に債権を有するような、非常に大きな規模の商人であった可能性があると思います。この点もあとでもう一度、史料で確認してみたいと思います。

こうした外部から入ってきた有力な大商人たちが、重要な役割を果たしながら、毛利氏の銀山支配を支えていく、新たな体制をつくり直していく。その目的は、従来に比べて飛躍的に膨大な量の銀を毛利氏が入手しようとしたためでした。「毛利家文庫」のなかに収められている、これも秋山氏が紹介されたのでよく知られるようになった史料ですけれども、「慶長13年5月

佐世宗孚書案」という、のちの時代に書かれた史料によると、毛利氏支配下の40年間に、毛利氏は毎年銀を5,000枚ずつ入手できていたが、名護屋の陣のあとは、1万から3万枚を毛利氏に納入させていたと書かれています。名護屋の陣というのは、もちろん、豊臣政権が朝鮮半島を攻めるための前線基地をつくった、肥前の名護屋ですが、年代的には、やはり文禄・慶長の時代に、1万から3万枚に変えたと書いてあります。

そのことを具体的に裏付ける史料が、慶長3年の「毛利輝元判物」。これもやはり「吉岡家文書」のなかに残されています。少し読んでみます。「このたび、温泉・銀山納所の儀、貳万貳千枚に相定め候」。これは、今回、温泉津・銀山の毛利氏の直轄領に対して、2万2,000枚の銀を納めるように決めたと書いてあります。2万2,000枚というのは、この慶長3年の段階で、毛利氏が新たに大增税していることをうかがわせるものでして、このときに合わせて、吉岡、宗岡、今井、熱田、惣内、石田のこの6名が、これらの額を納める請負をするというかたちで、役人に任命をされたことがわかります。名護屋陣後は、1万から3万枚を納入させたのだという「慶長13年5月佐世宗孚書案」の記述を裏付ける史料になっていると思います。

この状況、大增税といっても、5,000枚ぐらいたったものが、2万何千枚というように、いきなり税金が上がるということですので、ただでは済まないといえますか、何も起こらないはずはないということが推測されます。慶長4年、さきほどの史料の次の年には、今度は3万枚と書いていますが、額をさらに引き上げて、合計3万枚も納めさせようとしたということが翌年の史料からわかります。

これに対して、地元の人、銀山に住んでいる人たちがどういう対応をしたのかということをおうかがわせる史料もありまして、一つは、慶長5年、「毛利輝元直状」のなかにかこう書いてあります。地下人、現地の人々ですね。地域社会

に住む人々を当時は地下人と称しますけれども、「地下人迷惑せしむの由に候」。当たり前ですけれども、多額の増税を課せられて大変迷惑しているということ。迷惑していると言われたので、じゃあ、仕方がないねということで、2万3,000枚に負けてあげますと言っているのがこの史料だと思います。地下人というのは、現地に住んでいる、おそらく銀山のなかに住んでいる人たちだろうと思いますが、毛利氏も最初から、そんな多額の税金がスムーズに取れるとは思っていなかったと考えられます。それは、この前年、3万枚に増税したときに、「右の内貳万八千枚の儀は、たとえ納所不足候わば六人の者共、弁（わきまえ）にても相調うべきの段、これを聞き届け候」と書いてあるからです。

さきほど出てきた、吉岡、宗岡、今井、熱田、惣内、石田の6人の仕事なのですが、この2万2,000とか、3万とかいうとてつもない数の銀を集めてくるという仕事と同時に、もしも、それが集まらない、納めない人がいるという場合は、この6人の者たちが立て替えることを承諾したから任命したという関係性になっています。これは中世以前には、よくある現象で、代官とか、役人という者のなかに、大規模な金融業者等がしばしば現れてきて、税金は実際には納められていないのに、立て替えによって税金を領主が受け取っているという事例はいくらでもあるのですが、それにしても、この2万8,000枚という、すさまじい額を立て替えられるということ自体が、ちょっと想像を超えているなという感じがします。それだけ、この吉岡とか、宗岡とか、こういう人々というのは、正体不明に近いですけれども、それができるだけのとてつもない財力を持っていたということがうかがえる人たちであろうと考えられます。

でも、それでも、やはり納められないといえますか、追い付かないということで、やむを得ず、毛利氏としても譲歩して、3万枚を2万

3,000枚まで減額してやったということなのですが、それで話が済むかというと、そういうわけにもいかない。慶長5年7月、ですから、関ヶ原合戦の2カ月ほど前ですけれども、この時期につくられた「銀山温泉津御納所之定」という史料のなかにこんな記述が残されています。下線部のところだけ読んでみます。「一、銀山・温泉津地下人等、田舎へ罷り退き候て在宅候の者、聞き立て次第、帰山申し付くべく候」。意味は、銀山や温泉津の地下人たちが田舎に帰ってしまって、そこに住んでいる者がたくさんいるらしい。そういう者がいるということがわかり次第、帰山させると。銀山に戻ってくるように命令をしると言っているわけですね。おそらくは、地下人といわれる人たちが迷惑をして、税金を下げてくれと言ったのだと思いますけれども、それでも耐えられないという場合、どうするかというと、田舎にまかり退くという対応をする者も出てくる。いわゆる、古代の逃亡とか、中世の逃散のような、税金を逃れて逃げていくという人たちが現れてくるということを示しています。

もう一つの下線部にいきますけれども、「かたがた手前を始めとして、谷中へ借（貸）し置き候古借錢の事、免許すべく候」と書いています。古借錢というのは、かつてお金を借りて、まだ返せていないというものであろうと思いますけれども、これはおそらく、その借金を帳消しするという意味では、よく知られている徳政令といいますか、徳政のような措置を執る。これは銀山の谷の中に多額の税金を課せられたけど、払えない。例えばですけれども、払えなくて、立て替えてもらっているという人たちが、最終的に本当に返せなくなってしまうという場合に、その借金を帳消しにするということ、意味しているだろうと思います。これも、やはり実際には払えないのか、払わないのか、わかりませんが、借金をしてでも払うしかないという者も存在したということを示していますので、多額の増税に対する抵抗への対応として、

なんとか帰山させるための手だての一つではないかとも考えられると思います。あまりたくさんは出てこないけれども、このようにちらほらと、多額の大増税に対する抵抗といえますか、対応というのが見受けられます。

吉岡とか、宗岡とか、今井、これは先ほども言いましたけれども、2万8,000枚というすさまじい額の銀を立て替えることができるような存在だった。まず、そのことが一つ、注目される点であろうと思います。

もう一つ、銀山の居住者は、例えば、3万枚も課せられると、田舎へ帰宅した人が多い。この記述は、ただ単に逃げ去ったのではなくて、田舎にまかり退いたという書き方をしています。これはどういう意味だろうかということですね。これが2つ目の点。毛利氏も、やはり減税と居住者の保護を迫られているという事実がうかがえる。課税が重すぎて貧困化しているというケースも当然あるだろうと思いますけれども、増税によってリスクを負いながら、銀山に仮住まいをしてまで稼ぐことのメリットが乏しいというのが、お話をする一番中心的な内容に直接関わっていると思います。この3万枚という数字は、確かにすさまじい数字だと考えられますけれども、しかし、それも先ほどの慶長5年の「吉岡家文書」を見る限り、おそらく当時の総産出量から比べれば、一部であるという可能性が高い。そういう意味では、当時の銀山というのが、いったいどれだけたくさんの銀を産出したのかということの間接的にうかがわせる事実であると考えられます。そのようなことを、この2番目の「銀山支配の展開と毛利氏領国」を通して、少し垣間見ることができたのではないかと思います。

ここでまた、問い掛けだけを投げ掛けてあとでまとめていきます。毛利氏が銀の入手を、流通課税、あるいは請負といったかたちでやっているということ。これはのちの徳川政権に比べれば、はるかに間接的な徴収の仕方だと言えます。だから、銀を完全に掌握するなんていうか

たちとは、とても言えないという、これが毛利氏による銀入手の実態ではないかということが一つ目です。もう一つは、毛利氏が本城氏一族を抹殺したこと。殺戮すると強い言葉で書いていますけれども、一族皆殺しに近いような、大規模で凄惨なことをやっていますので、なぜそこまでして銀山の確実な掌握にこだわる必要があったのかということ。それから、銀山の地下人が単なる逃亡ではなく、田舎に帰るという表記を伴ったかたちの逃亡を可能としているのは何であるのか。こういったことを次の3番目のところで考えてみて、それに基づいて、もう一度、毛利氏がいったい何をどのようにして銀を捉えているのかということを考えてみたいと思います。

Ⅲ 16世紀後半の石見銀山

3番目のところにいきます。16世紀後半の石見銀山には巨大な都市が出現しているのではないかという話です。これは銀山というところが、いわゆる銀鉱山という意味では、当然、人がいないと銀が掘れませんので、銀を採掘するための職人たちとか、いわゆる山師とかいわれるような技術者たちが集まってくる。労働者たちが集まってくる。それはどこの銀山でもそうだろうと思いますけれども、それに伴って、彼らの生活を支える、恒常的にそこで生活できるような生活必需品をもたらしてくれる、つくったり、あるいは外部から運んだりする、そのような関連する人たちが次々とこの場所に集まってきた。そういう可能性があると思います。

当時の物流のあり方は、中世ですので、史料的には解明することが非常に難しいですが、例えば「日御碕神社文書」という、出雲大社の西側、島根半島の一番西の端に日御碕神社という神社がありますが、この日御碕神社が残した史料のなかに、1550年から1560年前後あたりで、島根半島に「唐船」が来る可能性が非常に高いという記述が出てきます。それから、当時の史料にいわゆる「北国舟」というのが出てきま

す。唐船というのは、見ただけでこれは唐船だとわかるという意味では、中国の遠洋航海用のジャンク、つまり、中国の明の沿岸地域を中心に活躍していたジャンクのことであろうと思われます。つまりは、中国大陸の東のほうの海域を主たる活動の場としているような船が、日本海のなかにも入ってきているということをおぼろげにうかがえます。それから、北国船というのは、いわゆる北東日本海、北陸から東北にかけての日本海側で活躍していたタイプの船だといわれているもので、この北国船も次々と島根半島のあたりに現れているということが、この「日御碕神社文書」からわかるわけです。

それから、少し時代が下るのですが、史料に確認できるのは、天正年間ですから、1570年代ですけれども、島津家久という、薩摩国の有名な戦国大名の島津氏が、支配を確立していくときに中心的な役割を果たした兄弟、義久、義弘、歳久、家久、四兄弟のなかの一人です。この人が、天正3年、1575年に、伊勢神宮に参詣をする。そのときの日記を書いておまして、その旅行記としてよく知られている史料が、『家久君上京日記』です。このなかに、次のような記述があります。家久は、帰り道、山陰海岸沿いを戻ってきて、浜田から平戸まで船で行って、薩摩に帰るのですが、浜田、温泉津、あるいは石見銀山に、膨大な数と言っていいぐらいの薩摩半島、および大隅国の人々が、たくさんいたことがわかります。おそらくは、家久を迎えに来たのではなくて、ずっとそこにいると考えられる人たちが、この日記のなかにたくさん出てきます。この島根半島とか、浜田とか温泉津、このあたりは、いずれも石見銀山との深い関わりのある地域であると考えられます。

このあたりに、こういう遠隔地からの、従来ならば、まず来なかったであろうと思われるような船が、次々と現れてくるというのが、この時代の特徴と考えられます。なぜそうなるかということ、まず間違いなく、それは銀を求めて

やってくるのであろうと推測される。具体的な取引等の中身というのは、まったくわからないですけれども、そういう明らかに従来とは違う現象が起こる。“モノ”や“ヒト”の流れが、全体的に大きく変わっていったことをうかがわせていると思います。

断片的な証拠しかないのですが、近年までの発掘の成果によりますと、例えば、朝鮮陶磁という、朝鮮半島特有の陶磁器類がありますけれども、それらはどのように日本側に流れてくるか。山陰海岸は歴史的にも朝鮮半島との関係性が深いので、いろんなかたちの入り方をしているのですが、明らかに16世紀末になると、そうした注文品も含めた朝鮮半島由来の陶磁器類が、山陰海岸では、石見銀山と富田に限定されて、集中的に残っていくという現象が見られます。これは外から来た陶磁器の例です。それから、国内でできた備前焼が展開をしていくあり方、この備前焼も非常に広い範囲に展開する焼き物ではありますが、16世紀後半になると、山陰地域では、石見銀山と富田に限定されていくというように、大きな物流の変化というのは、こういうかたちでかなり巨大な拠点をつくりあげていく。それは、銀の産出を大きな契機として、従来から存在した“モノ”の流れが大きく変化していつているということをうかがわせているのではないかと思います。これは“モノ”の面、あるいは船の面という断片であります。

一番知りたいのは“ヒト”の面ですが、人間の移動はなかなかわからない。史料が断片しかないので、断片のなかの一部を引っ張り出してきたというのが、このレジユメに列挙してあるような銀山の居住者たちであります。例えば、早い時期では、備中の国から「フキヤ与三左衛門」という人が来て住んでいるらしいというのがわかりますし、「ハカタ」というのも見られますが、もともと博多の商人が石見銀山を発見したといわれますから、博多とのつながりも非常に深い。これも、間違いなことだと思います。それから、同じく備中ですがけれども、三宅

という家があります。「三宅三郎左衛門」という人は、天正10年、1582年の、安芸国の厳島神社の廻廊棟札に名前が記されています。安芸国の厳島神社の廻廊のところに、誰が寄進したかという名前が書いてあったものを記録したものが残ってしまして、そのなかに、かなりの数の石見銀山の居住者の名前が出てくる。これも以前から指摘をされてきていることだと思いますけれども、要するに瀬戸内海側と非常に深いつながりを持っているということが推測されます。

この三宅氏については、おそらく同族と思われるかもしれませんが、「連嶋大江三宅与左衛門尉」という人物が、石州銀山の居住者という肩書で、やはり厳島神社の廻廊の棟札に名前を残しております。同じ連嶋の出身者には、「有本孫兵衛尉」という人物が、やはり厳島神社の廻廊に「石州銀山之住」として名前が書かれています。連嶋というのは、岡山県、備中の連嶋、かつては、海に浮かぶ島で、高梁川の河口部分ですから、そこに運ばれてくる内陸部からの物資を集めて、それを都のほうに運んでいくときに重要な役割を果たしたのではないかと考えられる場所です。今でも連嶋に行けば、この三宅姓のお墓等が残っているということです。

三宅というのは、どこの人かということ、伝承ではありますけれども、和泉国の堺の三宅氏がよく知られていて、堺とのつながりを、以前から指摘されてきています。さらに、この三宅氏については、島津氏の関係の史料のなかに、備中連嶋の三宅壱岐守国秀という人物が、永正年間に琉球への侵攻を計画し、島津氏によって、南九州の薩摩半島の先端に坊津という重要な港がありますが、この坊津で討たれたと記されたものがあります。あれは島津氏によってでっち上げられたものというのが実態だと思いますけれども、島津氏が侵攻を防いだのだということも琉球王国に対して報告したものです。

このように、三宅氏というのは、かなり広い範囲で、海を介して活動する貿易にも携わるよ

うな大きな勢力、商人ではないかと思われる一族です。こうした家が、石見銀山に一人二人ではないのです。何人もこの三宅姓が出てきていて、石見銀山に居住している。彼らは、本拠地は連嶋の備中だったり、堺であったりする可能性もあるだろうと思いますけれども、石見銀山の居住者のなかにそういう遠隔地の人が他にもたくさん見られるという特徴があります。

例えば、津ノ国とか、摂津国ですけれども、「津ノ国五郎左衛門」とか、「住吉や弥三右衛門」とか。住吉というのは、堺のすぐ北にある住吉大社のあたりの地名ではないか、そのようなことを推測させるような屋号が見られるわけです。さらに先ほど出てきた吉岡隼人助という、多額の税金の立て替えが可能な、想像を絶するような大商人で、おそらくは堺の出身者と推測される人、このような人たちが、ほかにもたくさんいるのではないかと思います。今井という名前も今のところはまったく根拠がたどれないのですが、堺の商人の今井家との関係性をなんとなくかがわせるような人です。安原備中という、江戸の初期の銀山開発で特に知られた人物、吉岡出雲も非常によく知られた代表的な鉱山開発者として、徳川家からも重宝された人物になっていきますけれども、安原備中も、やはり同じように、元はその名のとおり、備中の出身であるということがわかります。例えば、石見銀山のなかに残された、当時のお寺の再建をする際に棟札を残しますけれども、その棟札のなかでは、安原備中というのは、備中国の早鳥荘の住人で、石見銀山に居住しているという書かれ方をしています。

当時の多くの人々が、本拠地は別の場所に持っているけれども、実際に住んでいるのは石見銀山であるというかたちをとっていることは、考えてみれば当たり前でありまして、石見銀山に限らず、鉱山というのは、取り尽くしたら終わってしまうので、そこにずっと暮らしていくということを考えて、最初から来る人なんてほとんどいないわけです。あくまでも仮住ま

い。でも、地元で暮らしていくのが非常に厳しいという場合に、一獲千金なのか、生活の糧を求めてなのか、全国の至るところから、多くの人が石見銀山に集まってくる。彼らは仮住まいなのです。そこにずっと骨をうずめようなんていうのは江戸時代の話で、何かあれば逃げ帰る。田舎へ逃げ帰る。これは先ほどの史料にあったように、多額の税金を課せられて、要するにメリットよりもデメリットが上回ってしまうという場合には、自分の本拠地に帰るとするのは、当然の選択であるという居住の仕方をしてきた可能性が高い。16世紀段階は特にそうだと思います。

江戸時代になりますと、やはり次第に定住化が義務づけられ、宗門改帳等で、どこに住むのかということを経那寺も合わせて固定的に捉えられていきますが、16世紀段階では、そんなものはないわけですので、何かこれはまずいなと思ったら、一刻も早く逃げ帰るという選択肢は当然あり得たという時代ではないかと思えます。この時代の痕跡をたどると、当時のどの時代までさかのぼれるかわかりませんが、発掘調査の近年の成果などを見ると、何度も何度も造成をし直して、おそろしいぐらいの数の人が、銀山の山々にひしめき合うように暮らしているといったような風景が浮かんでくるわけです。

レジュメの最後に銀山の図を載せています。この線は、江戸の初め以降の柵内の柵の範囲です。中世にはこんな柵はないと思います。一応、どのぐらいの範囲に、いわゆる江戸の初期ぐらいから、銀山町というのが展開しているのかというのを知る目安として線を書いたということです。これが山吹城です。繰り返し出てきている山吹城です。山吹城というのは、当時の絵図のなかに出てきます。おそらく日本で一番早い段階につくられた国絵図、16世紀段階の情報を反映している唯一の国絵図ではないかと思われる「石見国絵図」を見ると、石見銀山のなかの谷のところに、いっぱい家が描いてあるのがわかります。

これは山吹城（スライド2）ですけれども、お椀を伏せたような非常に険しい山城で、攻めるのも難しそうな山城です。この山吹城の向かい側に仙ノ山という山があって、このあたりが、銀が最初から採れたところ。「石金」というのは、現在は石銀と書く地名ですが、当時はこのようにも書いています。石金というのは、もう名前を見ただけで露頭があったと思われるような地名ですけれども、ここからは初期の段階の、非常に古い段階の銀の採掘の間歩等が多数、確認されています。この石金以外にも、例えば、栃畑谷とか、昆布山谷とか、あるいは大谷、それから休谷とか、下河原とか、それぞれ谷のなかで、ある程度まとまりを持って請け負うかたちで、銀がまとめて納められるといったかたちが、毛利氏時代であろうと思われます。

大森の町はこの北のほうにあります。今ではこのあたり、ほとんど家はないように見えますが、おそらく昔は大変たくさん家が並んでいたと。何段にもわたって石垣が築かれて、ひしめき合うように人々が暮らしている様子がうかがえます。こういう過密都市と言っていいような、山にへばりつくようなかたちで展開していった、おそらく非常に流動性の高い仮住まいの巨大都市であったのが、16世紀段階の石見銀山ではないかと思っています。

しばしば史料に「出土（だしつち）」という地名が出てきて、これも何度かは崩れて、今、土石流の災害等が深刻なので、お話をしにくいのですが、鉱山の開発地では、おそらくたびたび水が原因の土砂崩れのようなものもあったと思われる。そういう場所に張り付いてでも暮らしていく。それでもメリットがあるというのが、石見銀山の16世紀段階の姿ではないかと推測されます。当時の史料情報が数値化できるようなものではありませんので、わからないのですが、17世紀の初めぐらいには、全部で2万6,000軒もあったという記録が、江戸時代以降の記録に出てきます。もちろん、のちの記録な

ので、どこまで信じていいかわからない、という考え方もありますが、現地の様子や、あるいはこうした断片的な史料から間接的に推測できる当時の状況を考えれば、2万6,000軒というのは、あながち架空のあり得ない数字とは思えない、という感じがいたします。

都市としての求心性、これも、これだけ多数の人が集まってくるということを、逆の意味で、まったく違う角度からうかがわせるものではないかという事例をいくつか紹介していきたいと思います。16世紀の後半の石見銀山、史料はほとんどありませんが、例えばこういう史料があると教えてもらったことがありました。池坊専栄という人がいまして、この人は生け花の池坊ですが、三十一世の池坊の当主といいますが、のちの家元にあたるといいますが。この人が、立花という、今でもあると思いますけれども、そのやり方を伝授したことを示した史料のなかにこんな言葉が出てきます。永禄10年というのは1567年ですね。この永禄10年の卯月ですから、4月のときに専栄さんが書いています。

「右、立花の条々は、家の秘本」、要するにほかには口外してはいけないという秘本ですね。「家の秘本たりといえども、御執心深きにより、和泉堺甲小路」、「きのえしょうじ」と読むのでしょうか、「きのえこうじ」と読むのでしょうか。「芝築地弥右衛門尉殿へ石州銀山において相伝せしめおわんぬ、ゆめゆめ他見すべからざる者なり、秘すべし秘すべし」と書いてあります。これは立花の伝授という、生け花の、華道の非常に重要な秘伝について、どうしても知りたいと求められたので、堺の商人か何かと思われる、芝築地弥右衛門尉なる人物に伝授した、ということを書いています。問題となるのは、それがなぜか石見銀山であるのかということです。石州銀山でこれを伝授したと書いてある。これは文言どおり、言葉どおり考えれば、池坊専栄が石見銀山にいた可能性がかなり高いと推測できる史料だろうと思います。華道の本流に位置するような、のちの本流といわれるよう

な人たちが、都の京都ではなくて、石見銀山でどうも活動をしているらしいということがうかがわれると思います。ちなみに、この池坊専栄さんの絵が残っております。

それから、これもよく引用されることが多いものです。大変すぐれた作品だということで、重要文化財になっているものですが、先ほどの高橋氏一族関係の地図に「阿須那」というところがあります。広島県と島根県の県境をまたいだすぐ北側の阿須那というところ、県境のあたりです。この阿須那に賀茂神社という神社がありまして、阿須那というのは、いわゆる高橋氏の本拠として重要な場所で、藤掛城という城がすぐそばにあります。だから、高橋氏一族にとっても、特に重要な神社が賀茂神社ですが、その神社に奉納された絵馬が、レジュメにある2枚の絵馬です。今は、島根県の古代出雲歴史博物館に寄託、所蔵されているものですが、そこには「大宅朝臣就光という人物が、永禄12年8月に寄進・寄付をして、奉納をした」と書いてあります。大宅姓というのは、高橋氏一族の姓であります。就光の「光」というのも、この高橋氏一族の家の字でありますので、この人物が高橋氏一族の生き残りであるということは前々から知られていたことですが、先ほど紹介したように、生田就光は、石見銀山の代官であるということです。この石見銀山の代官、毛利氏の代官がこれを寄進した、奉納したという意味で重要だと思うのですが、これ以外にも、この絵馬の重要な情報として、絵を描いた人の名前が書いてあります。

これも、先ほど読んだ文章のなかに書いてありますが、狩野治部少輔というのは秀頼という人で、狩野秀頼という人物が描いた絵であることがわかります。この狩野秀頼という人は、いわゆる狩野派の狩野元信の子どもの可能性が高いといわれていると思います。系譜関係に諸説はありましたが、本流とは言えないけれども、狩野派のなかの中心に近い人物で、いくつか優れた作品も残していることが知られている人で

す。この人が先ほどの絵馬を描いたということがわかりますし、同時にこれは別の記録にしか残っていない、現物も残っていないのですが、石見銀山の山のなかにあった長楽寺という寺の厨子の絵を描いているということがわかります。これは同じ永禄12年に描いております。ですから、この1569年という年に、狩野秀頼は石見銀山のなかの寺の絵と、石見銀山から近い阿須那にある賀茂神社の絵も描いているということがわかります。これ以上はわからないのですが、この2つの画業を見ると、狩野秀頼がはるばる京都で注文を受けて描いたということもないとは言えませんが、狩野秀頼自身が石見銀山に来て、さまざまな注文を受けて、そこで作業をした可能性、もちろん、工房を持っているでしょうから、その関連の人たちを連れてやってきて、そこで作業をして発注に応じていたという可能性も十分考えられる。これは、確証はないですけれども、あり得ない話ではないということだと思います。

また、出土品には肥前の天目茶碗などがありますが、石見銀山遺跡からは、国内、国外から、たくさんの器類が膨大に発掘されています。残念ながら、後世に造成し直しているということで、細かな位置付けというのがなかなか難しいのだと伺っています。しかし、特に16世紀の終わりから17世紀の初め、肥前陶磁ですから江戸の初期だと思いますが、このあたりのいろいろな器を見ると、おそらく花生けであるとか、茶器であるとか、そうしたものがたくさん出てくる。いずれも、石見銀山というのはただの鉱山都市として職人たちが作業をする工房であるというだけでは済まない、多くの関連する生活物資を生産したり、供給する役割を担う多くの人々が集まってきたり、さらには、多くの人々が文化的な営みをする中で、こうした、石であるとか、器を使って、茶道であるとか、華道であるとか、こうしたものをたしなむ人々もたくさん現れて、石見銀山というのは、仮住まいではありませんけれども、今日想像するよりも

はるかに大きな巨大都市がそこに存在していた可能性を、いろいろなところからうかがい知ることができるのではないかと考えております。

おわりに

1550年代に、なぜあれだけ人間の血を流してまで、激しい戦争をして奪い合わなければならなかったのか。あるいは、16世紀の終わりに、なぜ田舎に帰るといったような形で、人々が逃亡していくのか。あるいは、とてつもない、想像を超えるとしか言いようがないような、莫大な立て替えが可能な超巨大商人が、なぜ16世紀後半の石見銀山に現れたのか。そういうことを踏まえて、毛利氏が何をどのようにつかまえようとしたのかを考えていかなければいけないのではないかと。

石見銀山をめぐる激しい争奪戦は、1550年代ぐらいに集中的に現れ、あとは毛利氏がそこをがっちり押さえていくということで、ほかの勢力が入る余地がないかたちで、40年間、治めていきます。これはおそらく、領国支配を展開していくときに、こうした巨大な都市をいかにして把握するかということが、領国全体を支配するうえで大変重要な意味を持っていた可能性が高いということだと思います。人々の広域的な移動と交流が、それを裏付けているし、同時にその大きな要因ではないかと思っています。単に巨大であるというだけではなくて、移動が非常に激しいということだと思います。これは鉱山特有の現象だろうと思いますし、石見銀山遺跡のなかに16世紀段階のお墓が少ないということが、最近ではよく指摘されますが、それは、江戸時代以降と16世紀段階の本質的な違いであって、人々がそこで骨をうずめて、のちのちの後世まで供養を受けようというつもりは、多分、最初はないんだろうと考えられます。それが、お墓がない理由ではないかなと思います。

それから、地下人逃亡が容易に起こり得るといっても、やはり銀山居住者の多くが仮住まいで、いざとなったら、本拠地に逃げ帰ることを

前提に暮らしているからであるということをおうかがわせています。ですから、毛利氏がそんな人たちを支配するのは、大変なこととして、間接的にやらざるを得ない。一人一人つかまえようとしても、現実的に不可能な、非常に難しい条件のなかで、確実にこれだけは入手するという仕組みをつくらうとしているとうかがわれます。

今日の話の趣旨をまとめておきます。石見銀山の激しい争奪戦というのは、必ずしも、銀そのものを取りたいからというだけではない。銀を取りたいのは前提ですが、それだけではなくて、列島内外の各地と独特なかたちで結び付いた新しいタイプの中核的な都市を、いかにして確保できるか。それを確保しないと、そこにつながるさまざまな人々の地元とのつながり等もありますので、領国全体を支配することが非常に難しい。どうしても押さえておかなければならない。

尼子氏も、大内氏も、石見銀山を失って、比較的早い段階で滅びてしまうというのは、そのようなことと関連性がある可能性をおうかがわせています。これがおそらくは、毛利氏が本城氏一族を殺戮してまで銀山を取りたいと考えた理由ではないかと思えますし、これ以降、戦乱がどんどん大規模化して、統一政権の成立が促されてくるということも、こうした広域的な物流という従来にない新しい“モノ”や“ヒト”の流れのかたちが出てきたために一層促された。統一政権が出てこなければ治められないという状況を生み出す、一つの要因を成している可能性があるのではないかと。今日の話は、仮住まいの巨大都市をいかにして押さえるか。押さえないと、毛利氏が存立基盤を確立していけないのだという、非常に難しい選択肢の狭いなかで、なんとか毛利氏が試みた銀山支配の狙いとか、あるいはその手法について推測を交えて話をさせていただいたというものであります。ご清聴いただき大変ありがとうございました。

(拍手)

毛利氏と石見銀山

長谷川博史（島根大学）

はじめに

毛利氏にとって、石見銀山の掌握とは、何を目的とするものであったのか？

毛利氏にとって、石見銀山の掌握とは、何を掌握することであったのか？

⇒単なる富の獲得だけではないのではないか？

⇒間歩の掌握？ 産出される銀の直接的入手？ それらがどこまで可能か？

= 貿易利権の獲得、軍費の調達に加え、もう一つの重要な理由について

※「石見銀山」の呼称について = 今回は便宜上、佐摩銀山を石見銀山と呼ぶ

16c後半の「石見銀山」は、佐摩銀山だけではない（秋山2003）

佐摩銀山は、毛利氏が直轄支配（豊臣政権の直轄支配・共同管理ではない）（同上）

I 毛利氏による銀山の掌握過程

(1) 石見銀山の再開発と争奪

1527年（大永7） 石見銀山の再開発 →以後、基本的には周防国大内氏が銀山を支配

1533年（天文2） 灰吹法の開始

1551年（天文20）の政変 大内義隆の自害 →陶晴賢（隆房）が銀山を直接支配

(2) 毛利氏への荷担

1553年（天文22）10月 吉見正頼が挙兵

1554年（天文23）5月 「防芸引分」 = 毛利氏が反大内氏（反陶晴賢）方へ転じる

8月 吉見正頼・陶晴賢・益田藤兼が和談

防（大内義長）・雲（尼子晴久）が和談したので余儀なく和談

（『閩閩録』148・下瀬七兵衛1）

福屋 = 吉見 = 吉川 = 毛利 ⇔ 大内・陶 = 益田 = 小笠原 (= 三隅 = 石見銀山) = 尼子

1555年（天文24）10月1日 厳島合戦

1555年末～1556年初頃 山吹城督が毛利方へ転じる = 大内氏の銀山支配の終焉

福屋 = 三隅 = 周布 = 出羽 = 口羽 = 佐波 = 石見銀山 = 吉川 = 毛利

⇔ 大内 = 小笠原 = 尼子

(3) 尼子氏による石見銀山の奪取と毛利氏による奪回

1556年（弘治2）3月～ 尼子晴久が石見国へ侵攻（『熊谷家文書』131）

7月 「忍原崩れ」 = 毛利方に打撃（『毛利家文書』636）

8月 山吹城が尼子氏によって制圧される（『閩閩録』168益田五郎兵衛2）

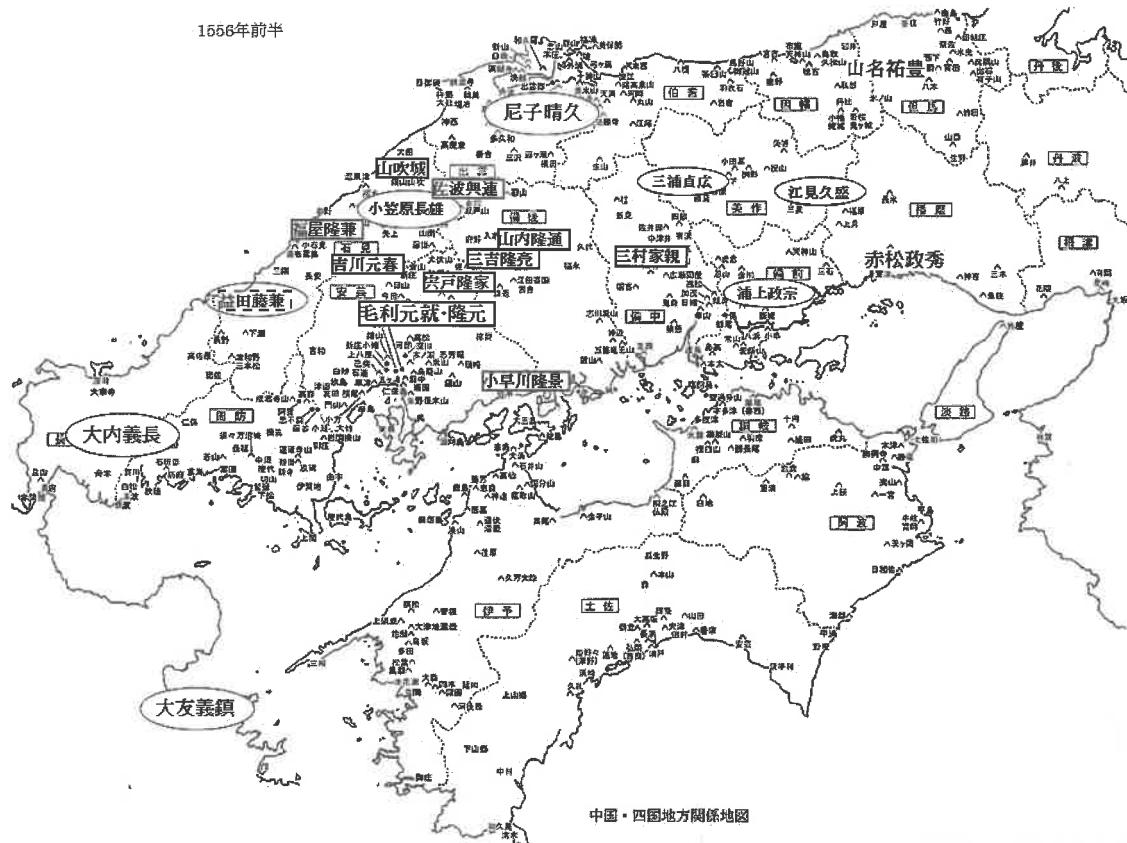
1557年（弘治3）4月3日 大内氏滅亡

1559年（永祿2）8月22日以前 温湯城開城 小笠原氏が毛利氏に従属

1562年（永祿5）6月頃 本城常光（尼子氏の山吹城城督）が毛利氏に投降

11月 毛利氏が出雲国において、本城氏一族を抹殺

⇒石見銀山をめぐる激しい争奪戦争が、1550年代に集中しているのは何故か？



II 銀山支配の展開と毛利氏領国

(1) 銀山支配の目的と銀入手の実態 (秋山2003)

元龜2年(1571)6月26日 毛利氏御四人連署書状(『毛利家文書』840)

恐れながら言上つかまつり候、温泉・銀山御公領の事、この間、洞春(毛利元就)様、仰せ付けられ候ごとく、少しも自余の御用につかまつられず、御弓矢の御用にせらるべく候、堀口・町屋敷・通役・送馬以下、誰々訴訟つかまつり候とも、御同心あるべからず候、その上、洞春様、御手次のごとく仰せ付けらるべき事、真実の御法度にも成るべく候、(以下略)

※毛利元就 元龜2年6月14日歿

慶長5年(1600)11月18日 石見国銀山諸役銀請納書(『吉岡家文書』)

今井越中・宗岡弥右衛門・石田喜右衛門・吉岡隼人 → 大久保十兵衛・彦坂小刑部

間歩役 8058枚	汲銀役・炭役 6000枚	銀山本口屋 2000枚
銀山谷中駄賃役 600枚	石金ノ酒役 350枚	京見世役 160枚
坪ノ役 130枚	蔵泉寺畠年貢 9枚	坂根谷にて銀ゆり場役 8枚
温泉津湯役 4枚28匁	同所京見世役 5枚	同所酒役 18枚
同所小濱津にて酒役 3枚	同所本口屋 140枚	同所小龍にて釣役 3枚
中通銀山近辺駄賃場役 165枚	西田ヨリ銀山迄駄賃役 290枚	
佐波ヨリ銀山迄駄賃役 100枚	大田ヨリ銀山迄駄賃役 200枚	
仁万浦釣役 1枚27匁	ともかいわや・まじ両浦釣役 4枚	

合18,249枚12匁
 銀山六谷地銭 2977枚29匁
 諸国ヨリ上ル米役・万浮役 1773枚2匁
 「惣合」23,000枚定高辻

※銀1枚=43匁=約161.25g 1匁=3.75g 1000匁=1貫

天正9年(1581)7月5日 **銀山納所高辻** (『毛利家文書』346)
 此年中合銭33072貫 此銀115貫752匁 板ニシテ2692枚

→銀1枚 = 約43匁 = 銭約12貫285文
 →銀23,000枚 = 銭約282,561貫664文 (一石一貫計算で約28万石)
 = 軍用資金としての銀、流通課税を介した間接的な銀入手 (にもかかわらず膨大な税収)

(2) 毛利氏の銀山支配体制

◎「銀山奉行」(秋山2003)

平佐就之(天正10年以前頃) → 林就長(天正10年代以降) → 佐世元嘉(慶長3~5年)

◎「銀山代官」(長谷川2013・2015)

服部就久(本城常光の旧臣) 生田就光(高橋氏一族)

※高橋氏 石見国邑智郡南部から安芸国高田郡北部の有力領主(岸田1983)

1530年(享禄3)頃に毛利氏等によって滅ぼされた

尼子氏支配下の石見銀山山吹城城督の本城常光も高橋氏一族

※高橋氏旧領 毛利氏本拠を通る内陸部ルートの要地、久喜・大林銀山の存在

◎支配体制の改編

1594年(文禄3)「銀山改」= 検地に基づく知行替(「豊栄神社文書写」「清水寺文書写」)

= 新たな「銀山代官衆」南湘院・高須元与・成君寺・飯田彦兵衛

1598年(慶長3) 新たな「役人」を任命(田中1994・松岡2002)

吉岡隼人助・宗岡弥右衛門尉・今井越中守・熱田平右衛門尉・惣内吉兵衛尉・石田喜右衛門尉

└ 吉岡隼人助は、和泉国堺に本拠を持ち、大坂・堺商人に多額の債権

◎1598年(慶長3)の増税

※40年間は毎年銀5000枚、名護屋陣後は1~3万枚を納入

(毛利家文庫22諸臣32「慶長13年5月佐世宗孚書案」)

慶長3年(1598)5月13日 **毛利輝元判物** (「吉岡家文書」)

〔^(海峽対面ハ書) (墨引) 佐世石見守とのへ 〕

このたび、温泉・銀山納所の儀、式万式千枚に相定め候、それにつき当役人六人の者共の申す子細、聞き届け候、然る間、相残る谷々の催士六人の事、右の役目これを相除き、当時の下代、六人に対し一円にこれを任せ置き候、かの納所、出入り無きの様、申し付くべく候、先年銀山改の時、催士屋敷分、替給地として遣し置き候つ、この段においては 別儀あるべからず候条、以来の儀、何篇馳走せしむべきの由、申し聞かすべく候なり、

慶三 五月十三日 ^(毛利輝元)
(花押)

1598年 22,000枚賦課 → 1599年 30,000枚賦課 → 1600年 23,000枚賦課

慶長4年(1599)2月7日 **佐世元嘉書状** (「吉岡家文書」)

今年、銀山・温泉津御納所高辻の儀、参万枚に相定め候、右の内式万八千枚の儀は、たとえ納所不足候わば六人の者共、弁(わきまえ)にても相調うべきの段、これを聞き届け候、 (以下略)

慶長5年7月5日 **毛利輝元直状** (「吉岡家文書」)

銀山公用の儀、去年大段の儀について、相調わず、地下人迷惑せしむの由に候、然れば当年の儀、式万三千枚ニ、今井越中守・吉岡隼人・宗岡弥右衛門両三人へ預け置くべきの由、申す通り、聞き届け、 (以下略)

慶長5年7月6日 銀山温泉津御納所之定 (「吉岡家文書」)

(前略)

一、銀山・温泉津地下人等、田舎へ罷り退き候て在宅候の者、聞き立て次第、帰山申し付くべく候、もし承引なく候わば、注進次第堅く申し付くべきの事、
 一、かたがた手前を始めとして、谷中へ借(貸)し置き候古借錢の事、免許すべく候、もちろん惣の者共借(貸)し置き候古借錢の儀も、同前たるべく候、(以下略)

= 吉岡・宗岡・今井等は、28,000枚もの銀を立替可能な圧倒的な財力を有したこと

銀山居住者は30,000枚賦課に抵抗し、「田舎」へ帰宅した者も多かったこと

そのため毛利氏は税額を減らし、徳政も命じて居住者を保護せざるをえなかったこと

⇒毛利氏の銀入手が流通課税と請負に依存していること (完全には掌握できない実態)

毛利氏が本城氏一族を殺戮してまで銀山の確実な掌握にこだわった理由は何か？

地下人の逃亡を可能とする条件は何か？ 「田舎」に帰るといふ表記が意味すること

Ⅲ 16世紀後半の石見銀山

(1) 巨大な都市の出現 —銀のもたらす列島社会の変容—

◎広域的・日常的交流の飛躍的拡大

唐船・北国船・南九州の船の相次ぐ着岸 (「日御碕神社文書」「島津家久上京日記」)

◎新たな中核的物流拠点の形成 山陰における陶磁器出土状況の激変

・朝鮮陶磁 16c前半以前 灰青沙器を中心に山陰各地から多量に出土

→ 16c末 等々屋・彫三島・蕎麦茶碗など注文品 = 石見銀山と富田に限定

・備前焼 14c～16c初頭 山陰各地から出土 → 16c後半 石見銀山と富田に限定

(2) 銀山居住者たちの実像

フキヤ与三左衛門「生国備中」(「高野山浄心院姓名録」)

ハカタ与三左衛門 天文7 (1538) (「高野山浄心院姓名録」)

備中道阿弥三郎 天文9 (1540) (「高野山浄心院姓名録」)

三宅三郎左衛門尉 天正10 (1582) (「巖島神社廻廊棟札銘」)

津ノ国五郎左衛門 天正13 (1585)「昆布山出し土」(「高野山浄心院姓名録」)

連嶋大江三宅与左衛門尉 天正15 (1587)「石州銀山之住」(「巖島神社廻廊棟札銘」)

連嶋西浦之内有本孫兵衛尉 天正15 (1587)「石州銀山之住」(「巖島神社廻廊棟札銘」)

服部和泉屋 天正15 (1587)「昆布山」(「高野山浄心院姓名録」)

三宅弥三郎久吉 天正16 (1588)「昆布山住」(「巖島神社廻廊棟札銘」)

三宅三(与)右衛門 天正17～19 (「巖島神社廻廊棟札銘」「高野山浄心院姓名録」)

三宅壱岐守久重 天正19 (1590) (「巖島神社廻廊棟札銘」「高野山浄心院姓名録」)

住吉や弥三右衛門 天正19 (1591)「枳畑京店」(「高野山浄心院姓名録」)

吉岡隼人助(吉岡出雲) 和泉国堺出身と推測される

安原知種(安原備中) 備中国都宇郡早島荘から石見銀山に来住

= 石見銀山には大量の人びとが流入 杵築商人も様々な商品を搬入 (「坪内家文書」)

博多商人・堺商人の濃密な痕跡

瀬戸内海との密接な交流 居住者たちによる巖島神社・吉備津神社への奉納

安原伝兵衛(備中国からの来住者) 備中連島の海上勢力(三宅氏等)

昆布山・枳畑の石垣群 石銀の過密都市 無数の寺院跡 (17c初には2万6千軒?)

(3) 都市としての求心性

池坊専栄立花伝書（九州大学檜垣文庫資料所蔵）

○瓶に花をさす事、古より有とは聞きはべれど、それは美花をのみ賞して、草木の風興をもわきまえず、只さし生けたるばかりなり、（中略）誠に千草万木猶おおかれば、中々注しもあえかたき物ゆへ、よしなきたわぶれくさ、さのみはと筆をさし置きぬ、比興く、

各口伝これ有り、

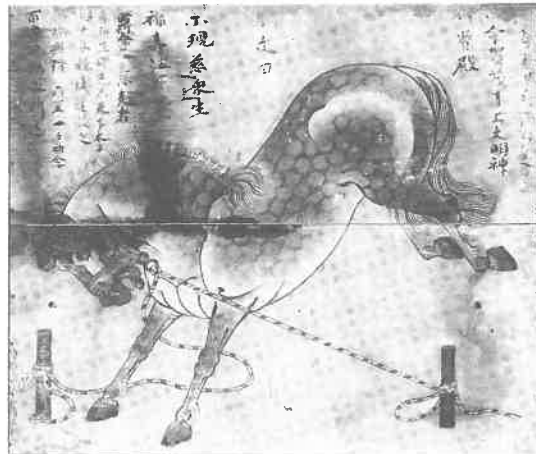
右、立花の条々は、家の秘本たりといえども、御執心深きにより、和泉堺甲小路の芝築地弥右衛尉殿へ石州銀山において相伝せしめおわんぬ、ゆめゆめ他見すべからざる者なり、秘すべし秘すべし、

池坊

専栄（花押）（印）（印）

永禄十年卯月日

楠本宇右衛門殿



《黒毛馬図銘文》

奉掛馬絵両曳之内右也 / 狩野治部少輔（秀頼）筆

□文曰／一切諸願／皆令満足／専祈且那庚子歳、一々諸／願全成就之所也、大宅朝臣／就光公
于時永禄拾二年己巳八月吉日 謹敬白

※重要文化財 賀茂神社・古代出雲歴史博物館寄託

⇒ 1567年 池坊専栄が、石見銀山に滞在、「堺甲小路之芝築地弥右衛尉」に立花伝授

1569年 狩野秀頼が、石見銀山長楽寺厨子絵や阿須那賀茂神社絵馬を描く

出土遺物が示す茶道の隆盛

おわりに ～「仮住まい」の巨大都市～

◎巨大な都市の出現 1540年代からの産銀輸出货量増大により巨大な都市が出現

= 石見銀山をめぐる激しい争奪戦争が、1550年代以降にみられる理由

◎人々の広域的な移動と交流 人の移動がきわめて流動的な隆盛期銀山特有の状況

銀山居住者 = 別の場所に本拠を確保したまま一時的に居住している者が多数存在

= 16cの墓が少ない理由

= 地下人の逃亡が容易に起こりえた理由

= 毛利氏が流通課税や有力商人請負による間接的な銀入手に依存した理由

◇石見銀山の激しい争奪戦は、必ずしも「富」の収奪のみをめぐる抗争とは言えない

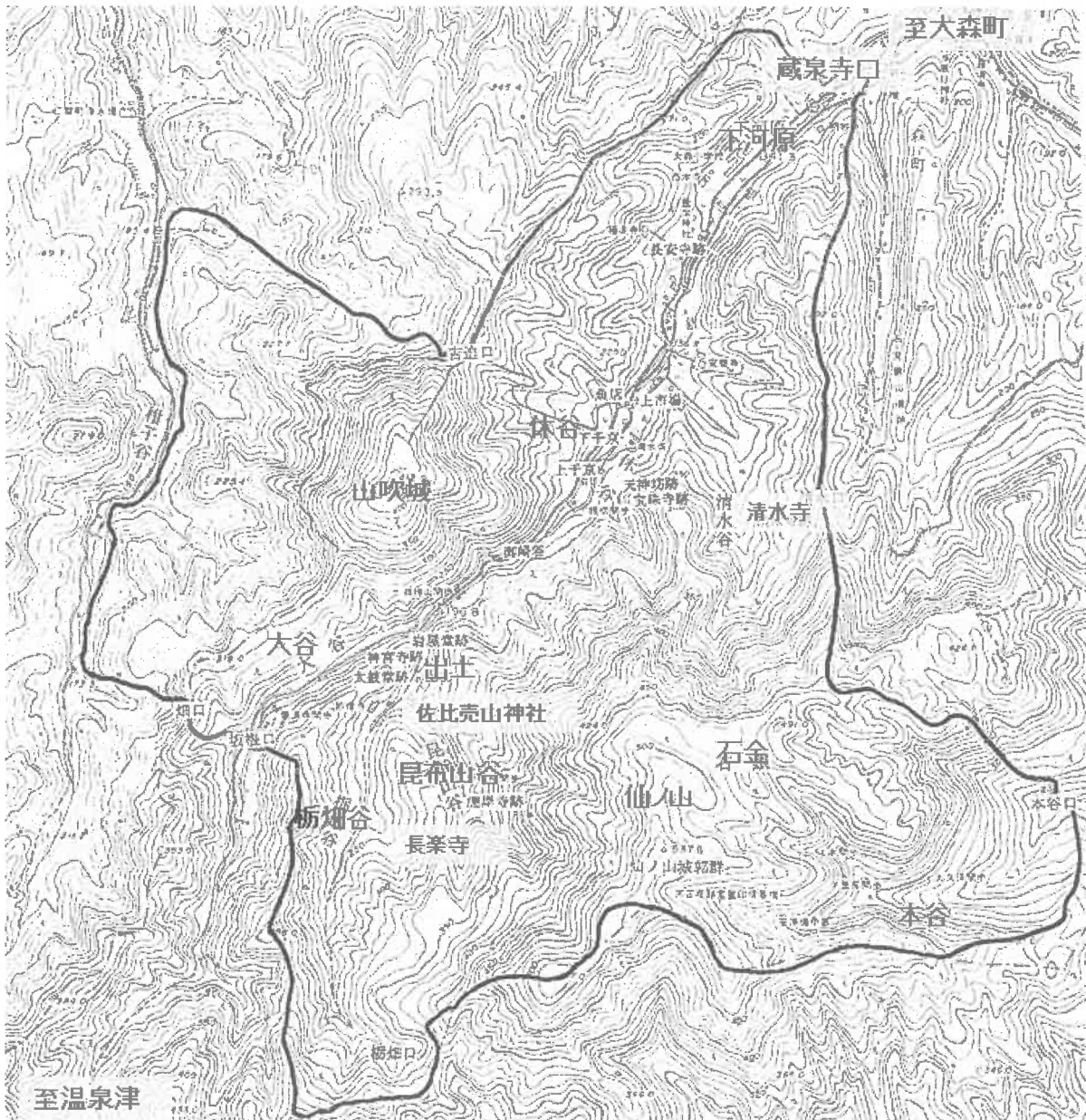
列島内外各地と独特な形で結びついた新たな中核都市の争奪

= 毛利氏が本城氏一族を殺戮してまで銀山の確実な掌握にこだわった理由

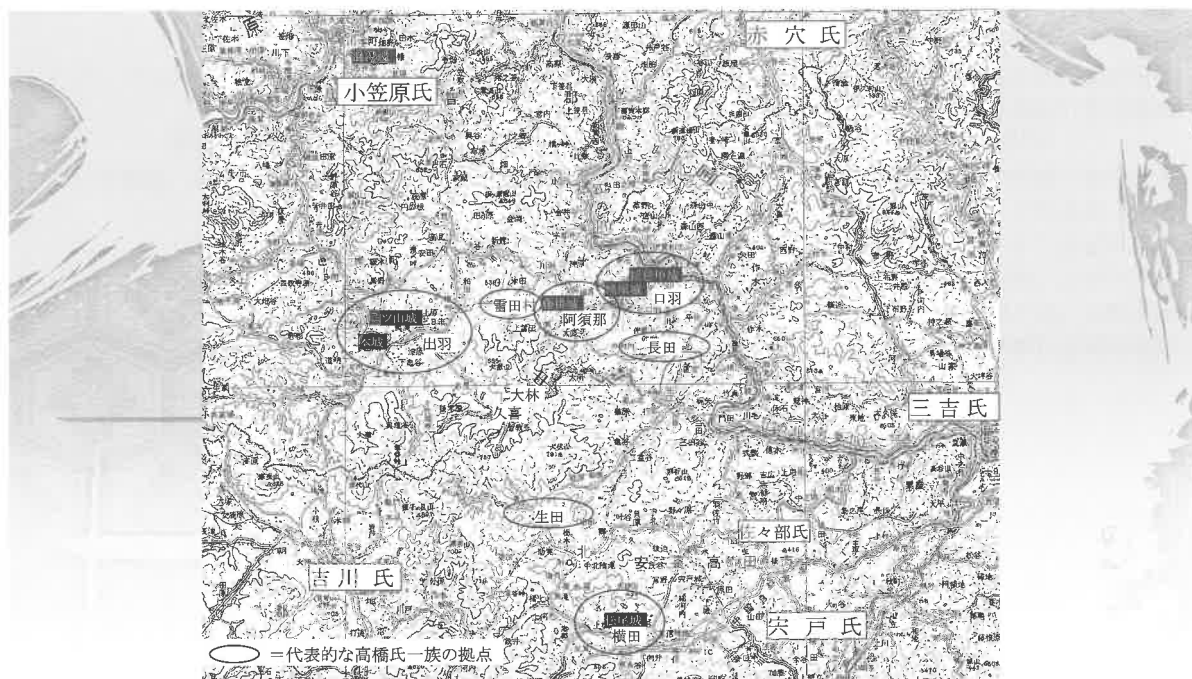
= 16c後半に争乱が大規模化し、統一政権の成立が要請されていく理由の一つ

【主な参考文献】

- 小葉田淳「石見銀山—江戸初期にいたる」(同『日本鉱山史の研究』岩波書店、1968年)
 岸田裕之『大名領国の構成的展開』(吉川弘文館、1983年)
 田中圭一「中世金属鉱山の研究」(『歴史人類』22号、1994年)
 岸田裕之『大名領国の経済構造』(岩波書店、2001年)
 松岡美幸「16世紀末期における毛利氏の石見銀山支配と鉱山社会」
 (石見銀山歴史文献調査団編『石見銀山 石見銀山論集』島根県教育委員会、2002年)
 秋山伸隆「戦国大名毛利氏の石見銀山支配」(岸田裕之編『中国地域と対外関係』山川出版社、2003年)
 池享・遠藤ゆり子編『産金村落と奥州の地域社会』(岩田書院、2012年)
 長谷川博史「毛利元就の山陰支配 一生田就光と福井景吉」(『島根史学会会報』50、2013年)
 長谷川博史「戦国期の地域権力と石見銀山」(『世界遺産 石見銀山遺跡の調査研究』4、2014年)
 本多博之『天下統一とシルバーラッシュ』(吉川弘文館、2015年)
 長谷川博史『中世山陰地域を中心とする棟札の研究』(科研報告書、2015年)



スライド1



スライド2

山吹城跡



平成30年度
石見銀山遺跡関連講座記録集

平成31(2019)年3月

発行 島根県教育委員会(文化財課世界遺産室)
〒690-8502 島根県松江市殿町1番地
TEL 0852-22-5642

URL <http://www.pref.shimane.lg.jp/sekaiisan/>

印刷 渡部印刷株式会社

